
ウィッチクラフト Ain Suph Aur

みえさん。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウィッチクラフト A i n S u p h A u r

【Nコード】

N 6 8 3 8 W

【作者名】

みえさん。

【あらすじ】

幼い頃から不運に巻き込まれる体質の久住明弥は、受験の日、不良に絡まれ、水道管の爆発事故にも巻き込まれる。慌ただしい中、明弥を庇うように入ってきた岩崎勇気は、明弥の「能力」は危険だと言い放ち……。現代日本を舞台にしたサイキックファンタジー。（ブログサイト掲載のものを加筆修正。軽度の残酷描写を含みます。重複投稿）

アイン A i n

生命の樹というものがある。

旧約聖書では楽園の中央に知恵の樹とともに植えられていたとされ、カバラにおける宇宙と人体を象徴する思想。

生命の樹は、10の球体と22の経で示される、クリスチャン・カバラで最も重点を置かれる象徴。その中で最も上には王冠を意味するケテルの球体が描かれる。

その更に上には全ての根源であるアインが存在する。

アインは「無」と示されることが多いが、それは人の言葉で表せるものでも概念で理解できるものでもない。すなわち神そのものを意味するとも言われている。

そのアインがケテルに近づくにつれ、人に理解しやすい存在となっていく。

アインのすぐ外側に、アイン・ソフ。その更に外側には最も、人の知性で捕らえやすい、アイン・ソフ・オウルがある。

生命の樹を登る人が、ケテルを越えアインに近付こうとした時に、最初に触れるのがそれだろう。

ある女は、そのことを「神の片鱗」と呼んだ。

触れれば全てのものが自然と一体になる超常能力、ウィッチクラフトに目覚めると言った。

無垢な彼女は信じた。

全てのものが神の力に目覚めることが本来あるべき姿なのだと。自然と一体になりアインに帰ることこそが本来の姿なのだと。

その思想が何を生み出すのかを考えず、ただ理想だけを追い求めていた。

そして、全ては彼女から始まった。

1 見える影は

バレンタインも当日ともなれば店頭に並ぶ商品も少し飽きたような色を見せ始める。平日と言うこともあってか、街中を歩く恋人達も学生が多い。バレンタインだからといって浮かれている人もそう多くは無かった。

久住明弥は人混みをかき分けながら待ち合わせたファストフードの店へと急ぐ。

今日は受験勉強の為の短縮授業だったが、ホームルームが長引いたために、約束の時間に遅れそうだったのだ。

中学生とはいえ携帯くらいは持っていた方が便利だな、と今更ながら実感した。

駅前通りの黄色い「M」の看板を見つけると、彼は少し走るようにファストフード店の中に飛び込んだ。

冷えたていた全身が急激に暖められメガネが曇る。少し暑いくらいだった。

いらつしゃいませ、という店員に少し頭を下げた彼は店内をさがした。

「あつくん、こっち」

川上ともみが手を振って自分の位置を示した。

店内の客の何人かが一瞬興味を引かれたように振り返ったが、すぐにそれぞれの食事に戻った。

明弥はマフラーを外しながら彼女の向かい側の席に座った。

「ごめん、遅れちゃって。待った？」

「ううん、平気。時間ぴったりだよ」

彼女は時計を見ながら笑う。

相変わらず元気そうな様子に明弥はほっとして微笑んだ。

昔から変わらない大切な人だ。

彼女との関係を問われると正直言葉に詰まる。

幼なじみ。

その単語が一番しっくりくるだろうと思う。幼い頃は良く一緒に遊び回っていたし、今でも頻繁に会っているのだからそれが一番言い得ているようでもある。

勿論、彼女との関係を示すのはそれでは不十分なのは分かっている。けれど、それが一番的確に感じている。

トモミは上機嫌な笑みを浮かべながら綺麗な包みを差し出す。

「はい、これ。バレンタインのチョコレート」

「うん、ありがとう」

「今年は自信作だよ」

彼女は弾んだ声で言う。

トモミはそれほど料理が得意ではない。けれど、毎年バレンタインは手作りで用意してくれる。それが暖かくて嬉しい。

綺麗にラッピングされたチョコレートを仕舞うためにカバンを開くと、別のチョコレートが転がり出て床に落ちた。明弥は慌ててそれを拾い上げる。

「んん？ 今のも手作りっぽいけど？」

「どうだろ？ クラスの女子がくれたんだ。ノート貸したお礼にっ
て」

「ふーん？ 何か妬けるなー。あつくん優しいから女の子にもてそうだし」

口を尖らせて言うトモミの言葉を明弥は真っ赤になって否定する。

「え？ そんなこと、ないよ」

「そんなこと、あるんだよ。あーあ、私もあつくんと同じ学校だったら面白かったのに」

明弥はトモミに確認をするように問う。

「高校は、西ノ宮だよな？」

「うん、同じ高校。受ければ、の話だけど」

「トモちゃんなら大丈夫だよ」

言うとき彼女は声を立てて笑った。

「まーね。あつくんより、頭は悪いけど、運だけは良いから」

トモミは昔から運が良い。くじ引きで欲しい物を当てたり、遅刻覚悟で学校に行ったら先生が遅刻して結果的に間に合ったり。他にも小さな事であるが彼女がいいな、と思ったことは大抵実現してしまふ。それだけの運を彼女は持っている。受験だって彼女が大丈夫だということそして実現してしまいそうだった。

「あつくんは頭良いから大丈夫だよね？」

「そんなに頭いいってわけじゃ……」

言いかけた時、店内がざわついた。

トモミががたん、椅子を鳴らして立ち上がる。

明弥も振り向いた。

ガラス越しに見える大通りに何か火の手が見えた。ちょうどはす向かいに位置する店から黒い煙が上がっていた。

「火事！」

彼女が声を上げる。

明弥は少し寒気を覚えた。

「………ね、見に行ってみようよ」

「え？ トモちゃん？」

まるで何かに取り付かれたかのように、彼女は外へと走る。コート着ることもせずに片手で掴んだ状態で、彼女はそのまま外へと飛び出していった。

彼女が飲んでいたコーラの紙コップをゴミ箱へ捨て、明弥も彼女の後に続いた。

外は既に人だかりが出来ていた。

道を挟んでこちら側と、向かい側。それぞれに野次馬達が集まっている。ガードレールから身を乗り出すようにしてトモミはその黒煙を見つめた。

「………ねえ、あれ、連続放火事件のやつかな？」

「トモちゃん、あんまりそっちに行くとか危ないよ」

「凄い、まるで炎が生きているみたい」

彼女に、明弥の声は届いていないようだった。

その目には燃えさかる炎と黒煙しか映っていない。楽しんでいる訳ではない。彼女にも自分にも火事に対してある思いがある。だから純粹に野次馬として見に来た訳ではないことを明弥は知っている。彼女がこだわる理由も理解出来る。

「トモ……」

彼女にもう一度呼びかけようとして、不意に、視線を感じた。

明弥は反射的にそちらを見た。

大通りの向こう側にたまっている野次馬の中に、見覚えのある姿を見つけて息を飲んだ。相手も、明弥を見て息を飲んだのがはつきりと分かった。

（……まさか）

四十前後の背の高い男だった。

男は躊躇うように視線を外した。が、すぐに彼の視線が戻される。

『危ない！』

誰かの叫びと、男の叫びが重なった。

はっとして明弥はトモミの腕を掴んで後ろに引っ張った。

車が目の前に接近する。

ぶつかった、と思った。

野次馬に向かって突っ込んできた車は、まるで明弥とトモミを狙ったように真っ直ぐ突き抜けてくる。

時間に見ればほんの一瞬だっただろう。明弥にはスローモーションの映像を見ているような感覚に見えた。

トモミだけでも助けようと思ったけれど間に合わない。そう判断したのは僅かの間。だが次の瞬間には明弥の目には予想していたのとは別の光景が見えた。

目の前に迫っていた車のボンネットがガードレールにぶつかるよりも前にひしゃげたのだ。

まるで見えない力で叩かれたように車とガードレールが大きく曲がる。

何かがぶつかり合う鈍い音と、タイヤの擦れる高い音。それが同時に聞こえた。

ばり、と音を立てて車が不自然な形に曲がり、ガードレールの上に乗り上げる形で静止した。

あと数センチ。

それでトモミと明弥は事故に巻き込まれていた。自分の目の前に曲がった車が見えた。何が起こったのだろうか。

判断しようとするが、頭が酷く混乱をしていた。

「び、ビクリした〜」

トモミの声で明弥は正気に戻る。

はっとして、彼女を見返した。

「トモちゃん、怪我はない？」

「うん、大丈夫。やっぱり私、運が良いんだね」

明るく笑う彼女に明弥はほっと胸をなで下ろす。

それも束の間、ばたり、と地面に何かが落ちる音が聞こえて明弥はぎくりとした。一瞬、トモミが倒れたのかと思ったが、そうではなかった。明弥たちの真後ろで女の人が一人倒れていた。

明弥達の側にいた数人が驚いたように彼女を見たが、事故を起こした車と火事と彼女、どれを最優先すべきか迷ったような素振りを見せた。

近くにいた明弥が彼女に近寄った最初だった。

「だ、大丈夫ですか!？」

髪から靴下まで全身黒づくめの二十歳前後の女だった。遠くで消防車が駆けつける音が聞こえた。

男はバイクに跨り事故の様子を見ていた。

バイクも巨大であれば、跨る男も負けない巨漢だった。

髪は赤茶に染められ、眼光は鋭い。

まるで獣のような男だった。

「……目覚めた訳ではないだろう」

男はぽつりと言った。

低く唸るような声だ。

彼の手には携帯電話が握られていた。手も大きいために何も持っていないようにさえ見える。

「だが間違いはない」

彼はにっ、と笑った。

まるで得物を見つけたような残忍さを含む笑い。

「あれは、インパクトだ」

2 それが彼の日常

店に入ると消火剤と色々なものが焼け焦げた匂いがした。

立ち入り禁止を示す黄色いテープをくぐって岩崎勇氣は店内を見回した。不審火の可能性が高い火事現場。中学の制服を着た少年が現場に入ってきたのを咎めないのは、すぐ側に刑事の姿があるからだろう。出火原因を調べている鑑識の男が一瞬怪訝そうに彼の方を見やったが、どうやら目撃者か店の関係者だと思われるらしい。

誰も彼のことを咎める者はなかった。

彼は周囲を見渡し嘆息する。

「確かに二件目と同じ気配が」

少年が言くと、背が高い刑事は頷いた。

目が細く、体格のいい彼は一見すると刑事と言うよりはヤクザの関係者のようにも見えてしまう。悪い顔つきではないのに、そう見えてしまうのは彼の眼光の鋭さにあるのだろう。

彼の名は伊東猛という。

まだ「若手」と呼ばれる刑事だったがその働きや感覚の鋭さはベテランの刑事とも肩を並べる程だと別の刑事から聞かされたことがある。少年もこの刑事が敏腕と呼ばれるのに相応しい人物であることを知っていた。

少年が伊東が評価に値する人物だと判断するのは、‘あの人’の部下を何年も続けているのだから。

「勇氣」

呼ばれ少年は振り向いた。

警官にしてはラフな服装をした女が近付いてきた。何やら不機嫌そうだった。

そう、伊東はこの人の部下を長い間続けている。

勇氣は彼女を示す名を読んだ。

「母さん」

昨日もやはり家には戻っていないようだ。或いは勇気の眠っている間に出入りしたかと思っただ、彼女は出かける時に着ていた服ではなく、着替え用に持って言っている服を着ている。

彼女の外見は若い。勇気がむしろ大人びた外見をしているためか、親子というより姉弟に見えるだろう。だが確かに勇気を産んだのはこの女刑事だった。母親らしいところはあまり見あたらないけれど、それだけは確かな事だった。

眠たそうな顔で彼女は言った。

「学校は？」

勇気は苦笑した。

その横で伊東が吹き出した。

「その様子だと忘れていきますね。三年生は受験勉強のために短縮授業なんですよ」

「そうだったかしら？」

悪びれもしない彼女に伊東は皮肉の籠もった言葉を返す。

「家に戻る暇ありませんから忘れるのも無理ありませんが、あまり度が過ぎるとひねくれますよ」

それは勇気に対しても皮肉だ。

勇気は軽く男を睨んだ。母親も伊東を睨む。

そんなことで動じるようならば既に部署を変えてくれと嘆願書を提出しているだろう。さすがにこの破天荒と呼ばれる女刑事の部下を何年もやっているだけのことはある。彼は顔色一つ変えなかった。

顔色を変えず、話を元に戻す。

「それで、これは？」

勇気はその質問に頷く。

「こつち側の事件だよ」

言つと母親は興味があるのか無いのか分からない顔で言う。

「そう。……表の事故は見た？」

伊東が勇気の代わりに頷く。

「はい。愛さんが来る前に少し調べました。火事に気を取られた脇

見運転というのが見解ですが、奇妙な点が」

上司の名前を「愛さん」と親しげに呼ぶのは伊東が親密な関係にあるからではない。実際親子と懇意にしていたが、それが理由で彼女を名前で呼んでいるわけではない。彼女は苗字や役職名である「警部」と呼ばれるのが嫌いなのだ。

だからよほど改まった席でない限り、彼女はみんなにそう呼ばせている。

それを通してしまふのだからおかしいものだ。

キャリアでもなく、女で、しかもこの若さで警部と呼ばれているのだから彼女の腕は確かだった。その実力が認められているからこそ彼女のわがママが通ってしまう。彼女を中傷する側から言わせれば「警察庁のお偉いさんの娘だから」ということだが、彼女はそれを一笑で吹き飛ばす。

何であれ、彼女の肝が据わっているのは確かなのだ。

「私も奇妙に思えるわ。あれだけ車がぐっちゃなのに、ガードレールはただ曲がっただけ。運転手が軽傷を負っただけ。奇跡よね。勇気は何か感じた？」

「ガードレールのこつちには悪意はなかった」

含みのありそうな言い方に愛は少し眉を跳ね上げた。

問うように見つめられ、勇気は続ける。

「見間違いかも知れない」

「いいわ」

「一瞬だけ運転手のこの辺りに赤黒い影が見えた」

彼は蟀谷を叩く。

勇気には人には見えないものが見える。気配や影と言った言葉で代用しているが、彼は人の纏うオーラというものや、幽霊や思念のようなものまで感じ取ることが出来る。その中で赤黒い影は「悪意」の事だ。

それは俄には信じがたい事であったが、伊東は彼の能力を信じていた。彼にはそれだけの実績があるのだ。見えていなければ説明の

付かないような事柄を彼は言い当て、それが幾度と無く捜査を助けているのだ。勘で言っているのであればそれもまた才能だろうとさえ思えるほどだ。

母親といい、息子といい、岩崎親子は不思議な親子だと思う。

伊東は問うように首を傾げた。

「それはどう判断すれば？」

勇氣は首を振った。

「俺の見間違いかもしれないし、運転手は野次馬の中の誰かに対して明確な殺意があったのかも分からない。ただ、怪我人がない以上はただの事故だ」

「そうね。ともかく、この火事と事故は無関係なのね？」

母親の問いに勇氣は頷く。

「その点を接点と考えるとしては薄すぎる。偶然同時期に起きたと思う方が正しいと思う。ただ、このところ多い気がするんだ」

「多い？」

「こういう類の事件が。全部が全部というわけじゃないけど、根本で繋がっている可能性を考えた方がいいかもしれない」

根本ね、と愛が呟く。

「忠告として受け取っておくわ。……ところで、今日は意地でも帰るから」

「伊東さんも？」

問うと伊東は頷く。

「はい、ご一緒させて頂きます。夕食は俺が作りますが何か食べたいものありますか？」

勇氣に向けて問いかけられた言葉だったが、愛の方が先に答える。

「カレー、この間、CMでやっていたやつ」

ちらりと伊東が勇氣を見る。

彼はそれでいいと頷いて見せた。

「八時くらいには帰れると思います」

「俺もそのくらいになると思う」

伊東は頷いてから外を示す。帰れ、と言ったのではなく車で送る
と言うような素振りだ。勇氣は首を振ってその申し出を断った。
火事の現場から外に出ると、冷たい風でぐんと身体が冷えた。
軽く身を縮め、寒さをこらえる。
目の前を車が通過した。

「……っ！」

勇氣は息を飲む。

赤黒い影が見えた。

車を運転する男に激しくまとわりつく赤黒い影。どこか血の匂い
の混じる呪詛の匂い。

人がいれば、悪意を生む。激しい悪意は影を生む。

だから、赤黒い影を見ることが消して少ない訳ではないのだ。

ほんの少しの人の感情の差で、普通の人でも見えてしまうことが
ある。

しかしあそこまで明確な影を見るのはあまり無かった。

喉の奥に酸っぱいものを感じる。

誰かに憎まれているのか、それとも憎んでいるのか。

激しい憎悪をまとわりつかせた車はそのまま青信号の交差点に向
かって走り抜ける。

こみ上げてくる吐き気に一瞬口元を押さえた。

（大丈夫）

大丈夫だ、と自分に言い聞かせる。

こんなものを全て気にしていたらきりが無い。分かっている。だ
から、気にはしていないものだ。

勇氣は背筋を正すと、車が走り抜けた方と反対側に向かって歩き
始めた。

喉の奥が酸で焼かれたように痛かった。

3 偶然でなければ運命

脳を働かせると糖分が欲しくなると言うのは本当の事らしい。

貰ったチヨコレートを食べながら明弥は英語の問題集を相手に奮闘していた。英語の問題自体は難しいことはない。ただ、単語を覚え切れていないために苦勞するのだ。分かっているが、今は単語を覚えるよりも先に問題の傾向に慣れたかった。

トミミから貰ったチヨコレートの中に同梱されていた手作りのお守りを傍らに置いて彼は英文を読み始めた。

あの火事から三日が過ぎる。

明弥の脳にはもうあの火事と事故の記憶は薄らいでいた。幼い頃から何かと事故に巻き込まれやすい体質の明弥にしてみれば、自分が巻き込まれた訳ではない事故のことはニュースで見た事件とあまり変わらない。興奮して勉強が手に付かない程のことでもないのだ。どたどたと階段を上がってくる音が聞こえて明弥はペンを止めた。ノックもせずに突然ドアを開かれても彼は驚きもなかった。

「ノックぐらいしなよ、マサ」

振り向いて言うつと弟の政志は悪びれる様子もなく頭の後ろに手を回した。

今年の四月で小学校六年生になる政志はちょうどやんちゃ盛りの年代だ。注意してもあまり効果ないが、明弥は根気よく続けることに決めた。

政志は少し口を尖らせて言う。

「兄ちゃんさー、そんなに勉強がんばらなくても良いだろう？」

「西ノ宮はそんなに楽じゃないんだよ」

「ランク落とせばいいのに。最近兄ちゃん勉強ばっかでつまんねーの」

言って政志はベッドに座る。

構ってほしいのか、と明弥は息を吐く。

確かにこのところ受験勉強ばかりであり政志と遊んでいない。受験が終わったら埋め合わせしようと思うけれど、それまでストレスを溜めさせてしまったら可哀想だとも思った。

兄弟には姉もいるのだが、少し年が離れているのと性別の関係もあって、政志は自分に良く懐いている。時々憎まれ口を叩くが、やっぱり甘えてくる弟は可愛いものなのだ。

「変更できないしね。それに西高じゃないと意味ないんだって」

「……トモミ姉ちゃん？」

政志は机の上のチョコレートを手につまみながら言う。

トモミが行くから自分もそこに決めたのか、と問いかけているらしい。からかい半分、ご不満半分と言うところか。

何を考えているのか想像がついて明弥は苦笑した。

「そんなんじゃないよ」

「べつつにいいけどね」

拗ねたような声。

トモミと政志、どっちが大切なのか、と問われているようだった。

ご機嫌取りも大変だが、別に嫌でもないのだから厄介な所だ。

「映画」

「え？」

「春のアニメ祭り、俺の入試終わったら見に行くだろう？」

にへら、と政志の顔が緩んだ。

「兄ちゃんがどうしてもって言うならつき合うよ」

憎まれ口だが、緩んだ顔では憎さは感じられなくなってしまった。

どうしても、と明弥は笑った。

「あ、そうだ、兄ちゃんミモリって女の人知ってる？」

「ミモリ？」

覚えが無い。

「知らないけど、その人がどうかした？」

「兄ちゃんに電話」

「こらこら、そう言うのは先に言えって」

「忘れてた」

べ、と舌を出す弟の頭を小突いて、明弥は一階の電話の所まで急いだ。

相手を随分待たせてしまったのではないだろうか。

階段の最後の数段を踏み外し、半ば滑り落ちるような形で一階に下り慌てて受話器を上げた。

「すみません、お待たせしました。明弥ですけど」

ばたばたした音を聞かれただろうか。

くすり、と笑うような声が受話器の向こう側から聞こえてきた。

『久住明弥さん？』

柔らかな女の人の声だった。

明弥は戸惑った。

「あ、はい……えっと……」

『私、ミモリユリコ、水の守る神祐の里の子で、水守祐里子と言います。この間救急車で運ばれた時、付き添って下さったそうで』

「え？ あ、ああ……あれ、でも何で電話番号……」

『病院の方に聞きました』

「ああ、そうか」

明弥は思い出しながら呟いた。

三日前の事故の時に、明弥達のすぐ側で倒れた女の人だ。救急隊員が駆けつけた時に、たまたま側にいた明弥が姉弟と間違われて病院に付き添うことになったのだ。あの時確か、一応身元の確認のために名前と住所電話番号を書いた。

「えっと、その……目が覚めるまでいらなくて……大丈夫でしたか？」

『はい、おかげさまで』

よかった、と自然に言葉が漏れた。

電話の向こうの彼女はどこか微笑んでいるような声で言った。

『それで、お礼がしたくて電話したんですけど』

「あ、そんなこと気にしないで下さいよ。別にそんなつもりだった

訳じゃないですから」

『そう言うと思っていました』

彼女は当然というように言って続けた。

『でも、それでは私の気が済まないんです。だから、一度だけお助けします。』

「……………はい？」

『あなたの声を聞いて確信しました。あなたは必ず私の助けが必要になる。ですからその時に。もちろん無料ですよ』

「あの、話が見えないんですが、水守さんは弁護士とか探偵とかの仕事をしているんですか？」

いいえ、と彼女は答える。

明弥は首を傾げた。

彼女の言っていることが全く分からない。

『いずれ、全て分かります。なら、少し謎の方が楽しいと思いませんか？』

「え？ あ……………」

少しどころの謎ではない。

水守の話はどうも要領を得ないし、分かりにくい。助けが必要になるとはどういうことで、どうやって水守が助けるというのだろうか。

『出会ったのが偶然でなければ運命です。……………それではいずれ、こちらから連絡をします。どうそ、お気を付けて』

「え、ちよつと！」

がちやん、と一方的に電話が切れた。

受話器の向こう側からはツーツーという電子音しか聞こえてこない。

ひょつとして、少し特殊な思考の持ち主と関わってしまったのだろつか。別に嫌な感じのする人ではなかったが、正直戸惑ってしまった。

明弥は受話器を置いた。

考えても答えが出ないなら考えない方がいい。

からかわれたのならそれでいいし、そうでないのなら彼女の方が
らまた連絡をくれると言った。だったら考えるだけ無駄なことだ。

「……さて、勉強し直すかな」

彼はぐつと背伸びした。

こう言う時は、あまり気にしない性格で良かったと思う。

だが、言葉の裏に隠された意味をもう少し真剣に考えていればと
後々後悔することになる。その時の明弥には知る術もなかった。

4 思い出の匂い

男は小児病棟への入り口をくぐった。

190センチを軽く超える立派な体格の男の髪は赤い。肉体は鍛え抜かれ見る者を圧倒するほどの気迫を備えた男だ。目つきは鋭く、小児病棟はおろか病院に入っただけでも不審者と疑われそうな外見をしていたが、スタッフや長く入院している子供達はちらりと見やっただけで気にする者はいなかった。

皆、彼が見舞いの一人である事を知っているのだ。

「南条さん」

ナースセンターにいた若い女看護師が男の姿を認めて声をかける。彼はカウンターに備え付けられている見舞い受付用の紙を取り出しながら僅か表情を緩ませた。

「ああ、あんたか」

彼女は男を見上げて微笑んだ。

南条太一の身長は高い。看護師、木村早希の身長は低い方では無かったが、どうしても見上げる形になってしまう。

「いつもお疲れ様です。鈴ちゃんなら図書室の方ですよ」

「ああ、ありがとう。……それと、この間のチョコ旨かったよ」

早希は微笑む。

「良かった。南条さん甘いモノ苦手なんじゃないかって思ったんだけど」

「そんなことねーよ、俺、甘いモン結構好きだから」

そう言った彼の表情は優しい。

同僚達の中には彼の外見だけを見て怖がる子もいたが、早希はこの厳つい男に好意を持っていた。元々彼女の父親も彼のように大きい人だったからそう言う人に対して免疫があるのだろう。最初に見た時にはさすがに驚いたが、実際話をしてみて彼が優しい人であると分かった。妹想いで、ぞんざいな所はあるけれど、本性は人懐つ

こい犬のような人だ。

外見のせいで勘違いされて苦労してきたのではないかと早希は勝手に思っていた。

不意に男の手が彼女の頭に伸びる。

「え？」

突然髪を捕まれ彼女は動揺した。

太一は彼女の髪の一房を取り、キスするように口元に押し当てた。

「ああ、やっぱりあんただ」

「え？」

「シャンプー、変えただろう」

ほんの僅か、彼の厚い唇に笑みのようなものが浮かぶ。

「え、あ、はい。良く分かりましたね」

早希は慌てて彼から離れる。

顔が、赤くなっていけないだろうか。

「入ってきた時から花の匂いがしていたんだ。あんたの近くで一層強くなった」

「……嫌いですか？」

「いや、懐かしい匂いだ。俺の昔住んでいた庭の花の匂いがする。

俺は好きだ。あんたに似合っているよ」

さらりと言われてしまった。

遊び慣れている風でもありながら、自分だけに特別そうと言われているような気がして、早希は戸惑った。

こんな言われ方をされてしまえば勘違いしてしまう。

だが早希はこの南条太一が掛け値なしで本気で笑った所は見たことがない。微笑んだり、妹の鈴華に対しては目一杯の笑顔を見せるが、どこか無理をしているようでもあった。

だから余計に彼が気になる。

入院患者の兄、それ以上の感情を彼女は抱いていた。

こんな事を思ってもいけないとは思うが、鈴華のもう一人の兄が

見舞いに来るよりも、彼が見舞いに来る時の方が嬉しい。彼の事を
もっとよく知りたいと思う。

やはり恋をしているのだろう。

話を逸らすように早希は彼を見上げた。

「……な、南条さんってピアス片耳だけしかしてませんよね、何か
理由があるんですか？」

尋ねると彼は左耳に触れた。

ループのピアスが僅かに揺れる。

「昔の名残だ。前はもつと沢山ついてたんだが」

「……女の人にあげたんじゃ」

ぶっ、と彼は吹き出す。

早希は真っ赤になった。

「あんた、博識だねえ」

「すみません、今の忘れて下さい」

「てつきりゲイとか言い出すかと思った。そうじゃないし、贈った
女もいない」

彼は笑いを堪えながら言った。

男の人が右だけにピアスをするのはゲイの証だという。彼の右耳
にはピアスの存在はなく、それを疑った訳ではない。彼はそれを理
解していた。そして、左耳だけにピアスをする意味も知っていた。
知っていて敢えてそうするのは彼女など要らないと言う牽制だろ
うか。

それとも。

「あ、来てくれたの？」

呼びかけられて太一は振り向く。

「鈴華」

男の顔に今までとは違った優しい微笑みが浮かぶ。

どうあっても、妹には敵わない。

彼の妹は小学校五年生だ。身体が弱く入退院を繰り返している。

同年代の子供よりも小柄で幼く見えるが、落ち着いた雰囲気逆に

大人びても見せた。彼も、彼の兄もこの妹のことを溺愛しているように見える。早希にとっては患者の一人でしかないのだが、それでも彼女は礼儀正しく良い子だと思う。

彼女は図書室から借りてきたのか少し難しそうな本を抱えていた。太一はそれをまとめて片手で掴んだ。

「病室までお持ちします、お嬢様」

気取った彼の挨拶に鈴華はにこにここと笑う。

「何か変」

「そうか？」

「うん、変。……よね？」

彼女に振られて早希は吹き出す。

ふてくされたように太一は口をへの字に曲げた。

本当に良い子だ。病気で怖い思いも沢山しているのに、明るくて不満や愚痴を漏らすことはない。良い子過ぎて逆に可哀想な位だ。

彼女に早く治って欲しいと思いながらも、ずっと入院していて欲しいと思う自分がいることに早希は辟易とした。

「誰か来ていたのか？」

太一は病室に向かいながら鈴華に問う。

彼女はうんと頷いた。

「クラスメートの男の子」

「最近、良く来るな。どんな奴だ？」

「優しくて良い子よ。少し太一くんに似ているの」

「俺に？」

太一は怪訝そうに彼女を見た。

彼女はくすくすと笑う。

こんな図体のかい小学生がいるのだろうか。確かに最近の子供は発育が良いと聞かすが、さすがにこんな威つい小学生がいたらさぞかし目立つ事だろう。

鈴華の事だから、何をどう捕らえて似ていると言ったのか分らない。

会ってみた方が手っ取り早いだろう。

「……太一君、腕のところ、どうしたの？」

「ああ、三日ほど前にちよつとな」

彼は安全ピンとビスで止めたジャケットの袖を見せながら言う。

「破けたから留めたんだが、変だったか？」

「そういう服に見えなくはないけど……買い換えたら？」

うーん、と太一は唸る。

「これ、気に入ってるんだよな。嬢が選んだ奴だし」

「今度、外泊許可とれたら買いに行きましょう。腕を組んだら痛そうなもの」

「ん、じゃあ、またお前が選んでくれよ」

笑顔で言う、彼女はうんと笑って頷いた。

自分の腰程までしか身長のない少女の頭を撫でて思う。

この少女が他の子供達のように自由に歩けるようになるのはいつだろうか。せめて自分の体力の半分くらい分けてあげられれば。

今はまだ何も出来ない。

（だがいつかは、きっと）

そのためには、手段を選ぶ必要はない。

優しいこの子は泣くだろう。

それでも、この子の為なら何だって出来る。

何だって。

5 入試

バレンタインに貰ったトモミのお守りは案外と良く利いた。

午前中の試験は思っていたよりも上出来だった。

午後も続く試験に備えてトイレを済ませた明弥は手を綺麗に洗ってからポケットからお守りを出した。ピンク色の布を袋状に縫い合わせて「合格！」という刺繍が入っている。所々ほつれているが、それがまた嬉しかった。

不器用なトモミが、一生懸命作ってくれたものだ。

嬉しくって、頬が緩む。

「あ、ごめんなさい」

入ってきた男子生徒にぶつかり明弥は慌てて謝る。

制服を見てぎくりとした。

他校の、生徒だ。

受験生だというのに妙にガラが悪い。制服を着崩して、靴も中途半端に履いている。リーダーとおぼしき人物の後ろに、二人見えた。本当に西ノ宮の受験生なのだろうか。

「何だ、お前、にやけて気持ち悪いな」

「すみません、通して下さい」

明弥はぐつと表情を引き締める。

本能的に絡まれると思った。

入学試験に来ているのだから揉め事は起こしたくない。

「お前達、何か聞こえたか？」

リーダー格が言う。

にやにやと笑って後ろの男たちが首を振った。

（まずいな…… やっぱり絡まれたか）

こういう連中に絡まれる事は良くある。だから絡まれること自体

は慣れていたがやり過ごすことに慣れている訳ではない。

自分は昔から運が悪いのだ。

事故や事件もそうだが、他人より巻き込まれる率が高いたけで、今もまだ五体満足に機能しているのだから別に不幸だとは思わないが、何もこんな時まで絡まれることはないじゃないかと少し嘆いた。人生を左右する大事な試験なのに。

明弥はぐっとお守りを握った。

後ろに控えた一人がそれに気付く。

「こいつ、何か持っているぜ。……何だこの不格好なお守りは」

「ちよっ……返して下さい！」

「ゴミだろ？ ゴミはゴミ箱に捨ててやれよ」

お守りが、取り返そうとして伸ばされた明弥の手をすり抜けてりーダーの手に渡る。

「汚物だろ、だったら便器の方がいいんじゃないの？」

「まっ……」

後ろから二人に捕まれた。

目の前で見せつけるようにトモミのお守りが揺れる。

お守りが、小便秘の中へ、放り込まれる。

トモミの気持ちちが。

踏みにじられる。

彼女なら笑って、むしろ明弥の事を心配してくれる。だけど、

（嫌だっ）

止めてくれ。

声は、言葉にすらならなかった。

腹の奥底から、何かがせり上がるように出てきた。

それだけは、嫌だ。

「っ！！」

叫んだ。

声にならない声で。

刹那。

「!？」

ドン、と何かが衝突したような、破裂したような音が響く。
大きく揺さぶられて男たちと共に明弥はトイレの床にしゃがみ込んだ。全身が水浸しになるのを感じる。トイレの水道管から水が止めどなく噴き出していた。

破裂したのだ、と明弥は悟る。

「……………つてえ」

明弥を掴んでいたうちの一人が頭を押さえて蹲った。

「……………」

何が、起こったのだろうか。

ジリリリリ、と激しい警報の音が鳴り響く。

水に流され、トモミの作ったお守りが明弥の手元まで流れて来る。

明弥はそれをぐっと握り込んだ。

「お前達、何をしたんだ！」

咎めるように叫んで入ってきた教師が、その惨状を見て絶句する。
水道管の破裂したトイレの中は水浸しになりその中に四人の男子生徒達が蹲っている。

何が起こったのか、現場に居合わせた本人達すら分からない。

後から来た教師達もまたどうして良いのか判らない様子だった。

元栓を止めてきます、と誰か一人が管理部屋へと走っていった。

やがて、吹き出す水は弱まった。

「お前達、一体何を……………」

「そいつが！ そいつが何かしたんだ！」

リーダーが明弥を指差して叫ぶ。

「そいつが何か叫んだ瞬間にこうなったんだ！ 何かしたならそいつが……………」

「無関係だと思いますよ」

冷静な声が聞こえた。

明弥は視線を上げる。

「今日は寒気が凄いらしいですから、水道管が凍って破裂したんでしょう。この辺じゃあまり無いですけど、長野とか寒い地域の方では時々あるようですから」

彼も受験生だろうか。

トモミと同じ学校の制服を着た男子だった。

落ち着きすぎている判断に教師が戸惑ったような声を上げる。

「君は……」

「岩崎勇気。受験生です」

戸惑う教師の後ろでもう一人が「警察庁の」と耳打ちをした。一瞬驚いた素振りを見せたが思い当たった所があるのか、納得したように頷いた。

岩崎は水浸しのトイレの中に足を踏み入れ、なおも喚き散らすリダー格の男の横に屈んで何やら耳打ちをした。

蒼白になり、男は喚くのを止める。

何を言ったのだろうか。

訝っていると、いつの間にか入ってきた教師達に立つように促されタオルを渡された。タオルの暖かさに、ようやくからだが冷え切っている事に気付く。

春に近いとはいえ、先刻岩崎の言った通り、今日は寒気が襲っている。その中で水浸しになったのだ。

とてつもなく寒かった。

ガタガタと震え出す明弥を見て、誰かが「保健室へ」と言う。

「俺が付きます」

「ああ、じゃあ岩崎君、頼むよ」

「はい」

明弥の見えないところで何か会話が交わされ、震える彼の肩を誰かが抱いた。恐らく岩崎だろう。彼に促されるままに歩きながら明弥は大勢の人に見られている気配を感じていた。

がやがやと騒がしい。

教室に戻れ、と教師達の声に混じって、あの人格好良い、と呟く

女子の声が聞こえる。

明弥は岩崎を見上げた。

確かに端正な顔立ちをしている。

「お前」

岩崎の目が明弥を睨む。

「自分が、何したか分かっているのか？」

「……え？」

意味が分からず問い返すと彼は小さく舌打ちをする。

「分からないフリか、それとも本当に知らないのか。どっちにしたって自覚した方がいい。お前のそれは危険だ」

「え…？ それって？」

遮るようにながら、と音が響く。

暖かい空気と保健室の匂いがした。

保険医らしい女がどうしたの、と驚いたように声を上げた。岩崎が何かを説明して、ストーブの側に明弥を座らせる。明弥の身体の震えが強くなった。ストーブの熱気で身体の冷えがますます強調されたのだろうか。

彼が落ち着き、身体の震えも止まる頃、岩崎の姿は保健室には無かった。

代わりに先刻の三人組が明弥同様に震えていた。

6 赤毛の獣

「映画、アニメじゃなくても良かったの？」

「うん、洋画が見たかったんだ」

政志は大切そうに映画のパンフレットの入った袋を撫でた。

映画はアクションもコメディもなく、小学生が見るにはつまらないような内容だと思えたが感動系の作品でそれなりに面白かった。政志は字幕を追うのがやっとといった様子だったが、それなりに満足したようだ。

普段はアニメばかり見ているが、背伸びをしたいのだろう。明弥にも経験があるから少し微笑ましく思えた。

見終わった後、マクドナルドにでも行く予定だったが、政志の要望でカフェに入った。

白い椅子とテーブルに、青緑色のパラソルが差されたテラスがあるカフェだった。

春の暖かな日差しの落ちるテラスで暖かい飲み物を注文する。これで、隣のビルが工事中でなければ風景も良かっただろう。

「……にが」

飲み物を口にして政志が表情を歪める。

「ほら、やっぱコーヒーよりこっちの方が良かっただろう？」

言って明弥はホットココアを政志の前に差し出す。

渋い顔で彼は受け取った。

「ごめん」

また意地を張ったような言葉が返ってくるだろうと予測していた明弥は思わぬ素直な態度に目を丸くした。

「……やっぱ兄ちゃんみたいになれないよな」

「ん？ 何か言った？」

「何でもない。それより、高校合格オメデトウゴザイマス」

「うん、ありがとう」

試験の後、風邪で寝込むことになったが、入試はまともに受けられたし、出来も良かった。おかげで明弥は高校合格を果たした。トモミもどうやら合格したようだ。これで春からは二人揃って西ノ宮高校の生徒になるのだ。

クラスは同じになるとは限らないけれど、トモミと同じ学校に通えるのは少し嬉しかった。楽しい三年間になるだろう。

「んー、だけどプレッシャーだなあ」

「何が？」

「俺も西ノ宮行けっってお母さんに言われそうだし」

確かにそれは言われそうだ。

「政志は、政志の行きたいところに行けば良いんだよ。奈津姉だって散々揉めて女子校に行っただし。状況違うの確かだけどね、無理をする事はないんだよ」

「行きたいところが特にないから迷うんだよ」

「進路決めるのはまだ先なんだしゆっくり悩めばいいよ」

明弥は取り替えたコーヒーを口にする。

政志は複雑そうな顔をする。

「そんな頃は兄ちゃんだつて……」

きらり、と何かが煌めいた。

工事中のビルの屋上。

訝しんで顔を上げた瞬間、彼の意識は遠のいた。

ほんの僅か彼の記憶が飛ぶ。

何も分らない。

気が付くと明弥の目の前には鉄筋が突き刺さっていた。破壊されたカフェのテーブルや椅子が、辺りに散乱している。

ざわざわと周囲がざわめいた。

「？」

「……兄ちゃん」

怯えたような、か細い政志の声が腕の中から聞こえてきた。

ちょうど弟を抱きかかえるようにして明弥は鉄筋を見ていた。
先刻まで手にあったはずのコーヒーはもう手元がない。

何が起こったのか理解できなかった。

状況すら分からない。

「今……何が……」

周囲の人の言葉でビルの屋上から鉄筋が落ちてきたことに気が付く。

それはまるで明弥たちを狙うように彼らのいた場所に落ちてきたのだ。怪我はないのか、と問いかける男の質問にようやく自分が間一髪のところまで政志を連れて逃げたことが想像できた。

一瞬の記憶が全く無かった。

けれど、確かに今明弥は政志を抱きしめて壊れたテーブルから離れて座り込んでいるのだ。どう行動したのか全く覚えていないけど、助けなければ、と思ったのだけは強く感じていた。

ぐちゃぐちゃになったテーブルを囲んで人々が口々に何かを言っている。衝撃が強かったのか隣のテーブルにいた人達も何人が飛ばされて倒れていた。

「政志、怪我は？」

「ない……けど、兄ちゃん、今……」

「大丈夫、何も心配するな」

怯えた声を上げる政志に明弥は優しく言う。

こういった事故に巻き込まれることは良くあった。大抵一人でいる時に、上からものが落ちてきたり、通り魔に襲われたり。明弥にとっては小さい頃から幾度と無く遇っていることだから珍しい事ではないのだ。

けれど、政志にとっては大事だ。

あのままあの場にいたのなら、二人とも命はなかったのだ。

バレンタインの日に起こった事故を思い出す。

あの時も何事も無かったが、トモミが近くにいた。

自分がいくらかんな事故に巻き込まれても構わない。けれど、誰

かが一緒にいる時、誰かを巻き込むような事故になってしまつのなら、この巻き込まれやすい体質が呪わしい。

そう言えば岩崎は言わなかっただろうか。

明弥のそれは危険だから、自覚した方がいいと。

それは、このことを言っているのだろうか。

（危険を、引き寄せる体質……？）

がん、と鉄筋が鳴った。

また何か上から降ってきたのだろうか。

思った瞬間、明弥は凍り付いた。

周囲から耳を劈くような悲鳴が上がる。

「っ……………！！」

政志が身をよじって明弥の首に巻き付いた。

獣が、いた。

巨大な犬のような生き物。

犬ではないと思ったのは大型犬を軽く超える大きさと、その毛並みが赤銅色をしていたからだ。

まるで。

まるで、赤毛の狼。

ぐるる、と狼が唸る。

明弥を見つめ、まるで獲物を見つけたかのように。

「……………政志、逃げるんだ」

「……………で、でも、兄ちゃん……………」

身体が震える。

だけど、政志だけでも守らなければ。

「いいから、逃げるんだ。あいつは、多分、俺を狙っているから」

「え……………」

戸惑った政志の声。

どん、と彼を人混みの方に押しやって、真逆の方向に明弥は走り出した。それを避けるように人混みが割れる。

危険を引き寄せる体質。

ならば、あの赤毛の狼も自分を追ってくる。

その、予測は正しかった。

赤毛の狼はものすごいスピードで明弥の背中に飛びかかった。

「……っ!!」

はじき飛ばされるようにして押し倒される。

見えたのは、鋭い牙と、犬とは思えない刃物のような爪だった。

7 狼の爪

死ぬ。

そう思った。

目を閉じている暇さえなかった。

刃物のような爪が顔面に向けて振り下ろされそうになっていた。

「……!？」

だが、その爪は一向に明弥の顔面に落ちてこなかった。

赤毛の狼は、まるで襲うか否かを葛藤しているように悲痛な呻り声を上げている。その姿が、まるで人のようなシルエットを帯びて見えた。

犬のような形のはずなのに、四つん這いになった人のような形が見える。

一瞬だった。

けれど、確かに赤毛の獣の顔が、人の顔に見えた。

苦しむような、男の顔。

（……何？）

がつん、と音がして不意に身体に掛かっていた重みが消える。

「怪我はないか！」

男に助け起こされ、明弥は椅子で殴られた様子の赤い狼の姿を見た。

明弥は顔を上げて男の方を見る。

四十代後半くらいの目つきの鋭い男だった。格闘技の心得のある人だろうか。スーツを着ていたが、その上からでも男の筋肉が感じ取れた。

「君は、早く逃げなさい」

「だけど……」

「若い子が、こんなところで命を落とすもじゃない。おじさんは警官だ。少しはこういうのにも慣れている」

男は冷静そうに言った。

先刻、自分が政志に取ったのと同じ態度。
だから分かる。

こんな事に、慣れている人なんていない。

狼が起きあがった。

意識をはつきりさせようと首を振っている。

「逃げなさい」

明弥は首を振った。

駄目だ。

あれは、どんなに逃げたって明弥を襲ってくる。

今ここで、この刑事さんに対処を任せたとしても、変わらないだろう。犠牲者を出すなら、自分だけでいい。

「……狙いは、僕だ」

「……何？」

男が聞き返す。

瞬間、狼が跳ねた。

明弥は警官を押しやって跳ねた下方をくぐり抜けるように狼に向かって走った。いままで明弥のいた場所に爪をめり込ませた狼は踵を返し、再び明弥の方に向かって走り出す。

落ちていたパラソルの柄を掴んだ。

重く、持ち上げるのがやっとだったがそれを何とか引き上げると、遠心力で大きく振れた。青緑色の傘の部分が狼を巻き込み、パラソル自体の重さで横に飛ばされた。

遠巻きで見ていた群衆から歓声のようなものが上がる。

（まだだ）

明弥は急いで人の少ない方に向かって走り出した。

まだ、狼が気絶したわけではないだろう。

多分再び起きあがって自分の方に襲いかかってくる。

兄ちゃん、と遠くから政志の声が聞こえる。

君、と呼び止める警官の声が聞こえる。

どちらも無視して明弥は走った。

振り向かず、狼も走り出したのが分かった。

足の速さではいつも後ろから数えられる所にいる明弥だ。動物の足の方がずっと早い。追いつかれるのは一瞬だろう。

だけど、少しでも人から離れたかった。

明弥の進行方向の道に、車が止まった。

車の後部座席のドアが開かれ、中から見知らぬ男が叫ぶ。

「乗りなさい！」

本当は乗るつもりなど無かった。

乗れば車の人に迷惑がかかる。

だが、明弥は見えない力に押された。まるで引き込まれるように、転がり込むように車に飛び乗った。

ドアが半開きのまま車が発進する。

獣が追ってきていた。

「坂上、人気のない方向へ」

「心得ております」

運転手が答えた。

明弥は自分を招き入れた男を見る。

微笑を浮かべた、穏和で落ち着いた感じの男だった。二十代から四十代、どの年代にも見える不思議な男。

「あのっ」

声をかけると男は頷く。

「大丈夫、分かっています」

何を分かっていると言うのだろうか。

有無を言わせないような笑顔で言われてしまえば黙るより他が無かった。

猛スピードで走る車のバックミラーに、赤い影が映る。

明弥は振り返って確認する。

「追いかけてくる」

「気に入られましたね」

男は楽しげに言う。

明弥は男を見返した。

「あなたは、狙われています。人から離れるという判断は賢明でした。おかげで彼を人から離す事ができます」

彼、と小さく呟く。

まるで狼が人であるような言い方だ。

確かに明弥は一瞬、あの狼が人間の男のように見えた。だが、狼男でもあるまいし、本当にそんなことがあるのだろうか。

「あなたは、あの狼が何なのか知っているんですか？」

問うと男は笑顔を崩さず答える。

「はい、知っています」

「一体あれは……」

「説明は後にしましょう。今は、我々は対処する術を知っているとだけ申し上げておきます。大丈夫、何も心配することはありませんよ」

心配することはないと言われても安心出来るわけがない。

明弥は車の速度計を見る。それはもう既に100キロのスピードを超している。なのに、後ろを追いかけてくる赤い姿は消えない。

男はバックミラー越しにその姿を見つめながら落ち着き払った様子で腕組みをしている。

彼は高級そうなスーツを着ていた。坂上と呼ばれた運転手の着ている服も安そうには見えない。車種は分からないが、内装を見る分には車も随分と高そうだ。

この人達は一切何者なのだろうか。

あの狼の対処の方法を知っていると云ったが、一体どんな関係があるのだろうか。

普通、街の中に獣がいたとして考えるのは熊や狸のように山から下りてきたか、あるいは動物園から逃げ出したか。

どう考えてもこの人達は動物園の関係者には見えない。むしろ、禁止されている動物を密輸しているような人達に見える。まるで逃げ出した商品を捕獲しようとしているような。

（密輸？）

明弥は自分の考えに違和感を覚えた。

仮に彼らが密輸をしているとして、商品である動物を「彼」と呼ぶだろうか。それに、逃げ出したものを捕獲するのに、あんな風に目立つ行動を取るだろうか。

分からない。

けれど、この人達は、人を巻き込まないように遠くに逃げようとしている。

明弥を助けようとしてくれている。

悪い人たちのようには思えなかった。

「！」

どん、と何かが車の上部に落ちてきたような音が響く。

ぎしりと車体が軋んだ音を立てた。

8 疑問

呆然と、彼は立ちつくした。

兄が犬に襲われて拳げ句見知らぬ車に連れ去られた。どうすればいいのか解らず政志は車の去った方向を見つめていた。

「君は先刻の少年の知り合いですか」

男に話しかけられ、政志は頷く。

明弥が獣に襲われている中、助けてくれた男だ。彼は事態の收拾しようとカフェの人間などに指示を出していた。どこかに電話を掛けている様子だったが、格好や口ぶりから察するに、刑事なのだろうと政志は思った。

案の定、男は警察手帳を示した。刑事ドラマで見るような手帳と少し違った。彼は中津龍二と名乗る。手帳にも彼の写真と名乗った通りの名前があった。

少し警戒心を減らして政志は答える。

「……弟です」

「名前は？」

「久住政志。兄の名前は明弥です」

彼は満足そうに頷いて次々と色んな質問をした、問われるままに政志は答えていく。その都度確認を取りながら男は手帳に書き込んでいった。

本物の刑事もこうして手帳とかに書き込むんだな、とぼんやりと眺める。

不意に、涙がこぼれた。

「……っ」

手の甲で涙を拭った。

今は、泣いている場合でもないのに。明弥の為にも今は刑事の質問に答えてすぐに探せるようにしてもらわなきゃいけないのに。そう思う程に涙が溢れる。

押しつぶされそうなほど不安だった。

兄が側にいないことがこんなにも不安だとは思っていなかった。

「ちよつと、中津くん！ 男の子泣かせてどうするのよっ！ 重要参考人だからって尋問していいって思っちゃだめよ！」

声を聞いて政志は顔を上げる。

近付いて来たのは綺麗な人だった。綺麗だけれど、女性の服装をしているけれど政志にはそれが男にしか見えなかった。声もやや野太いものが混じっている。

中津は軽く顔をしかめた。

「仕事をする時はきちんとした格好を……」

「非番中に呼び出されたよ。文句言うなら所長に言っ頂戴。……」

大丈夫？ あのおじさん怖いからね、驚いたでしょう？」

綺麗な男の人は政志の前に膝を付いて微笑む。

香水だろうか。男の人にはない優しい匂いがした。

「政志くん、ね？ これ、大切なものなんじゃないの？」

オカマは政志の前に袋を差し出した。

映画の、パンフレットが入っている袋だ。

明弥より大切なものではないが、大切なものだ。大事そうに持つてきてくれたのをみて何故か不安が少し和らいだ。

まるで、今一瞬明弥が戻ってきたかのようにだった。警察は当てにならないと大人はよく話をしていたけれど、この人なら信用出来る気がした。

政志は彼に抱きついた。

「あらあら、可愛いわね。……大丈夫、お兄さんは私たちが責任持つて見つけるからね。心配しなくて良いわ」

「……うん」

車の上部が何か硬いモノで殴られているかのようにガンガンと音が鳴り響いた。道行く車がほとんど脇に避けていくのが見えた。

あの獣が今屋根の上に乗っているのだ。

明弥は頭を軽く押さえ、音と衝撃に耐えた。

男は少し身乗り出し、運転席に座る男に指示をする。

「坂上、ここではいけません。振り落として下さい」

「承知しました。揺れますのでご注意を」

運転士は頷きアクセルを踏む。

同時に車が左右に大きく振れた。

車の通りの多い場所だというのに、車は構わず加速する。反対車線に乗り出し、車の往来を妨げながら車通りの少ない山の方へと走っていく。どこからかサイレンの音が聞こえる。

一瞬、笑顔の男が少し顔をしかめたのが解った。

がんと激しい音がして車の天井から手が生えた。

「うわっ……!!」

「……」

明弥は悲鳴を上げたが、男は動揺した様子を見せずに懷に手を入れる。

引き出されたものは拳銃だった。否、拳銃と言うよりも形はタンクの付いた小型の水鉄砲というところか。モデルガンの銃身にガラスタンクを取り付けたような造りをしている。ガラスタンクの中には赤いインクのような液体が入っている。

血のようだ、と明弥は思う。

彼はそれを獣の手に密着させて引き金を引く。

しゅっ、と空気を切るような音。

赤いインクが一気に無くなった。

獣がうめき声を上げた。

「な……に……?」

明弥が声を上げると、彼は片手でタンクを捻る。

「一撃では無理ですか。やはり丈夫ですね。坂上」

彼は何かを催促するように運転席の方に手を出す。

坂上と呼ばれた男が運転をしながら助手席にあるアタッシュケースを開くと、新しいガラスタンクを取り出し、彼に渡した。

「あの、何を……」

男は答えずに窓を開いた。

開いた瞬間息が出来ない様な突風が車内になだれ込んでくる。

彼は身を乗り出し窓枠に腰を下ろした。

先刻のような風を切る音と、獣の呻り声。

車内に入ってきた彼の手がもう一度坂上に催促する。坂上は先刻よりも少し薄い色の赤い液の入ったタンクを渡す。再び同じ音が聞こえた。やがて音と揺れを生じさせながら獣がゴロゴロと道路を転がっていくのが見えた。

明弥は視線でそれを追った。

「！」

車が急停止する。

その勢いで明弥は助手席のシートに鼻先をぶつけた。

「降りて下さい」

「あ、はい」

男に言われ明弥はそれに従った。

車の外にはタイヤが滑った跡と血痕のような跡が残されていた。

そしてその先には、

「っ……！」

明弥は息を飲む。

転がっていったはずの獣の姿が無かった。代わりに、傷だらけで全裸の大男の姿。顔こそ見えないがその身体は紛れもなく人間のものだった。彼の腕から血が流れていた。

意識が無いのだろう。男はその傷を手で覆うことすらしなかった。

「……まさか、死んで……」

「生きていますよ。ただ、良く利く麻酔のようなものを打ち込んだだけです」

（ようなもの？）

明弥は眉を顰めた。

と言うことは麻酔では無いのだろうか。

いや、そもそもこの男は誰で、あの獣と何の関係があるのだろうか。これでは獣が男に変身したようにしか見えない。

そんなことが、あるのだろうか。

運転士が車から毛布の様な布を持ってきて大男の上に掛ける。

明弥は男を見上げた。

微笑んでいる顔の男の表情が僅か困ったような、悲しそうな色を帯びる。

「彼は私の弟なんですよ」

「え？」

「人狼です」

「ジンロウ？」

「狼男、と言うのが解りやすいでしょうね。月の満ち欠けに左右される訳ではありませんが」

確かにこの状況を説明するのに、男が狼男だったと言われるのが一番しっくりくる。だが、俄には信じがたい。常識しか信じられないわけではないが、そんなのは都市伝説で現実にいるなんてとても思えない。

自分が芸能人であれば大がかりなどつきりを仕組まれたかと思うだろう。

それに、男が人狼ということは兄弟である彼も人狼だと言うのだろうか。赤い髪の子はともかく、この細身の男が狼になる姿は想像が付かない。

「彼は特殊な病気なんです。今、この状態で警察に捕まればもう二度と会うことは出来ないでしょう」

明弥が言葉を理解するよりも、視線が交わるのが先だった。

今まで殆ど開かれていなかった男の瞳が明弥の瞳を捕らえた。

「今のこと、見なかったことにしてもらえませんか？」

9 理由と秘密

久住明弥が発見されたのは繁華街から離れたバスの停留所だった。待合室のベンチにもたれ掛かって気を失っているところを警察官が発見したという。

マスコミが狼か野犬かと騒ぎ立てる中、その獣に襲われた少年は病院に運び込まれた。どこからかぎつけたのか報道関係の記者達が渦中の少年にインタビューを取ろうと院内をうろついていたが彼の病室に辿り着くことは無かった。

「小児病棟か。中津さんの指示だろ。さすがだな」

勇氣は病院のロビーで紙コップのコーヒーを飲みながらぼつとしたりよに息を吐いた。

まだ人の多い待合室のテレビの中では街に突然現れた獣に付いての報道がされていた。さすがに獣の姿のVTRは無かったが目撃者の証言から作ったイラストやイメージ映像が流されていた。一部の報道では監視カメラの映像が流れていたが、あまり鮮明とはいえなかった。

「そうですね、マスコミもこちらには入りにくいですからね」

並べられた長椅子に腰を下ろしながら伊東が同意するように頷いてみせた。

彼を小児病棟の方に入れると言ったのは中津刑事だった。ちょうど現場に立ち合った彼はこれが普通に野犬や狼に襲われただけの事件ではないと感じたのだらう。報道管制を強いるにはまだ情報が足りないが、久住明弥をマスコミに晒すのは得策ではないと判断したのだ。彼が発見されたという報せを受けて真っ先にそう指示を出した。

患者も見舞客も様々な一般病棟よりも小児病棟の方が外からの侵入者に敏感だ。特にここは原則的に身内か入院患者の学校関係者と一緒でなければ中に入れない仕組みになっている。近年増えてきた

不審者の侵入が原因で出来たシステムだがこんなところで役立つとはまさか思ってもみなかった。

勇気の母親の愛には「頭が鉛で出来ている」と言われるような刑事だったが、その点はさすがに判断が速い。

「勇気くんは彼と面識があるんでしたよね」

勇気は頷く。

「入試の時の一度きりだけど」

「印象は？」

「大人しくて、トロそうで、真面目。いじめやカツアゲの被害者になりそうなタイプ」

率直に言っていると伊東は軽く吹き出した。

彼は少し不機嫌に伊東を睨んだ。

「伊東さんも似たような感想なんだろう？」

「ええ、確かに概ねはそうですけど……」

「けど？」

「いじめの部分だけは同意できませんね。彼はいじめられるタイプじゃありません」

勇気は眉をひそめる。

ぱつと顔を見ればイジメの対象に成り得るか否かはすぐにわかるだろう。久住明弥は明らかに前者だ。勇気に久住明弥をいじめたいという衝動はないが、イジメる側の人間は目を付けるだろう。現に既に入試の時に絡まれている。

だが、伊東に「いじめられない」と断言されると奇妙な気がした。「理由は？」

「色々ありますが、一番は彼をいじめてもつまらないと言うことですよ。話してみれば解りますが、どうします？」

勇気は警察の協力者であるものの、関係者ではない。事件関連の捜査目的ではなく友人として彼と会うか否かを問われているのだ。

少し迷ったが勇気は首を振る。

どうせ彼とは四月から嫌でも顔を合わせることになる。先刻もそ

の理由から彼と会つのを止めると決めただけだ。

「やめとく」

「そうですか」

彼は頷いてコーヒーを飲んだ。

伊東はまだ中学生の勇氣に対しても丁寧な言葉を使う。刑事という職業柄、誰に対しても丁寧に接する癖のようなものが付いているのだ。勇氣が上司の息子だから特別というわけではない。

勇氣が伊東に対してぞんざいな口を聞くのは幼い頃から見知った間柄だからだろう。年上の刑事に対してのしゃべり方ではないと思っていたが、今更口調を改めるのも他人行儀な気がして嫌だった。咎められれば治す努力はするが、伊東自身が気にしていないのだから今は必要無いだろうと思う。

「それよりも伊東さん、彼について詳しく調べた方がいい」

「では今回の件、無関係ではないと？」

「入試時のこともあるから、無関係とは言にくい。……それに、途中から記憶がないなんて、とても信じられない」

突然獣が襲ってきた。彼が偶然あの場所に居合わせたただけとしても、車に連れ去られてから発見されるまでの間の記憶が無いなんて言われて納得が出来るはずがない。今は記憶が混乱して思い出せないとしても、車に乗り込んで、気が付いたら病院にいたという証言はお粗末すぎる。

その間に何かあり、それを隠しているとしたか思えなかった。

おそらく警察に知られるとまずい事情がある。

それが「こんな話を話しても、信じてもらえないだろうし、頭がおかしいのかと疑われる」という事情ならいい。だがもし車の人物を庇う行為なら、彼自身が何か法に触れる様なことをして言い出せないのなら問題は変わる。

入試の時に感じたように彼の能力が勇氣の思っている通りなら、自覚していてもしていなくても厄介なことに変わらない。

この世界は人の持つ特殊な力に関してあまりにも無知なのだ。

勇氣は自分自身がそう言った能力を持っているために、この世界に科学で証明されていない超常能力というものが存在を知っている。

その勇氣から見ても、彼の存在は異質だった。

このところ頻発している「その類」の事件にも彼が関連している可能性もある。初めから全て疑って掛かるわけではないが、可能性がある以上彼のことをこのまま放置してはいけないと思った。

「解りました。調べてみましょう」

伊東はそう言って手を出した。

勇氣は空になった紙コップを伊東に渡す。

「俺も爺さんに色々聞いてみる。俺より詳しいから」

「お願いします。アパートまで送りますよ。どちらにしても、愛さんの荷物を届けなきゃいけませんし」

うん、と勇氣は頷く。

がやがやとロビーが騒がしくなったのはその時だった。

救急を知らせるサイレンを鳴らし、病院の前に救急車が飛び込んできく。救急隊員が通路を確保し、なだれ込むように次々とストレッチャーで患者が運び込まれて来る。

伊東は視線だけで何が起こったのかを聞いてくると合図を送った。それに頷いて見送る。

不意に酷く嫌な感じがした。

叫ぶように医師に容態を伝える救急隊員の声の中に、火事という単語と十三人という言葉が混じる。勇氣は慌てて待合室のテレビに視線を向ける。

先刻まで謎の獣に関して報道していた番組は緊急報道に切り替わっている。

大規模な爆発事故が起こったと、テレビで報道されている。

それはこの病院からさして遠くない距離。運び込まれた患者が爆発事故に巻き込まれた人達であると嫌でも解る。

タイミングが、良すぎる。

（これじゃあ、まるで……）

まるで、久住明弥が関連したこの件を報道させないようにするために爆発事故が起きたかのようなのだ。犠牲者が久住明弥だけの事件と犠牲者が十人を超えた爆発事故ならば、報道は間違いなくこちらの事件を報道したがるだろう。

（誰かが）

久住明弥を助けたという車の人物が、現れた獣に関連している人物か。あるいは、久住明弥本人か。

（何のために？）

自分を守るため、人を守るため、それとも利益を得るため？

何かが起こっている。

街の何処かで何かが浸蝕し始めている。

胸が酷くざわめいた。

嫌な予感がする。

こんなにも嫌な気分になったのは四年前。小学生の頃だ。街が死の蝶に冒され人が死んだ。そして一人行方不明になったまま今も見つかっていない。

あの時と似た何かが、今この街に巣くっている。

何かが。

1 安定を欠いた獣

酷い頭痛がした。

遠くで電子の音が一定のリズムを刻んでいる。それに合わせるように頭がズキン、ズキンと疼くように痛んだ。

目を開くのさえ億劫になる頭痛。それは思考を鈍らせ、気を萎えさせる。夢うつつの中でも感じる痛みは古い記憶を呼び覚ます。

鮮烈な痛みと共に浮かび上がるのは初めて獣になった時のこと。人の性が抜け落ち、本能だけが覚醒するように自分が誰であるかが分からなくなった。

あの時頭痛と繋がった思考だけが自分の理性だった。今のこの痛みはあの時の痛みによく似ている。

手放せば苦痛を感じなくなるだろう。

例えば大切な誰かを手に掛けたとしても、痛むことはない。

それが、獣としての彼の本性だった。

「……っ」

太一は意識をはっきりさせようと髪の毛をかき混ぜた。

髪の毛にしては太い何かが音を立てて彼の頭から剥がれる。

一定のリズムを刻んでいた機械音が警告音に変わる。複数の人間が慌てて駆け込んできたのが分かった。

（ここは……研究室か）

うつすらと目を開くと、白衣を身に纏った人間達がせわしく動いているのが見えた。

誰かの手が太一の手を押さえ込み、太い注射針を打ち込んだ。痛みは大したことがないが、反射的に動こうとする手を別の誰かの手が押さえ込んだ。

安定剤だ。

彼は判断する。

何度も経験しているから、自分が何をされたのかが分かる。彼ら

が、太一の痛みを和らげようとしているのが分かる。

だが、煩わしい。

太一は力任せに白衣の連中を払った。

このままでは、彼らを殺してしまいそうだ。

目を覆い、低く唸るように言い放つ。

「……イツキを呼べ！」

「私ならここにいますよ」

冷静な声が戻る。

目を開くと、白衣の研究員達の向こうからいつもと変わらない様子の男がいつもの笑顔で立っていた。

南条斎。

戸籍上では今自分の兄にあたる人物だ。見つけて、ようやく、頭の中に冷静さが戻ってくる。自分の凶暴な衝動も、彼ならば抑えてくれるという安心感があつた。

頭を抑え、太一は尋ねる。

「……状況は？ 何があつた？」

意識が今ひとつはつきりしない。

何があつて今研究所にいるのかがよく思い出せなかった。自分は確か、久住明弥を「監視」するために出かけていたはずなのだ。

「あなたは街中で獣化しました。私がそれを保護しました。……ああ、あなた方はもう戻って結構ですよ。後は私がやります」

斎に言われ、研究員達が返事を返して部屋の外へと出て行く。

徐々に戻ってくる感覚を支えに太一は上半身を起こした。ぶちぶちと身体に付いていた検査の為の線が抜ける。騒がしい電子音が切れたのは斎が電源を落としたからだろう。

太一は深く息を吐いて記憶を辿る。

（……獣化した？）

恐怖に怯えた少年の姿が脳裏をよぎる。

それは紛れもなく久住明弥を襲った証拠だ。

「私が対処しなければあなたは殺していたでしょうね」

斎は淡々とした口調で言う。

その口調から久住明弥が大した怪我もなく済んだことがわかる。

彼はほっと息をついた。

「……話したのか？」

「誰に？」

「久住明弥にだよ。あいつとあつたのか？」

「会いました。話もしました。最も今はこちらの事情を詳しく説明するわけにはいきませんでしたからね、簡単な説明をして納得して帰って貰いましたよ」

太一は半眼で男を睨む。

「じゃあ、お前」

いいえ、と彼は首を横に振った。

「私が‘説得’をするまでもありませんでした。彼はとても優しい子です」

「……馬鹿か、あいつは」

自分が殺されるかも知れない状況だったことを分かっているのだろうか。斎の介入が無ければ無事で済んだ自信がない。そもそも、意識的に獣化した時ならともかく突然何かに押されたように獣化した時には正気は保てない。

そう、太一は押されたのだ。

強い力に‘獣になれと’背を押された。

だから簡単に正気を失ってしまった。そうでなければ獣になっても人を襲わないように訓練してきた自分が襲うはずもない。人狼として人の世の中で生きていくことを選んだ自分が、簡単に自分を見失うはずがないのだ。

「イツキ」

「はい？」

「大丈夫なのか？」

「何がですか？」

聞き返す斎に太一は唸る。

「質問に質問を返すなよっ！」

「あなたの言葉が足りないんですよ。それでは何に対して聞いているのかわかりません」

太一は舌打ちをする。

頭の良い斎ならば太一が何を尋ねたかすぐに分かるはずだ。敢えて聞き返すのは相手に必要以上の情報を与えないためだ。太一に、という訳ではない。普段から、そうするように癖を付けているのだ。いつもそうだ。

慣れているはずなのに苛立つのは自分自身に不安があるからだろ
う。

太一は溜息をつく。

「……万が一にもお前の身に何かあれば、困るのは鈴華だ。街の方は騒ぎになっただろう？ 大丈夫なのか？」

「はい。警察がここに辿り着いたとしても強制捜査になるような証拠は残していません。それに、マスコミはそれほど騒いでいませんよ」

太一は顔を上げる。

獣になる瞬間を誰かに見られていなくても、あの街中で太一は姿を晒した。少なくとも久住明弥を襲った時に、他の人間の気配を感じている。彼の獣としての姿は狼だ。野犬と見間違われたとしても、少年が襲われたとなればマスコミは騒ぎ出すはずだ。

それほど騒がれていないとはどうしたことだろうか。

「爆発事故があったんですよ」
彼を睨む。

「……お前がやったのか？」

「まさか。いくら私でもうやむやにするためだけに人を巻き込んだりはしません」

どうだか、と太一は心の中で呟く。

斎は笑顔のまま続けた。

「このところ火事が頻発していますからね。その関連かも知れない

し、全く別の件かも知れませんが、大きな事故で犠牲者も出ました。不謹慎ですが感謝しています」

大きな犠牲者の出なかった事件よりも、何人もの犠牲が出た事件の方が人の興味を集める。マスコミはより衝撃的な事件の方に動くおそらく警察も火事の方を重点的に調べるだろう。

確かに不謹慎ではあるが、少しほっとしたのも事実だ。

「……心配なら自分の心配をしなさい、太一」

うん、と太一は頷いて見せる。

「人狼がいるなんてマスコミが知ったら騒ぎ立てるもんな。気を付ける」

「そう言うことを言っているではありませんよ。あなたは今とても不安定になっています。薬で抑えていますけど、いつ獣化してもおかしくないでしょう。変調があるならばすぐに私に言って下さい」

斎は少し不安そうな表情を浮かべた。

「私は、あなたを殺したくはありません」

「イツキ……」

獣化した自分がどんなに危険か知っている。

今回は何とかなったが、殺さなければ止まらない状況になるかもしれない。万が一の時は斎が自分にとどめを刺すのだろう。そうなりたくないし、させたくもなかった。

何だかんだと言いながらも太一にとって今一番信頼できるのは斎で、斎にとっては太一なのだ。

物理面でも、精神面でも。

太一は目を閉じて頷く。

「……分かった。何かあったらすぐにお前に言うよ」

「はい、そうして下さい」

斎はほっとしたように笑って見せた。

獣化することに不安なのは、太一だけではなく斎にとっても同じ事なのかも知れない。久しぶりに見た斎の不安そうな表情に少しだけ気持ちが悪くなった気がした。

2 入学式

『……新人生代表、岩崎勇氣』

挨拶を終え彼は何度か形式的な礼をとって壇上から降りてくる。入試で会った時、頭の良さそうな人だと思った。総代をするくらいなのだから入試でも良い成績をだっただろう。第一印象は間違っていないかったのだな、とぼんやり彼をながめる。

不意に視線がかち合った。何故か睨まれたような気がしたが彼は何も言わずに段から降りた。

岩崎勇氣とは同じクラスになった。

当然それは偶然なのだろうが、だからこそ何か縁のようなものを感じる。入試の時のことで聞きたいことがあったため同じクラスになれてちょうど良いとおもっていた。そんなことを友人や弟に話せば楽観的すぎると窘められるだろう。だが、明弥は勇氣に対して悪い印象を持っていなかった。近寄りがたいような怖そうな印象はあるが、不思議と悪い印象は持たなかったのだ。

入学式を終えて、教室に戻る人波に乗りながら明弥はぼんやりと別の事を考えはじめる。

トモミとは違うクラスになった。折角同じ学校に合格出来たのに別のクラスになるのは残念だったが、少しだけほっとしている。

彼女のことは好きだが複雑なのだ。

（こればかりは僕自身の気持ちの問題だね）

そう、トモミが悪い訳じゃない。少し前だったら本気で同じクラスになれなかったのを残念に思っていただろう。

だが「危険を引き寄せる体質」のこともある。それに何よりも、今気になっているのはバレンタインの時のこと。あの時見た人影。あれがそもその原因なのだ。

あの人影は……

「あつくん？」

呼びかけられてはつとした。

明弥はA組でトモミはC組だから近くにいるはずがない。遅れて歩いてしまったのかと周りを見渡すが、先刻見たばかりのクラスメイトの顔がある。明弥が遅れて歩いていた訳では無さそうだった。

「どうしたの？ 何か暗い顔」

「そんな顔してた？」

知らない振りをするように言うと、トモミは頷く。

彼女にはやっぱり筒抜けだ。

「悩み事なら聞くよ？ 家で何かあった？」

「そんなんじゃないよ。昨日パズルやっていて解けない問題があったんだ。懸賞の付いているやつ」

ああ、と彼女は眉間に皺を寄せた。

「それじゃあ力になれないや。……ね、岩くんと同じクラスなんだね」

「岩崎くんのこと？ 総代の」

「そー。中学の時クラスメートだったんだ。頭良いとは思ってたけど、まさか総代とはねえー」

彼女の視線の先には岩崎の姿が見える。

がやがや騒がしいためにこちらの声までは聞こえていないだろう。

明弥は小声で尋ねる。

「……どんな人？」

「良い奴だよ、アレで結構話しやすいし。ただねえ」

「ただ？」

トモミは腕組みをする。

「女の子にもてるからねー。あんま仲良くすると嫌がらせとか来るんだよね。その辺ちよつと問題？」

嫌がらせ、と明弥は呟く。

女の子達を怒らせた男子が痛い目を見ているのは知っているが、そんな風に嫌がらせをするようには思えない。男子一人のために。

「トモちゃんは？」

「え？」

「ああいうタイプが好み？」

一瞬彼女はきょとんとした。

次の瞬間、まさか、と吹き出す。

「格好良いとは思うけど、私あつくんの方が好きだよ。むしろ友達とかになりたいかなー、あ、私クラスここだから」

彼女は入り口を差して言う。

明弥は頷いて彼女を見送った。

「じゃあまたねえ」

「うん、また」

手を振って歩き出すと、すぐに別の女の子に話しかけている彼女の姿が見えた。彼女から貰うプリクラでも見たことのない顔だから新しい友達だろう。相変わらず友達を作るのが早い。明るく人懐っこい性格の彼女は誰でも気さくに声をかける。それが嫌だと言う人もいるだろうが、誰にでも分け隔て無く接する彼女の周りには自然と人が集まるのだ。

そういうところは見習わなければと明弥は思う。

おい、と声を掛けられたのはその時だった。

明弥が振り向くと入試の時に会った三人組がいた。もっとも、三人のうちの二人と言うべきだろうか。リーダー格ともう一人。三人目の姿が無いところを見ると落ちてしまったのだろうか。

「てめえ、クズのくせに女といちゃついてんじゃねーよ」

どん、と肩をどつかれ明弥は少しバランスを崩す。

騒がしかった周囲がしんと静まりかえる。

入学式を終えたばかりの集団が、興味深そうに明弥達の方を見ていた。これはやはり絡まれているのだな、と思いながらも明弥の頭の中は三人目の事で一杯になっていた。

あの事件のあと、ともに試験を受けられずに落ちたのなら少し責任を感じる。明弥が危険を引き寄せる体質なら彼らは明弥の不運

に巻き込まれただけなのだ。

トモミのお守りを捨てようとした事はまだ少し怒っているが、それとこれとは話が別なのだ。

「何とか言えよ、クズ」

「え？ ああ、あの、もう一人はどうしたの？」

「井辻は休みだよ、クズ」

リーダー格の男は律儀に答えてくれる。

口は悪いけどいい人だな、と明弥は微笑む。

「ああ、そうなんだ。あのせいで落ちたのかと思ってビックリしたよ」

それにしても入学式に休みなんて井辻って人もついていないな、と明弥は同情した。これからクラス写真の撮影もあるのだから、その井辻は写真の上端に四角い枠の中に収められてしまうのだ。目立っていいっていう人もたまにいまするだろうけれど、普通はあまり嬉しくないだろうと。

「てめえ、舐めてんなよ？」

「ええつと、ごめん、そんなつもりじゃないんだけど……」

「クズとか呼ばれて悔しくねえのかよ」

襟首を捕まれたが、苦しくは無かった。

「あ、ああ、そうか。何で名前知っているのかなかと思ってたけど、そう言うことだったんだ」

てつきり「久住」を省略して「クズ」と呼んだのだと思っていた。実際親しみを込めてそう呼ぶ連中もいたためにそれが罵倒語の一つであると認識するまでに時間がかかった。

これは自分でもぼけていると思う。

怪訝そうな男に明弥は言う。

「俺、名前、久住明弥って言うんだよ。だからクズって呼んだんだな！ って……あれ、どうしたの？」

呆れた様子の彼を見て明弥は瞬いた。

また自分は変なことを言っただろうか。

「……お前、馬鹿か」

「え？ あ……えーと、多分」

中学のクラスメートにも良く言われた気がする。

馬鹿にされているというよりはからかわれている感じだったから
気にしていなかったけれど、会うのが二回目の名前もろくに知らない
人にまで言われるとさすがに少し凹む。

成績云々の事を言っているのではないのだろうが、誰からも馬鹿
に見えるっでの嬉しくはない。

彼は盛大に息を吐いた。

「……やめた」

「え？」

「お前に絡んでも面白くもねえ」

「えっと……ごめん」

申し訳ない気がして謝ったが、すぐに睨まれた。

「謝るなよ。……くそっ……調子狂うな」

彼は明弥の襟首を放し踵を返す。

いつの間にか廊下には先刻のざわめきのようなものが戻っていた。
多分驚いたのは一瞬で、明弥たちの会話を聞いていた生徒はろくに
いないのだろう。

面白く無さそうに頭を掻く男に、もう一人が話しかける。

「よかったんスカ、安藤さん」

「いいもなにも、あんなの相手してもつまらねーよ」

「まあ、それはそうですね……」

あの人、安藤って言うのか、と明弥は思った。

安藤はC組の教室に入っていく。ともみと同じクラスなら、もう
一人の名前も後で聞けるな、と何となくほっとした。

名前も知らない相手の顔だけ知っているというのはどうも気持ち
が悪い。

悪ぶっている感じだが、いい人そうだから、友達にもなれるだろ
うと楽観的に考える。

ふと、明弥は視線を感じ、振り返る。

A組の教室の出入り口の所で岩崎が観察するようにこちらを見ていた。その視線がかち合っても岩崎は逸らそうとしなかった。

「？」

首を傾げると岩崎は不快そうに険しい表情をした。

何か悪いことをしたのだろうか。

「おい、みんな教室に入れー！」

教師の叫ぶ声が聞こえて新入生達は慌てて自分のクラスに戻っていく。人混みに飲み込まれるように明弥もA組の教室に入った。

3 愚鈍

「岩崎くん、ちょっと待って！」

既に最初のHRが終わっていたためにクラス写真を撮り終えるとそのまま解散となった。親が入学式に参加した生徒は親と一緒に帰宅していったが、やはり高校の入学式ともなるとわざわざ来ない家も少なくはないらしく幾人かの生徒達はまだ残り無駄話をしていた。明弥の親も入学式には出てこなかった。

昇降口に向かう岩崎の側にも親の姿はない。おそらく彼の親も不参加だったのだろう。明弥が後ろから呼び止めると彼は一瞬振り返ったが、一瞥しただけですぐに取り出した靴を下に投げ落とした。不機嫌そうな彼は話しかけられるのも嫌そうに眉根に皺を寄せている。

他の生徒や教師達と話をしているのを見かけたが嫌そうな態度をとってはいなかった。こんな風にあからさまに嫌悪感を示した態度を取るのは明弥に対してだけだ。

やはり自分は彼に何かしてしまったのだろう。

明弥はそのまま帰ろうとする岩崎の腕を掴んで引き止める。

「待って、俺、何かした？」

じろり、と睨まれる。

やはり不機嫌そうだ。

「ごめん、何かしたなら謝るけど……」

「お前」

岩崎は顔だけ振り向いた。

二人の立っている場所には少し段差があり、明弥の方が高い位置にいる。それでも岩崎に見下ろされているような気分になるのは明弥よりも高い身長だけが原因ではないだろう。威圧感のようなものが彼の瞳にはあるのだ。

彼は静かな口調で言う。

「馬鹿だろう」

「……うっ、それ今日二度目」

明弥は口をへの字に曲げた。

先刻も同じ事を安藤に言われたばかりだ。多少自覚はしているが、やはり日に何度も言われると落ち込む。

「離せよ。伸びる」

「あっ、ごめん！」

明弥は慌てて彼の腕を放した。

服を直しながら岩崎は小さく息を吐いた。どこか観念したような表情。もう先に行ってしまう意思は無さそうだった。

明弥は自分の靴箱からスニーカーを出す。彼はそれを見つめながら抑揚のあまりない口調で言う。

「川上とは帰らないのか？」

明弥は頷く。

「トモちゃん親来ているから。……えっと、同じクラスだったって？」

「ああ」

言葉は少ないがちゃんと会話は交わしてくれるつもりらしい。

明弥は微笑んだ。

「岩崎くんってやっぱりいい人だね」

「馬鹿にしているのか？」

彼はあからさまにむっとした表情を浮かべる。

明弥は慌てて手を振った。

「そんなつもりじゃあ……」

岩崎は腕組みを詩ながら鼻先で笑う。

「おめでたい脳だな。大体、いい人、は褒め言葉じゃない」

「そうかなあ……」

「それで？」

「え？」

「こんな無駄話するために呼び止めたんじゃないだろう？」

何か気を悪くさせるような事をしたのなら謝りたいと思ったのは事実だ。けれど彼の言うようにもう一つ目的があった。色々聞きたいことがあるのだ。自分に忠告をしてくれた彼だから知っている気がするのだ。

明弥は歩き始めた勇氣に並んで歩く。

熱心な部活の勧誘の先輩達が配るビラを受け取りながら行く自然と一歩遅れる形になった。岩崎は差し出される一切を無視して歩いている。

「入試の時の事で聞きたいことがあるんだ」

「……」

後ろからでは彼の表情が見えないが、返事はなくとも聞こえているはずだ。明弥は目の前に差し出されたビラを全て受け取りながら小走りに彼に駆け寄りながら続ける。

「岩崎くんなら知っているでしょう？ 俺、自分が危険な目に遭うのはいいけど、誰かを巻き込むのは嫌なんだ。だから……」

岩崎は僅か振り返った。

嫌そうな表情をされて一瞬間込みをする。

だが、引くわけにはいかない。これは自分だけの問題じゃない。解決出来る手段があるなら何でもする。だけど、それには情報が少なすぎる。あの時何故岩崎は自分に忠告してきたのか、その理由を知りたかった。知れば何か解決の糸口が見えてくるかもしれない。少なくとも、何もしないでただ嘆いているよりはずっとマシだ。

「始めに言っておく」

彼は睨むような目つきで明弥を振り返った。

校門を出る少し手前で立ち止まったために目の前に差し出された弓道部の勧誘のビラを受け取る形になった岩崎は小さく舌打ちをした。明弥も弓道部のビラを受け取り束になった紙を軽くまとめる。

「俺は、お前がシラを切っている可能性がゼロじゃないって考えている。むしろ状況証拠から見ればお前が意図的にやったと考える方

が自然だ」

「それって……」

どつという意味、という言葉は吹奏楽部の演奏にかき消される。頭の良い進学校なのに何故こうも部活動が熱心なのだろう。

岩崎は校門の外に向かつて歩きながら少し怒鳴るような声で言った。

「それでもいいなら、……それで満足するなら、俺が見たこと全部話してやるよ」

「本当？　話してくれるの？」

「ともかく、来いよ。ここじゃあまともに話も出来ない！」

彼は片耳を押さえながら苛立ったように吐き捨てた。

確かにここじゃあうるさすぎて会話もまともに出来ない。

明弥は頷いて紙束を鞆の中へと詰め込むと彼の後に続いた。

学校から離れ彼の後を歩くと騒がしい人の気配は消え、代わりに車が行き交う騒音が響き始める。西ノ宮高校から駅方面へと向かうとどうしてもこの大きな道路を渡ることになる。歩道橋を上がり大通りを渡ると駅前の大型のショッピング街になる。

バレンタインの日に事故が起きた場所も、赤毛の獣に襲われた場所も全てそのショッピング街で起こった事だ。

ちらりと横目で見やって少し重い気持ちになったのは純粹にあの時のことを思い出したからではなく、岩崎がいるからだ。万が一にも彼を巻き込むことになってしまえばと考えると気持ちが落ち着かない。彼まで巻き込むことになってしまったら、もう怖くて誰とも一緒に出かけられなくなるだろう。

それを解決するために、岩崎に声を掛けたというのに。

明弥は不安な気持ちを払拭するように頭を振った。

「どこまで行くの？」

「珈琲屋」

「えっと、ドトール？」

「いや、オレンジ色の猫のマークの」

「ああ……あの店。ああ、そうか＜珈琲屋＞か」

明弥は納得したように頷く。

コーヒー屋と言われたから大雑把な言い方をすると思ったが、そうでは無かった。駅前の大通りから一本外れた道にある‘珈琲屋orange猫’という店があるのだ。その辺のカフェと違って学生の自分にはちよつと敷居の高いイメージのある店だ。ガラスにオレンジ色の猫のマークが描かれていて印象的だったから覚えていたが、そうでなければコーヒーに興味がない限り素通りしてしまう店だろう。

「コーヒー好きなんだ？」

「知り合いの店だ」

「ああ、それで」

明弥は頷いた。

地元の人間じゃなければあまり通らないような人通りの少ない道を抜けて、やや賑わいのある道へと出る。確か、この通りに珈琲屋があるはずだ。

当然曲がると思っていたが、岩崎は何喰わぬ顔でそこを通り過ぎる。

「……？」

「久住」

岩崎は近くに来いと言うように指先を軽く動かした。

指示通りに明弥は彼の横に駆け寄る。

「振り向かず歩け」

「え？」

反射的に振り返りそうになるのを堪えて彼の横顔をじっと見つめた。

険しい表情をしている彼は視線だけを明弥に向ける。

「尾行られてる」

4 願ったこと、叶わないこと

尾行？

誰が、誰を？

明弥は戸惑ったまま瞬いた。

「校門を出たところからずっと後を付けてきている。ガラスに映ったのを確認した」

岩崎は声のトーンを落として言う。

「……次の角で曲がる時に出来るだけ自然に振り返って確認しろ。左側にいる灰色の服を着た男だ」

明弥は半信半疑のまま、道を曲がる瞬間に何気なさを装ってその姿を確認する。

視線が交わった。

何か後ろ暗いことがありますと言わんばかりにあからさまに視線を逸らされる。

岩崎の言う通り、灰色の服を来た男だった。一瞬見た印象では三十代半ばか後半くらいだろう。多少ガラの悪そうな男に見えた。

見覚えはあるか、と岩崎の視線が尋ねる。見覚えが無いと視線だけで答えた。

一瞬だけでは分からないが、少なくとも彼が覚えている範囲内で知り合いではない。

彼がやや歩調を早めた。明弥はそれに合わせるように多少小走りになる。

後ろの男を意識して小声にしながら明弥は問う。

「ほ、本当に付けてきているの？」

「確かめて見るか？」

「……うん」

頷くと、岩崎が走った。

明弥も続くと、やはり後ろの男も弾かれたように走り出した。それはこの街中を歩く人にしてみれば不自然な反応。駅方面に向かって走っているのならば、電車に乗り遅れる事に気付いたという理由で走るのとは頷けるが、彼らが向かっているのは駅とは逆の方向。尾行されているという岩崎の言葉は間違いないようだ。

不自然に思われても見失うよりはマシだと思っただろうか。明弥達が気付いたことが分かったのかも知れない。もはや彼に隠れている意思是感じられない。

男の様子を窺うために振り向いた瞬間だった。

「久住！」

岩崎が注意を促すように叫ぶ。

「え？ ……わっ …… あっ！」

気が付いた時には遅かった。明弥は勢いよく何かに激突する。衝撃は自分の身体に跳ね返り、ぶつかった力と同じ力で跳ね飛ばされる。転倒を覚悟して彼は目を瞑る。

転倒はせず、代わりに腕に力がかかった。誰かが声を上げる。

「……つと、悪い、大丈夫か？」

「……？」

明弥は目を開いて瞬いた。

「え？ あれ？」

男が片手で明弥の身体を支えていた。二メートルはありそうな偉丈夫だ。あの狼を連想させるような赤い髪の子だった。

（……まさか）

あの人では無いだろうか。

あの時、路上で倒れていた人狼の男。

あの時顔は見えなかったが、体つきがよく似ている。

まさか、と明弥は心の中でもう一度呟いた。

赤毛の大男と言うだけの特徴で勝手に決めつけるのは失礼だ。こんな大柄な人はそんなにいないだろうが、全くいないわけではない。大体、あの人が無条件に出歩いているのだろうか。あの方は、お兄さ

んが「保護」したのだ。

「太一くん、どうしたの？」

男の後ろ側で洋品店の自動ドアが開く。彼の半分以下の印象を受けるほど小柄な少女が男を見上げる。

男は優しそうな顔で微笑んで明弥を示す。

「ん、こいつと不注意でぶつかったんだ」

「身体が大きいんだから気を付けないとだめよ」

「面目ない」

少女に窘められ、男は苦笑を混じらせながら言う。

すっかり者の娘という感じだろうか。外見的には政志と同じか少し下という感じだが、大人しそうですと大人びてさえも見えた。

おさがが印象的な可愛い子だ。

彼女はにこりと微笑んだ。

その表情がまるで同年代の女の子に微笑まれたかのような錯覚を覚え、一瞬自分が今尾行されていてそれから逃げようとしていたことを忘れた。

「ごめんなさい、怪我ありませんか？」

ドキリとした。

弟と同じくらいの女の子を恋愛の対象になんか見たことがない。けれど彼女の表情があまりに大人びていて驚いたのだ。

明弥は一拍置いて答える。

「あ、うん、大丈夫……」

「おい！」

岩崎が慌てたように明弥の肩を引いた。

瞬間的に現実を思い出した。

振り向いた先で追いかけてきていた男と視線が混じる。こちらに向かつて走ってきた男だったが、明弥と顔を合わせる形になって戸惑ったのか動揺した素振りを見せた。或いは明弥の後ろに立った大男に驚いたのだろう。

男は踵を返した。

岩崎が動く。

逃げるように走り出す男を追いかけるように彼は走った。

ひゅーと、大男が口笛を吹く。

「おお、俊足」

狭い路地に入り込んだ男の襟首を岩崎が掴む。

大通りには人が行き交う姿があつたが、狭い路地で繰り広げられていることに気が付かないのか見向きもせず素通りしていく。たまに振り向いた人がいても、一瞥しただけで面倒なことに巻き込まれるのを嫌ってかそのまま早足で通り過ぎていった。

明弥が路地を覗き込むと男がもがき、反撃をするところだった。

「岩崎く……」

「止めとけ、お前じゃあ足手まといだ」

彼を助けるために走りかけた明弥は太一と呼ばれた男に制され止まる。

男を見上げると顎をしゃくって見るように促す。明弥は慌てて視線を岩崎の方へと戻す。

岩崎は強かった。

ケン力慣れをしていると言うよりは、格闘技の経験があるような動きだった。身のこなしに一切の無駄がなく、冷静に見つめる眼差しには余裕さえも見て取れた。

繰り出された拳を岩崎は難なく交わし、足を大きく振り上げた。

勢いよく振り下ろされた瞬間、男の身体がぐくんと沈む。

踵落とした。

格闘技系の番組でくらいしか見たことがない。

確かに明弥が近くに行けば逆に足手まといになりそうだ。

「凄い」

女の子が呟く。

同感だった。

生徒総代になるほど頭が良く、見た目も格好良い。その上強いともなれば彼は完璧だ。凄いと言う以外に感想がもてない。

「この、クソガキが！」

岩崎の足下に蹲った男が起きあがった。

手元にきらりと光るモノが見える。

刃物だ、と悟る。

「危ないっ！！」

明弥は叫ぶ。

見ていられずに目をきつく瞑った。

穏やかな生活を望んでいた。

自分のせいで誰かを巻き込んだり、傷つくことのないような生活を望んでいた。

そのために岩崎に話を聞こうと思ったのに、今、彼が危機に瀕している。

どうして、と思う。

何故今刃を向けられているのが自分ではないのだろうか。

せめて自分だったら諦めもついたのに。

平穏な生活。

そんな当たり前の生活すら、望めないのだろうか。

5 狂気の刃

「子供相手に刃物とは良い度胸をしてんじゃねーか」

からん、とアスファルトに金属が落ちる音を聞いて明弥は目を開く。彼の一からは太一の背中と怯える男の姿しか見えなかった。

今まで太一は自分の後ろで成り行きを見守っていたはずだ。

いつの間にあんなところに移動したのだろうか。

明弥は慌てて近付いた。

後方から少女が小走りで付いてくる気配を感じた。

「仮にガキ共が万引きしたとしてもな、刃物を出した時点でお前が悪い」

「ひっ……」

ガラの悪そうな男は息を飲んだ。

男も消して小柄な男ではなかった。だが、太一と並ぶとまるで子供のように見えてしまう。三十代くらいの男だ。顔にはやはり見覚えがない。

岩崎は涼しい顔で男を睨んだ。

怪我をしている様子はなく明弥はほっとした。

「……万引き？」

「してないよ」

少女の呟きを聞いて明弥は慌てて否定する。

冷ややかな口調で岩崎が問う。

「お前、何で俺たちの後を付けた？」

「何だ男子高生をストーカーか？ 随分な趣味だな」

太一は低く笑う。

「ち、違う。俺は頼まれただけだ！ そいつを監視しろって」

明弥は自分を指差されびくつとする。

監視？

どうして？

「誰に頼まれた？」

岩崎が尋ねる。

「……」

男は答えなかった。

苛立ったように太一が男の頭部を掴み引きずるようにして壁際に押しやった。

ちょうどビルの二階に上がるための階段通路だ。周囲からは死角になって見えなくなる位置で男の頭部を壁に押しつけながら脅すように低く唸る。

「誰に、頼まれた？」

「し、知らない！」

「とぼけるなよ？ 知らねえで済ませられる問題じゃねえ」

男は刃物を出したのだ。

それで知らないで済まされる問題ではないことを明弥にも分かる。だが、壁に押しつけられて怯えている男の姿を見ると不憫にさえ思えた。岩崎にナイフを突きつけたのは許せない。だからといって怯える男をなおも脅す理由にはならないのでは無いだろうか。

（だって、本当に知らないのかもしれない。それに）

明弥はちらりと女の子を見る。

こんな小さい子に暴力シーンを見せて良いのだろうか。彼女は無言のまま成り行きを見守っていたが、これが傷になってしまってもいいしれない。

「本当に知らないんだ！ 男に金を渡されて、こんなヤバイガキなんて思わなかったから、それで……」

男の発言はまるで明弥が岩崎と太一を従えていると誤解しているような言い回しだった。もちろんそんなわけが無いのだが、そう誤解されてもおかしくない状況だと気が付く。明弥が二人に守られた形になったのは事実だった。

「どんな男だ？」

「み、右手に、傷のある……男」

「傷？」

男は強い力で押しつけられて、苦しそうに言った。

「やけどの……跡」

太一は眉をひそめる。

明弥はたまらず彼の衣服を掴んだ。

「もういいです」

これ以上は、もういい。このままだと彼が男を殺してしまいそうで怖かった。

明弥は拒否するように頭を振った。

「十分ですから」

「十分つてお前なっ！」

太一が吠える。

彼が明弥を振り向いた一瞬の隙を狙って男が彼の腕から逃れた。

慌てて捕まえようとする太一の腕をすり抜け、男が地面に落ちたナイフを拾い上げる。

激しい感情で歪んだ男の視線とかち合った。

避けようと思えば避けられた。

だが、明弥はその場から動けなかった。

身体の奥底から何かが吐き気のようにこみ上げてくる。

もう、止めてくれ。

「久住！」

岩崎が叫ぶ。

刺されたら死ぬだろうか。

不意に力が抜ける。

正直、もうどうだっていいと思った。

立て続けに色々な事が起こった。それで混乱したせいもあるだろうと思うが、自分が原因で周囲に迷惑を掛けているのならいつそ死んでしまった方が楽なような気がしたのだ。

それに、

「止めて！」

少女の叫び声。

明弥は我に返った。

瞬間的に恐怖が蘇る。

「あ……」

目の前に迫る刃が、

「!？」

跳ね飛ばされるようにして消える。

変わって赤が視界に入ってくる。

全身に赤い毛を生やした人型の獣。

その顔は、紛れもなく

「……太一くん？」

少女が戸惑った声を上げる。

明弥も悲鳴を上げそうになって口元を押さえた。

気のせいなどではない。今、目の前で太一が獣の姿に変化しそうになっている。いつだったか見た映画のワンシーンのように、男の全身から吹き出すように赤い毛が生えてくる。その身体が、顔つきが、徐々に狼のように変貌していく。

「ぐ…… ああつつ！」

苦痛にさいなまれるように彼が呻り声を上げた。

「ひっ……」

彼に跳ね飛ばされた男が尻餅を付いたまま後退していく。

何が起こったのか、理解しなくなかった。

あの時の「人狼」に目の前で人間が変化しようとしている。夢でも見ているのではないか。人がこんな風になるなんて、信じたくない。

ぱり、と音を立てて衣服が破れる。

丈夫そうな革のジャンパーがいともあっさりと引き裂かれる。

獣の鋭い視線が明弥の方に向けられる。

まだ人の形の残る男の唇が、ゆっくりと動かされた。

『逃げる』

6 遁甲

「太一くんっ！」

「止せ、行くな」

少女が太一の元に走り出しそうになるのを岩崎が止めた。

「でも……」

「お前の知っている、タイチくん」と少しでも違うなら、近付くな
！」

鋭く言われ少女は唇を噛む。

太一は苦しそうに頭を押さえ、呻き声を上げている。

必至に自分を押さえつけているように明弥には見えた。

ようやく立ち上がった男が、半分這うようにしながら走り去った
のが見えたが、今はそれどころではない。

大通りの方からざわめきが起こる。

ようやく事態の異常さに気が付いたかのように人ばかりが出来て
いるが、むしろそれは危険と分かっているのではなく、興味をそそ
られているだけだと分かる。所々で携帯カメラの撮影音が響いてく
る。

ざわめきの中から映画や撮影という言葉を取り取る。

確かに、事前に同じ獣に遭遇していなければ、男が狼に変身する
姿など現実だと信じられなかっただろう。だが、明弥がそれが特撮
の撮影でないことを知っている。

「久住、逃げるぞ」

「逃げるって……でも」

岩崎は明弥の肩を掴んで小声で囁く。

「この辺には警察がいる。万が一の時には俺たちよりも上手く対処
してくれる」

「警察？」

「ともかく、行くぞ。お前もだ」

言われ少女は頷いた。

岩崎は携帯電話を確かめて、次いで太一の様子を振り返った。太一は頭部を抱えながらよろよろとこちらに近付いてきている。必至に何かと戦っているように見えた。

ばしゃ、と岩崎がアスファルトに何かをまいた。

手元にはミネラルウォーターのペットボトルが握られている。赤毛の男と自分たちを隔てるように、道路上に水で一本の線が引かれた。

引かれた線から何か青白い光が陽炎のように揺らめく。

「……？」

「簡単な目眩でした。どの程度利くか分からない。アレが全力で追いかけてくる前に安全な場所まで逃げる」

訝る明弥に岩崎は説明を加える。もつとも、その説明を聞いたところで明弥には彼が何をしたのかを理解できなかった。

彼は歩きながら携帯電話に耳を当てる。

明弥はその後に付きながら少女の手を握った。

「俺です。説明は後ほど、用件だけ伝えます。駅前オレンジの……」

2 - 3 - 3

彼は電信柱にかかったプレートを確認しながら言う。どうやら電話の相手に場所を知らせているらしい。

「はい、事件です。……いえ、俺は神社の方に。……そうです、願います。……はい、そちらもお気を付けて。……タクシー拾うぞ」

電話を切った後すぐさま彼は明弥達を振り返った。

どうなっているか分からないが、今は彼に従うしかないと思った。どっちにしても明弥にはどうして良いのかが判らないのだ。なら、少しでも把握していそうな彼に指示を仰いだ方がいい。

少女もまたそれに不服は無いらしく大人しく彼の言葉に従った。目の前で知っている男が突然獣の姿に変わり始めたのだ。混乱していてもおかしくない。だが、彼女はそのことに関して混乱してい

る様子は無かった。おそらく、彼女は彼が「人狼」であることを知っているのだ。明弥を助けてくれたあの人と同じように、彼女もこのことを知っている。

けれど何かいつもと様子がおかしい。彼女の様子から、普段は獣となってもこんな風にはならなかったのだろうと思う。

だから岩崎に従っているのだろう。

駅前に着くとタクシー乗り場に行く前に彼はタクシーを捕まえる。少し不審そうにドアを開けた運転手にタクシーチケットを手渡し彼は指示通りに進むように言う。

少女を挟むようにして後部座席に乗り込んだ学生二人を不審そうに見ていた運転手だったが、鬼気迫るような岩崎の表情に大人しく頷いた。

「……その先左折、その次の信号も左折」

「それならこの先の広場でUターンした方が早……」

「言うように進んで下さい。お願いします」

運転手は不可解そうに首を傾げたが、彼の言うように進み出す。

彼の指示は目的地に早く着くルートではなかった。まるで道に迷っているように何度も似たような道を進んでいる。

明らかに効率が悪い。

「……何やっているの？」

少女が不思議そうに尋ねる。

「遁甲だ」

「トンコウ？」

「さっきも言ったけど、簡単な目眩ましだよ。あの男……彼が俺たちを追いかけてくくしているんだ。……ああ、そこは右折です。その先真っ直ぐ。……日と時間がいいから今回は上手く行くが本来はこんな簡単にはいかない」

明弥は後ろを振り返る。

前に彼に追いかけられた時には猛スピードで接近してくる赤い影が見えた。しかし今日はそれが無い。それどころか、騒ぐ人の気配

すら感じなかった。

岩崎は少しだけ表情を緩める。

「無理に信じなくても良い。分かる必要もない。ただ、安全に進む方法なのだと思うていればいい」

「岩崎くん……」

彼はちらりと女の子を見て、次いで明弥を見据えた。

その視線は鋭いが恐ろしくは無かった。

「お互いに聞きたいことも、確かめたいこともあるはずだ。だが、まずは目的地に着くのが先だ。遠回りになるが、それでもあと十分くらいで着く」

岩崎は身を乗り出して運転手に次の指示をする。

「……次の信号左折、そのまま真っ直ぐ山の方へ」

特殊な客に少し楽しくなってきたのか運転手は威勢良く返事をする。

こんな風になんなルートを指定する客なんて今までにいなかったのだろう。イライラして怒り出すような運転手でなくて良かったと思った。

こう言うところは恵まれているのだと明弥は思う。

自分の身の回りで他人が聞けば不運としか思えないことばかり起こるけれど、明弥はその分人に恵まれている。いい人なんて言えばまた怒られそうだが、運転手も岩崎もやっぱりいい人なのだと彼は思う。

そして彼女も。

明弥はちらりと隣を見る。

握ったまんまの少女の手が少し汗ばみ震えているのが分かった。

「大丈夫？」

声を掛けると少女は微笑む。

「はい。平気です」

控え目だが、明るい笑顔。

この状況には似つかわしくない。

それでもほつとしてしまつような力が彼女の笑顔にはあつた。

「そろそろ着くぞ」

岩崎が言う。

いつの間にか木々の多い静かな場所まで来ている。

タクシーは中でも一際木の多いところで停車する。すぐ脇に、赤い鳥居が見えた。

「……神社？」

少女とともにタクシーを降りて、鳥居を見上げながら明弥は呟く。運転手に礼を言つて降りてきた岩崎が横にならんだ。

「岩崎神社だ」

「岩崎って……」

彼は肯定するように首を縦に振つた。

「ここは俺の先祖が代々宮司を務めている」

7 影響の波

神社の拝殿の脇を抜けると、そこには道場のような建物があった。ここで神事の時に奉納する舞の練習などをするのだと岩崎は言う。

彼に促され道場に入ると暖かいような空気を感じた。木々の覆い茂る神社の敷地内は他の場所より少し温度が低い。四月の暖かい気候とはいえ、少し肌寒さも覚えるほどだ。それに比べてこの建物はまるで暖房か床暖房のようなものが入っているかのように暖かだった。建物や床は古く黒光りをしていてとても床暖房が入っているようには見えなかった。

妙な暖かさに違和感を覚えながらも中に入ると岩崎が入り口に何かを貼りつけたのが見えた。

お札のようだ。

それも彼の言う「遁甲」の一つなのだろうか。疑問には思ったが、尋ねなかった。今はそれよりも聞きたいことが山ほどあった。

「まずは聞きたい」

座るように促しながら岩崎が少女を見る。

彼女は南条鈴華と名乗った。獣の男、南条太一とは兄妹なのだと言う。

「君は彼が……人とは違うことを知っていたのか？」

彼女は頷きながら座る。

明弥もその近くに座る。練習場ということもあつてか座布団も無かったが、床はやはり妙に暖かい。床に直接座っても冷える印象はまるでなかった。

「はい、知っています。でも、あんな風に突然変化したのは初めてでした」

「苦しんでいたのはいつもの事か？」

「いいえ。見たことはありません。いつも太一くんは自分の意思で変

化していたし、自分の意思を失うなんてこと……ありませんでした」
どうして急に、と鈴華は視線を落とした。悲痛そうな表情で俯いた彼女に明弥は掛ける言葉もなかった。

岩崎はそんな彼女を静かに見つめながら思案するように口元に手を当てた。

彼は驚くほど冷静だ。明弥は太一の兄を名乗る男から説明を受けていたから、突然変化した太一を見ても冷静でいられたが普通こんな風にはいかないだろう。

神社の関係者というのはこういう現象に慣れているというのだろうか。それとも、彼だけが特別なのだろうか。

明弥はじつと彼を見つめる。彼はやがて静かに明弥を見据えた。

「多分、久住が原因だろうな」

「えっ？ 僕！？」

突然自分に振られて明弥は頓狂な声を上げた。

明弥は慌てて言い直す。

「あ……えっと、俺が原因って……」

「入試の時もそうだった。お前を中心に不可視の波のようなものが出た」

「不可視の、波？」

尋ねると岩崎は頷く。

「限りなく霊体に近い波。外部に向けて勢いよく放たれる‘オーラ’と言った方が分かりやすいか？ 厳密には違うがそれに似たものだと認識してくればいい」

「オーラと言われればんやりと納得する。」

「不可視なのに岩崎君には見えたの？」

指摘すると彼は少しだけ眉根を寄せた。

「俺のことはどうでもいい。問題はその波だ。その波に影響されるように入試の時は水道管が破裂し、今回は彼が変化を起こした」

「……他人に影響する力……インパクト」

少女がぼつりと呟いた。

岩崎が鈴華の方を向く。自然と明弥も彼女の方を見た。

「お前、何か心当たりが？」

少女は頷く。

「聞いたことがあります。他人の潜在能力を引き出す力です。爆発のように起こり、他人に影響を及ぼす力なので、インパクトと呼ばれていると」

不可解そうに岩崎は眉をひそめた。

「何故君がそんなことを？」

「私の兄が……そう言った能力を研究しているんです」

「兄というと先刻の？」

鈴華は首を振る。

おさがが左右に揺れた。

「違います。上の兄、斎です」

「あ、その人、こういう髪型で……スーツの似合う優しそうな人？」

身振りで説明すると少女は驚いたように目を見開いた。

少し驚き、警戒するような素振りを見せる。

「そうですね……兄を知っているんですか？」

「前に太一……さんに襲われた時に助けてくれたんだ。名前聞きそびれてどうしようかって思っていたんだ」

「そうですね」

少女はほっとしたように微笑む。

岩崎が睨むように明弥を見た。

「……なるほど、覚えていないというのはやっぱり嘘か」

「え？」

呆れたように岩崎は息を吐く。

「お前、警察に覚えていないと言っただろう。車に乗り込んでからのことは良く覚えていない、気付いたら病院にいた、それは嘘だったんだな」

「え？ ええ？ どうしてそんなこと」

あの時のことは誰にも言っていないはずだ。警察に事情を聞かれ

たことすら嫌でも事情を知ってしまった家族にくらいしか話をしていない。何故詳しいことまで彼が知っているのだろうか。

彼は少し首を傾げる。

「お前色んな刑事に聞かれただろう。その中にいなかったか、岩崎という女の刑事」

確かに病院で意識を取り戻してから色んな警官に入れ替わり立ち替わり同じ事を何度も聞かれた。その中に確かに岩崎と名乗った女刑事がいた。小柄で若い女性なのに刑事なのだ、と強く覚えていたのだ。

考えて見れば同じ岩崎だ。

岩崎なんて苗字は珍しくない。けれどこんな言い方をするとすることは血縁なのだろう。そう言えばどことなく雰囲気似ているような気がした。

「あ、あれ、もしかしてお姉さん？」

「母親だよ」

「ええっ？ あの人まだ三十台前半くらいだったよ！？」

驚愕した明弥の声に恥ずかしくなったのか、岩崎はそっぽを向く。……俺の母親のことはどうでもいい。嘘を付いたこともこの際置いておこう。問題はこれからどうするか、だな。……聞くが、彼はどうやって人の形に戻る？」

「自分の意思で、です」

鈴華の答えに岩崎が頷く。

「今回の場合人の意思を失っている。つまり正気を戻させるか、気を失わせない限り、彼を人の形に戻す手段はない」

「そんなの、どうやって？」

足の速さも、腕力も、人を遥かに凌ぎ簡単に意思を失わせられない事を経験から知っている。明弥達の力だけでどうこう出来る相手ではない。

「それを今考えている」

岩崎は厳しい顔で答える。

明弥も難しい顔で考え込む。

(……斎さんなら)

彼なら出来る。

連絡先なら鈴華が知っているだろう。

(だけど、それはダメだそれは最後の手段……)

あの日、別れ際に言ったのだ。

彼に使った麻酔は強いものなのだと。今回は大丈夫だったけれど、頻繁に使うことがあれば命に関わることさえ出てくる、と。

だからダメだと明弥は思う。

彼が人でなくても、例えば自分を襲ってくる相手だとしても、死なせていい、危険な目に遭わせて良いなんて言う理由になんてならない。

どうすれば良いのだろう。

斎に連絡を取って最良の手段を考えて貰うのが一番いい。けれども、もしもあの薬を使う事が最良なら、太一が危なくなる。明弥達の力で何とか出来るならそれに越したことはない。

優しそうな人だと思ったのだ。

外面は厳つく怖そうな印象の人だったが、鈴華を大切にしていたし、出会ったばかりの明弥を庇ってくれるような人だ。獣の姿は怖いけれど、どうでもいいなんて思えなかった。

(やっぱり斎さんと連絡を……)

決めるのは自分だろう。

岩崎の方が冷静で決断力もあるだろうが、彼は巻き込まれたただけだ。鈴華はまだ小学生で、太一の妹。彼女に決めさせてはいけない。今、選択すべきは自分。

だけど、分からない。

何が正しいのか、最良なのか。

何も分からない。

ピリリリ、と不意に携帯電話の電子音が鳴る。

明弥はぎくりとして顔を上げた。

鳴っているのは岩崎の携帯電話だ。彼は携帯電話を見つめたまま

一向にその着信に出ようとしない。

「出ないの？」

「……出る、しかないようだな」

「？」

意味が分からず明弥は首を傾げる。

彼は顔をしかめたまま携帯電話を耳に押し当てた。

8 圏外

「……………はい」

岩崎は間を置いて声を発する。

相手は誰なのだろうか。

訝しがるような彼の表情は変わることが無かった。短く確認するように返事をし、必要最低限の事しか話していないように聞こえた。鈴華も不思議そうに彼の様子を見守っている。

やがて岩崎は携帯電話を明弥の前に突き付ける。

「久住、お前に電話だ」

「俺に？」

出る、と促されて仕方なく明弥は携帯電話を受け取る。

岩崎の携帯に電話をかけてきた相手が、自分に用があるとはどういう事だろうか。まさか、警察の関係の人なのだろうか。

携帯電話を持ち慣れていないせいか、何処か変なボタンを押してしまいそうに余計に緊張をした。

「もしもし？」

声をかけると聞いたことのあるような声が戻ってきた。

『明弥さん？』

「あ、はい」

『水守祐里子です』

「えっ……………あ？ 水守さん？」

名前を言われて一瞬のうちに誰なのかを思い出す。バレンタインの日、明弥が病院まで付き添った女の人だ。「一度だけ助けます」と電話で言われたきり連絡がなかったからすっかり忘れていた。

岩崎と知り合いなのだろうか。だとしたら何故今自分が一緒にいることを知っているのだろうか。

混乱していると向こう側から笑うような声が聞こえる。

『私の助けが必要だと思ったから連絡を差し上げました。そこだと

携帯電話が一番いい媒体だったから利用しただけですよ」

「えっと……意味が分からないんですが」

水守はくすりと笑い声を上げた。

『あまり長く介入していると術者に負担をかけるから手短に言います』

「はあ」

『引いてダメなら、押してみる』

「はい？」

『占星の結果です。本当ならそっちに行つてあげたいけど、今仕事なので。多分、言葉だけでも役に立つと思うのだけれど』

前の時と同じだ。

彼女の言葉は今ひとつ分からない。

けれど何故だろう。

それが意味のある言葉に聞こえる。

『先刻の彼、多分彼なら』

ふつ、と突然音が途絶えた。

「もしもし？」

声を掛けても返事は戻らなかった。切れたのだ、と分かる。

結局、何だったのだろう。

携帯電話を耳から離すとすぐに岩崎の声が聞こえた。

「久住」

「この道場は圏外だ」

「……？」

「電波が入らない場所では携帯は鳴らない。……この意味が分かるか？」

「えっと」

それはつまりどういう事だろうか。

携帯電話を見ると確かに「圏外」の文字がある。携帯は持っていないのだけど、圏外では着信しない事くらいは分かる。だが、水守からの着信があった。

どう考えても矛盾している。
考えるほどに分からなくなった。

混乱をする明弥の代わりに鈴華が答える。言葉を選んでいるように慎重に。

「今の着信の相手は普通の人ではないんですね？」

「そう言うことになる」

分らない。

明弥は首を傾げた。

「普通の人じゃないって……水守さんはちゃんと生きている人だよ」

「そう言う意味じゃない」

ますます意味が分からなくなり明弥は瞬く。

鈴華は全て分かっているという風に落ち着いていた。分からないのは明弥だけだ。

置いてけぼりになったが、話は続く。

「久住、彼女は何と？」

「ああ、うん、ええっと……」

混乱していたが、一人で混乱している場合でもない。明弥は彼女から言われたことをそのまま伝える。

話の流れで水守と出会った時の事も簡単に話した。バレンタインの時の事故のことにまで言及するとさすがに岩崎は顔をしかめたが何か追及することは無かった。

一通り全て話し終わると彼は暫く黙り込んで何か思案する様な素振りを見せた。

やがてぼつりと彼は呟いた。

「実のところ、俺が人狼に会ったのは彼が初めてじゃない。だから彼がずっと獣の姿でいることに危険性があることを承知している」

「危険性？」

「人としての性が抜ける。つまり、身も心も完全に獣になってしまうと言うことだ。そうなれば言葉は通じないし、人を襲った場合人によって処分される」

ぎくりとした。

それはつまり、太一を殺すと言うことだ。

脳裏に浮かんだのはアスファルトの上に倒れた赤髪の男。あの時は気を失っているだけだったが、あの時の杞憂が現実のものになってしまう。

そんなのは嫌だ。

「増して今回は暴走している状態だ。早く戻してやらなければ獣に飲まれる。……南条斎と連絡は取れるか？」

「とれます。でも、今は遠出しているから、多分戻るのに時間がかかると思います。急いでも、深夜」

確認するように彼は頷く。

おずおずと声を上げる。

「な、何とかならないの？」

「だからそれを今、考えていたんだ。水守祐里子の言葉を信じるのなら方法が無いわけじゃない」

視線が彼に集中した。

少し緊張した風に岩崎が言う。

「お前の……久住の波をもう一度彼にぶつけるんだ」

「えっ」

「インパクトをもう一度起こすんですか？」

不安そうに彼女が尋ねる。

こくりと頷く。

「毒を以て毒を制す、聞こえは悪いけれど、そう言う方法はいくらでも使われる。やってやれない事はないだろう」

「でもやり方が……」

可能性があるなら、やりたい。

けれどそのインパクトを起こす方法が分からない。

「強い感情」

「え？」

「久住が無自覚で使っているのなら今までの状況を考えて、おそら

く引き金になっっているのは久住自信の感情だ。強く願えば意識的に
行うことも可能だろう」

上手く、行くのだろうか。

失敗すれば自分だけではなく他の人にまで迷惑がかかる。まして
自分の能力について今さっき言われたばかりで自覚さえもない。そ
んな状況で上手くいくのだろうか。

何より太一は？

インパクトという能力で無理矢理獣になった。もう一度同じ力を
当てられて今度こそ取り返しが付かないことにならないだろうか。
だけど、他に方法が分からない。

岩崎の言葉を、水守の言葉を信じて良いのだろうか。

二人ともいい人だが、今回は人の命に関わること。簡単には決め
られない。

(でも)

「俺が出来る限りのサポートはする。無理強いはいしない。やるかど
うか決めるのはお前だ」

「……」

明弥は鈴華を見る。

彼女は縋るような目で見ていたが、視線が交わると気まずそうに
目を伏せた。

ぎゅっとまぶたを閉じる。

そしてゆっくりと開いた。

「やるだけやってみる。だから、」

手伝って欲しい。

明弥の言葉に、岩崎は力強く頷いて見せた。

9 馬鹿息子

いつも突然呼び出される。

そう言う職業に就いているのだから仕方がないと思いつつも苛立ちがあった。自宅にいたのだからまともなスーツを着る余裕もあったが、腹いせのように女性用のブランドパンツスーツを着込んできた。開襟シャツを着てメイクもしっかりとできている。

腰をくねらせながら廊下を歩くと、藤岡に慣れていない別の部署の人間達が驚いたように振り返ったが一課に近づけば近づくほど藤岡を気にする人は少なくなる。他の刑事にするように挨拶をし、堂々と廊下を歩く藤岡の為に道を譲った。

藤岡は扉の前で一度立ち止まり口紅が取れていない事を確認すると、ようやくドアを開いた。

すぐに男女の言い争う声が聞こえてくる。

藤岡は苦笑した。

近くにいた若手刑事の肩に手を置いて話しかける。

「なあに？ またやってんの？」

「ああ、お疲れ様です。今さっき始まった所ですから暫く続きますよ。この光景、もう一課の名物ですよね」

伊東は笑いをかみ殺したような表情で立ち上がる。

彼が座っていた椅子を奪うように座りながら藤岡は彼を見上げる。

「あなたも随分と慣れたわよね。最初の頃はおろおろしていたのに」

「さすがに何年も相手していれば慣れますよ。コーヒー飲みますか？ 不味いですが、目が覚めますよ」

「不味さだね。その不味さがやみつきになっちゃうのよね、こういう仕事していると」

藤岡は欲しいと言うのを手で示す。

伊東は頷いた。

「えっと、ミルクと砂糖、どうします？」

いらない、と彼は返事を返す。

セルフの飲料コーナーからコーヒー用のプラスチックカップを出しコーヒーを注ぐ。何も入れずに藤岡の前に差し出し、自分用には砂糖を入れてかき混ぜた。

「珍しいですね、ブラックなんて」

「ダイエットしているの」

藤岡はふふと、科を作って笑った。

その様子に伊東は平気な顔で笑った。自分の女言葉も女装も慣れたな、と藤岡は思う。どう見ても綺麗なオカマにしか見えない彼の女装に最初は軽い嫌悪感を示していた伊東だったが今では全く気にする様子もなく接してくる。

本名ではなくテレビで良く見かけるアイドルの名前と同じ「藤岡真由美」で通しても彼はまるで気にしなくなった。誘おうとコナをかければさすがに嫌そうにしたものの、彼の女装を否定はしなかった。

（この子ってば、私より順応性高いわよねえ）

不味いコーヒーを飲みながら上司の喧嘩を見つめる。

中津龍二と岩崎愛の仲の悪さは一課でも評判だった。

超常能力が存在するという前提で捜査するゼロ班の班長である愛と、超能力を認めない中津とでは思想が全く違う。常に対立しあうのは無理もない話だった。

ただ、中津が愛に突っかかる理由はそれだけでは無い。

もしも超常現象を全て否定したいだけなら、ゼロ班全員を敵視していても良さそうなのだが、ゼロ班に属する伊東を中津は後輩として可愛がっている。服装のことで注意される事もあったが藤岡も敵視されている訳ではなかった。

だから、愛に突っかかる理由はそれだけではない。理由になりそうな事を知っているだけに、藤岡は複雑な気持ちでかつて同じゼロ班の一員だった中津を見つめる。

「で、今日は？」

「例の、中津刑事が会った赤毛の獣の話です。今日、また出現しました」

「それで私も呼び出されたの？」

「やれやれ、と藤岡は机に肘を突く。

「実はその対処で揉めているんですよ」

「っていうと？」

「目撃者の証言では人が突然獣に変わったそうなんですよ」

「へえ、それって……」

伊東は頷いて言い争う二人の方を見る。

「はい、愛さんは人なのだと言い麻酔銃を使うべきじゃないって言張っています。しかし、何の証拠もないと中津さんが突っぱねています。写真を撮ったという目撃者が多数いたんですが、そのどのカメラにもちゃんとした画像が残っていませんでした」

写真に残った場合と残らなかった場合、残らない方が本物である可能性が高いと経験上知っている。最近のカメラは性能が良くなった分、不可視の光までとらえてしまうのだ。それで余計に曖昧にか映らない。

今回の件で言えばその獣に変わった人というのは人狼なのだろう。肉眼で直接見たわけではないが、藤岡はかつて一度人が狼に転変する姿を見たことがある。その時、その人の身体を覆うように普通の人間に見ることの出来ない光が包み込んでいた。

おそらく目撃者のカメラに映ったのはその光に飲まれた姿なのだろう。

そんな曖昧な写真で中津が納得するとは到底思えない。

どっちにしても愛が、最終手段、を使えば中津が折れざるを得ないのだが、もう暫くこの不毛な言い争いが続くのだろう。

「時間稼ぎかしらね」

伊東は苦笑する。

「だと、思いますよ」

「それにしたって中津さんも愛も、お互いに食い下がるわね」

「今回はどうやら勇気くんが居合わせたようですよ。中津さんに連絡をとったそうなんです」

藤岡は笑う。

「それで、これなのね」

‘岩崎警部の息子’である勇気はここにとって少し特殊な立場にある。元々愛自身の立場も特殊なのだが、警察でもなく、協力者として公表する訳にもいかない勇気は余計に特別な位置にいる。

自分の息子である愛にしてみても、中津にしてみても彼が事件に関わっているのは揉めずにはいられない事柄なのだ。

まして危険が絡む状況ならば余栄に。

不意に伊東の胸ポケットから携帯のバイブ音が響く。

彼はテーブルにコーヒートを置くと軽く断りを入れて携帯電話を取りだした。

「はい、伊東です。……ああ、今ちょうど話していたんですよ」

「勇気くん？」

「そうです。……はい、今中津刑事と揉めていますね、こちらは通常通りです……ああ、なるほど、理解しました、ちょっと待って下さいね。それで、彼のこと、どう思いました？」

彼は携帯電話で話をしながら言い争いを続ける上司の方へと進む。携帯電話を肩に挟み込み、愛と中津の間を引き裂くように両手で押しやった。

その行動に周囲の警官達がどよめく。

藤岡は口笛を吹いた。

「会話中よ、伊東くん」

「何か用ならば後にして下さい」

同時に抗議を入れられるが彼は全く顔色を変えずに愛の目の前に携帯電話を突き出して言う。

「埒のあかない会話はそのくらいにしておいて下さい。緊急を要する電話です」

「誰？」

「出れば分かります。この場合は自分が預かります」

愛は携帯電話を受け取り伊東を睨む。

「いい身分になったわね」

「文句なら後で聞きます。今は電話に出て下さい」

「……」

まだ何か文句を言いたげな彼女だったが、緊急という言葉が気になったのか、すぐに電話を片手に電波の入りやすい窓辺の方へと向かう。

話を途中で中断されてはつが悪そうに中津は溜息をつきながらネクタイを少し緩めた。

伊東は彼の方を見て言う。

「今から獵友会に要請しても早くても明日の朝になりますよね？」

「そうなりますね」

中津は淡々と答える。

「では今晚我々が動いても問題はありませんか？」

伊東の言葉を中津は正確に理解する。

「市民の安全が最優先ならば」

「当然です。では、いいですか？」

「止めても動くつもりならばもう止めても無駄でしょう」

中津は諦めたように言う。

電話から戻ってきた愛が嫌味のようにたたみかける。

「…… もっとも、あなたに止める権利はありませんけどね、中津係長」

「それなら早くあなたの‘必殺技’を使いなさい、岩崎警部」

愛は少しむっとした表情を浮かべる。

嫌味よりも「岩崎警部」と呼ばれた事に腹を立てたのだろうと伊東は軽く吹き出す。が、上司二人に睨まれ肩を竦めた。

「七光りは最後の手段よ。…… 協力をお願いできるかしら、中津くん」

「分かりました。ただし、期限は明日の朝までです。それまでに何

とかしなければ……」

「はいはい、マタギでも何でも呼んで頂戴」

彼女は適当にあしらうように手を振る。

先刻の腹いせだろうか。彼女の性格を理解している中津は軽く肩を竦めた。

愛は伊東に向き直り指示をする。

「伊東くん、眞由美と一緒に馬鹿息子たちを保護して頂戴。あの子たち、自分たちだけで何とかするつもりよ」

10 サザナミ

日は堕ち、そろそろ一般家庭は夕食時を迎える頃だろう。

夜勤明けも常務をこなせばさすがに疲労もピークに達する。木村早希はあくびをかみ殺しながらふらふらと家に向かつて歩いていった。過酷だというのは知っていたが看護師というのは想像した以上の職業だった。小児病院が少ない今、入院患者の数は異常なほど多い。ベッドの空きも少なく、部屋にギリギリの人数を詰め込んでまだ足りない。医師はもちろん、看護師の数も足りない。

その職業を選んだのだから文句をいう資格などないが、正直辞めたいと思うことも何度もあった。ここまで疲れて帰ってくるとやはり辞めたいと思うことが多い。

続けているのは子供達の笑顔と感謝の言葉があるからだ。

見返りを求める訳ではないけれど、それが無ければ今も看護師など続けていないだろう。

それに、と早希は思う。

（それに、今辞めたら南条さんと接点無くなっちゃう）

南条太一は南条鈴華の兄だ。鈴華は一年の大半を病院で過ごしている。彼女が入院していると忙しい長兄に変わって週に何度も病院を訪れてくる。このところ鈴華が一時退院を許可されたために、太一と会う機会も減ってしまった。

それが最近早希を気弱にしている原因の一つなのだろう。彼となかなか会えないもどかしい日々を過ごしているうちに次第に看護師を辞めてしまいたいと思うようになってきた。けれど、今看護師を辞めてしまえば彼との接点が完全に消えてしまう。

入院患者の兄である彼に、どうやら自分は恋をしてしまったらしい。

早希は小さく溜息をついた。

少し前までこうではなかった。

太一に会えれば少し嬉しいだけで、ここまで恋い焦がれることはなかった。不安が余計にそうさせているのだろうと思った。

鈴華が退院するその日、もちろん太一か、その上の兄である斎が来ると思っていた。だが、来たのは委任状を持った坂上という運転士の男だった。斎は普段から忙しくしていたから分かるが、彼が来られない日に太一が来ないと言うことは今まで無かった。何かあったのかと尋ねて見たが、運転士は風邪を引いたのだと言葉を濁すように言った。それから彼には一度も会えていない。

彼の身に何かあったのではないかと不安に思う。
不安に思っているうちに自覚した。

自分は、南条太一のこと好きなのだと。

まるで学生のようなな、と自分でも可笑しくなる。そのくらい純真に彼のが好きになつてしまっていた。だから、彼に会えないことが不安なのだ。彼に何かあったのではないかと無意味な心配をしてしまう。

「馬鹿みたい」

彼女は自嘲気味に笑う。

そんなに心配ならば自宅に電話をかけてみればいい。会いたいのならそう伝えてみればいい。気の優しい彼のことだから無下に断るような事はしないだろうと思う。

けれど、やはり怖いのだ。

「？」

視線を少し上げたその時だった。

彼女の視界の端に、赤い影が入り込んだ。

「南条さん？」

彼のことを考えていたから連想してしまったのだろう。視界の端に入り込んだ赤い影が太一のような気がしたのだ。影は目の前の十字路を横切るように道を進んでいたように見えた。

足早に彼女は十字路の所に急ぐ。

何故だか、彼に会える気がしたのだ。

夕食時のせいか人気のない道を覗き込んで彼女は息を飲んだ。
街灯の下に立つのは、太一ではなかった。……人間ですらなかった。

狼のように大きい犬。

明るいライトに照らされてその毛並みは赤く輝いていた。

早希は一步後退した。

（どうしよう……）

不意に思い出す少し前に獣に襲われて病院に運ばれてきた男の子のこと。警察の話では街中で狼のような赤毛の犬に襲われたという。多分、その犬がこの犬だ。

犬はこちらに気が付くと街灯の真下で、飛びかかる寸前のように身を低くして呻り声を上げる。

早希は犬から視線を逸らさないように片手でバックの中を探った。指先にぶつかったのはデオドラントスプレーの缶。武器になりそうなものはそれくらいしかない。

彼女は取り出して構える。

走って逃げれば犬は反射的に追いかけてくる。徐々に後退していくのがいいだろう。万が一襲いかかれた時はスプレーで驚かせた隙に何処かに逃げ込むしかない。幸い住宅街だ。民家に逃げ込めれば何とかなるだろう。

考えた矢先だった。

犬が地面を蹴る。

「！」

動くことも出来なければ、悲鳴さえも上げられなかった。

高く跳躍した犬の身体が早希の上に覆い被さる。

その身体は大きく、早希よりもずっと大きな獣だった。力も尋常ではない。押さえ込むような前足が左肩と肺を強く圧迫した。

「っ……」

息が出来ない。

もがくと、前足が肺から外れようやく呼吸が出来るようになる。

早希はもがきながら唯一自由に動く右手でスプレー缶を犬の頭部めがけて叩きつける。しかし、犬はびくともしない。もう駄目なのかも知れないと半ば諦めた時だった。

犬の片耳に光るモノを見つける。

それは太一が耳に付けているループのピアス。

「……………ん、じょうさん？」

「……………っ！！」

呟いた瞬間、犬の呻り声が苦しそうな声に変わる。

自分でも何故そう呟いたのかわからない。

何故か犬が彼のような気がしてならなかった。そんな風に考えてしまうのはおかしいことだが、その時の早希は疲労に加えて動揺していたために正常な考えが出来ていなかった。

殆ど確信をして早希は犬に向かって呼びかける。

「太一さん！」

苦しんでいる。

犬が。

まるで人が顔を覆うように、犬の前足が顔にかかる。よろめくように犬がゆっくりと彼女の上から退いた。

ふらつきながら徐々に彼女から遠のいていく。

「……………太一さん……………」

追いかけようと彼女が動くと、犬が脅迫するように呻り声を上げる。

来るな。

まるでそう言われた気がした。

早希は上半身を起こしたままその場を動けなかった。

やがて赤毛の犬はゆっくりと歩いていく。後ろ姿が闇に飲まれていく。

涙が溢れた。

恐怖や安堵によるものではない。

あの犬が、太一が自分を庇ってどこかに消えてしまうような気が

して辛かったのだ。

ふつり、と何かが切れるように彼女の身体がアスファルトの上に落ちる。

意識が遠のいていくのが分かる。

薄れていく意識の中で彼女は祈る。

彼に何事も無いことを。

南条太一が無事にいることをただ祈った。

11 澱の中に

沈んでいく。

淀んだ澱の中に。

光を見失う。

何も聞こえない。

何も。

「久住」

呼びかけられて明弥ははっとする。

インパクトという力について考え込んでいるうちにぼーっとしてしまつたようだ。鈴華が心配そうにこちらを見つめている。

無理しないで下さい、そう言われている気がして、大丈夫だと微笑んでみせる。

明弥は普段と変わらないように振る舞つた。

「何？ もう着く？」

「……………。ああ、もうすぐ着く。その前にもう一度確認しておこう」

「う、うん…………」

彼は地図を広げて書き込まれた線を示す。

今、明弥達は新しく呼んだタクシーで市が運営する球場へ向かっている。この辺りで一番広く見通しの良い場所はそこか学校のグラウンドくらいしかない。人気の無さや追いつめやすさを比べれば球場の方が良いだろうと彼が判断したのだ。

そこに太一を誘き出し、インパクトを使って元の形に戻すのだと彼は言う。

本当に自分に能力があると自覚できない。けれど、ここまで来たらやるしかないのだろうと思う。

「彼がこのゲートから球場の中に入ったら、俺が行動範囲を狭めていく。お前は彼を止めることをただ強く念じ続ければいい」

「……本当に来るの？」

「来る。水守祐里子のおかげで少し細工を思い付いた。奴がその誘いに引っかかっているなら既にここに向かっていているだろう」

「引っかかっているなかったら？」

尋ねると岩崎は一瞬口を噤み、一拍置いてから返事を返す。

「……お前は、彼に好かれている。だから、どっちにしてもお前を狙ってくるだろう。それは経験済みだと思うが？」

確かに明弥は初めて彼に遭遇した時から狙われている。

犬でさえ空気に紛れた匂いを嗅ぎ分けられる。人狼の嗅覚がどれだけあるのかは知らないが、人間より遥かに優れているだろう。多分、匂いを辿って明弥を狙ってくるのだ。

「……！ 止めて下さい」

彼は急に運転手に向かって叫ぶ。

まだ入り口に到達していない。

車が急停止し、車内が大きく揺れる。

岩崎の瞳は背後の暗がりを見つめている。

「ど、どうしたの、突然」

「……状況が少し変わった。久住、鈴華、お前達二人で先に向かってくれ。俺は後から追いつく」

「ちょ……岩崎君！」

岩崎は一万円札を明弥に押しつけるとそのまま外に飛び出していく。

彼の姿はすぐに暗がりには飲まれて消えた。

「眞由美さん」

勇氣は暗がりの中に呼びかける。

タクシーの中に見えたのが間違いでなければすぐ近くに彼がいるはずだ。

こっち、と手を振り呼びかける女装をした男の姿を見つけて勇氣は彼に駆け寄った。

「早いですね。……母から全部聞いていますか？」

もちろん、と彼は頷く。

「勇氣くんのお願いだもの、私大急ぎで来ちゃったわよ」

「伊東さんは？」

「向こうで待機しているわ。警察部隊、いつでも動ける準備出来ているわよ」

「部隊って……よく中津さん説得できましたね」

藤岡は腰に手をあてて遠くを眺める。

「勇氣くんたちが自分たちだけで動くつもりだって言ったらあっさり納得したわよ」

「そうですか」

先刻、勇氣が母親の愛に連絡を取った時、万が一のことに備え警察部隊の編制を要請した。正直こんなに早く来てもらえるとは思っていなかったし、最悪少人数部隊であるゼ口班しか動かないかとも思っていた。

けれども愛が機転を利かせたのだろう。

ただ、中津も勇氣の性格を知っている。自分たちだけで解決しようなどと思うような考えを持っていないことくらい分かっているだろう。ひよっとしたら、騙されてくれたのではないだろうか。

「むしろ愛の方が乗り気じゃなかったわ」

だろうな、と勇氣は思う。

愛はどんな些細な事件でも勇氣が関わりを持つことを嫌がる。しかし超常現象に関わる事件か否かを判断する時、勇氣のような稀な

力が必要になってくる。だからいつも仕方なく協力させたが今回のように明らかにリスクの高い事件では関わらせたくは無かったのだらう。

だが、勇気が珍しく強く押したことを簡単に反対はできなかったのだ。

結局乗り気でもなくても愛は動いた。

息子としてでなく、超常能力者として信頼されていなければ叶わなかったことだ。

「相方君には私たちが待機していること、教えなくていいの？」

「あいつには……保険をかけていること知って欲しくない」

勇気は少し言い淀む。

へえ、と藤岡はニヤニヤと笑う。

「勇気くんも可愛いところあるのねー」

「違います。久住を本気にさせるためです」

「あらあら、せっかく友達になれそうなのに、それじゃあ嫌われちゃうわよ」

「俺はそれでいいんですよ」

彼が影響の波を出せるか否か、それは半信半疑だ。しかし彼がその力を持っているのは確実だ。今までのことを考えれば彼は追いつめられていないと力を出せない。

警察が控えていることを知れば甘えが出る。

だったら知らせずに追いつめるしかない。

優しいフリをしてこんな陥れるような卑劣な手段に出たと知れば、いくら毒気のない彼でも怒るだらう。

それでも構わないと思った。

例え憎まれる結果になっても、明弥が自覚をして彼自身や周囲の危険が減るのならばそれでいいと思う。

今までだってそうしてきたのだから、今更また誰に恨まれても平気だ。

「球場に人狼を追いつ込んで下さい。おそらくもう既にこの周囲には

来ているはずですよ」

「オーケイ、勇氣くんはどうするの？」

「準備があります。久住たちと合流します。万が一の時は合図を…」

…」

送る、という言葉に被さるように球場の中から叫び声が聞こえる。

鈴華のものだ。

血の気が引いた。

「まさか、早すぎる……っ！」

12 終局

「大丈夫？」

手を差し伸べると彼女は礼を言って明弥の手を掴んだ。

球場の使用許可をとっていないために、狭い通路から中にはいるしかない。通路と言っても破れたフェンスを潜ってよじ登る道だ。小学生の頃、この道を使って球場の中で遊んでいて良く怒られた。未だに直っていないのは管理が杜撰なのか、それとも直してもすぐに壊されるせいなのかは分からない。ただ、この通路のおかげで今球場の中に入ることが出来たのは確かだ。

鈴華には少し段差が厳しく明弥が上から引き上げる形で中に入った。女の子の体重を気にするのは失礼かも知れないが、彼女の体重は妙に軽い。明弥の力でも十分引き上げられるような重さだった。

「来て良かったの？」

「はい、太一君は……私の兄ですから」

「心配だよね。俺、頑張るから」

「……大丈夫ですか？」

問われて明弥は苦笑する。

やはり岩崎のようにはいかない。自分では彼女を不安にさせてしまふ。

「頼りないだろうけど、出来る限りのことはするから」

「そうじゃないです」

「ん？」

「無理していいんですか？」

していると言っても、していないと言ってもどちらも嘘だ。

明弥は微笑む。

彼女の優しさが嬉しかった。

「正直言うとね、逃げ出したいほど怖いよ。でも、何もしないで後悔するのはもっと怖い。出来る事しないで嘆くのは嫌なんだ」

「久住さん、もしかして……」
彼女が言いかけた時だった。

フェンスに何か叩き付けるような音が聞こえ明弥は慌てて振り返った。咄嗟に鈴華を自分の後ろに隠す。

数十メートルほど離れた先の金網が大きく揺さぶられている。外にあるライトに照らされて、揺さぶっているものの姿が見え隠れした。

赤い毛並みの大きな犬型の動物……太一だ。

「そんな……まだ、早いのに……」

鈴華が怯えたような声をあげる。

密着した身体から小刻みに震える振動が伝わってくる。いや、震えているのは明弥自身も同じだった。

覚悟していた。

けれどやはり怖い。

「鈴華ちゃん」

守らなければ。

「……戻って、岩崎君探してきて」

せめて、彼女だけは。

「早くっ！」

彼女の身体を突き飛ばすのと同時に明弥は真逆の方向に走り始める。

同時に金網を突き破った赤毛が高く跳躍した。

「久住さんっ！……」

悲鳴のような鈴華の声。

明弥は身を低くして獣の鋭い爪を交わす。頭上を鋭い風が横切った。

どうすればいい？

混乱する頭を冷静にさせようと明弥は再び走る。市営の球場とはいえそれほど広くないグラウンド内を走り執拗に襲いかかる太一の攻撃をギリギリのところで交わしながら、彼が人間の姿に戻ることに

だけを祈り続ける。

強く想う。

戻したいと。太一を死なせたくない、鈴華を悲しませたくない。自分だって死にたくない。

影響の波は出ているのだろうか。

どうしたら彼が元に戻るのだろうか。大柄で怖そうだけど、優しい目をした彼に、どうやったら戻るのだろうか。

「太一君、止めて!!」

泣き叫ぶような声。

鈴華が泣いている。それでも太一は反応を示さなかった。

まるで獲物を追い立てるように太一は呻り声を上げる。遊びはおしまいだ、そうとどめを刺すことを宣言するような声。

振り向いた瞬間、身体に大きな衝撃を覚える。

牙しか見えない。

「……っ！」

明弥は目を瞑る。

「夜芸速の 十拳剣 此れ火産霊と成り」!!」

突然、岩崎の叫ぶ声が聞こえ太一の身体が炎に包まれる。

目を開くとこちらに向かつて走ってくる彼の姿が見える。

何が起こったのか明弥が理解するよりも早く。彼は太一に向かつて体当たりをする。炎に包まれていたように見えた太一は、ひるんだ様子を見せていたが、その身体の周りに炎は見られなかった。

大きな獣の身体は激しく飛ばされた。

岩崎は明弥を庇うように前に立ちながら何かを呟くように言う。

「千早振る神のすまいは吾が身に いて入る息もうちそとの神」

独特な節を持った声だった。

いつもの岩崎の喋る口調や声質とも違う。

不思議な韻律だった。

彼は手のひらに何かを載せてふっと息を吹きかける。細かく刻ん

だ紙のような白いものがふわりと空中に飛び散る。

その細かい白い破片は地面にゆったりとした円のような形を描く。彼の手のひらは火傷でもしたかのように赤く爛れていた。

明弥は目を瞬かせた。

「ひと ふた み よ い む な な や ここの たり、」

岩崎の向こう側で太一が起きあがる。

彼は空中に何か描くように手を動かした。

「ふるへ ゆらゆらと ふるへ、！」

「！」

明弥は覚えず耳に手を当てた。

彼の言葉に呼応するようにあたり一帯に耳鳴りのような甲高い音が響き渡った。空気が震えているのだ、と明弥は思う。

ぐあああ、と太一が今までにない苦しげな声を上げた。

「久住！」

促すように彼が叫ぶ。

やれ、と言っているのだ。

明弥はとにかく強く念じる。

だが、

「岩崎君！」

目の前の岩崎の上に、狂ったように吠えながら太一がのしかかる。だめだ、間に合わない。

明弥は頭の中で悲惨な光景を連想する。

獣に頸動脈を噛まれ目を剥く彼の姿。

そんなの、嫌だ。

何かが。

自分の中からせり上がってくる。

吐き気のように、

そしてそれは引っ張り上げるように明弥の意識を飛ばす。

見えたのは底なし沼のような黒い影だった。

全てのものを引きずり込もうとするように混沌とした影から触手が伸びる。

そこから手が生えている。

否、影が誰かを引きずり込もうとしているのだ。

もがき苦しむような手を明弥は掴んだ。

離れたら終わってしまう気がした。

ずるずるとそれは明弥までも飲み込もうとするように影が迫ってくる。

明弥の手が半分埋まった。

黒い影次々と伸ばされ明弥の首を掴む。

それでも手は離したくなかった。

（これは、太一さんなんだ）

離れたら明弥は助かる。

でも、太一さんは間に合わない。

諦めたくない。

今、彼の手を、残された意識を握っているのだから。

……ズミ

声が聞こえる。

誰から自分の手を掴んだ。

引き上げようとするように。

（いける）

明弥は渾身の力を込めて太一を闇の沼から引き上げる。

強く、何かが輝いた。

「久住！」

明弥ははっとした。

自分の肩を掴んで揺さぶっている男の姿が見えた。

何が、どうなった？

「……いわ……さき、君？」

呼びかけると彼ははっとしたように息を吐く。

気が付くと球場の中には沢山の人がなだれ込んできていた。

作業服を着ている者もいれば、警察の制服を着ているものもいる。

いつの間にこれだけの警官がここに着たのだろうか。

「……太一さんは！？」

辺りを見ても赤毛の男の姿は見えない。

その代わり警察官が何かを調べている姿が目に入る。

まさか、と不安がよぎった。

女刑事が溜息をつくように言う。

「大丈夫よ、今病院から連絡があつて命に別状は無いらしいわ。鈴華という女の子も一緒よ。……言っておくけど、獣医ではないわ」

彼女はそれだけを言い明弥から離れていった。

明弥は岩崎を見る。

「それじゃあ」

「ああ、ちゃんと人の姿に戻った」

「……良かったあ」

言つと岩崎が吹き出した。

明弥は目を丸くした。

こんな風に笑つた顔を見たのは初めてじゃないだろうか。

「お前、人のことばつかだな」

「そ、そうかな？」

「何はともあれ、お前、よく頑張つたよ。……ありがとう」

「え？ あれ、お礼言つの、こつちだよ」

彼は首を小さく振つて明弥の肩に額を押し当てた。

一瞬泣き出したのかと思つて戸惑うがそうでは無かった。彼はお

かしそうに笑いながら肩を振るわせている。
その様子がおかしくて明弥も吹き出した。

こうして、明弥の長い一日はようやく終わりを告げた。

1 智慧者

書類をまとめてクリップで留め処理済みのボックスに入れる。

軽く目を通し、印を押すだけの書類を処理するのはそれほどの労働にはならないが、出張でたまった仕事分量を考えると少しの時間も無駄にしたくはなかった。

斎はメガネの中指で押し上げて次の書類を手取る。

こんにちは、と控え目なノックの音がして彼は返事を返した。

「どうぞ」

失礼します、と言って入ってきたのは秘書の女ではなく南条家に昔から務める坂上だった。

彼は斎が生まれるよりも前から南条家に仕えている。身分制度が無くなって久しい現代社会においても、まだ古い家の周りにはその家に対するある種崇拜のような行動を取るものがある。坂上もそう言った昔の身分を重用視する節があった。

幼い頃から父親に従う坂上の姿を見ていた斎は、てっきり彼は父親の人柄に惹かれているのだろうと思ったが、父親が床に伏せて斎が家主として働くようになるると坂上は斎の側で働くようになった。

その時初めて坂上が人ではなく家に仕える人間だと言うことを認識した。

坂上は入り口で頭を下げる。

「斎様、警察の方がお見えになりました」

出張先で坂上に連絡は受けていた。

彼が不在の間、坂上が滞りなく対処をしていたようだが、警察はやはり斎と話がしたいとアポをとってきた。忙しい斎であったがこの状況で拒むわけにもいかない。仕事の合間の時間ならば構わないと了承したのだ。

ほぼ予定していた通りの時間に、斎は好感を覚えた。

「ありがとうございます、通して下さい」

はい、と返事が返る。間もなく小柄な女の刑事と、背の高いがっしりした男の刑事が入ってくる。二人ともまだ若く同輩のように見えたと、男の態度で女が上司であることが分かる。

女性の年齢は分かりにくい。おそらく齋が最初に思った年齢よりも遙かに上なのだろう。

「はじめまして、一課の岩崎です」

「伊東です」

二人は手帳を見せながら軽く会釈をしたが、その視線は齋から外されることは無かった。彼らの後ろで坂上が静かに廊下に出てドアを閉めるのが見えた。

齋は微笑んで挨拶を返した。

「南条齋です。弟がお世話になったそうですね。ありがとうございます。ました。どうぞあちらに」

応接用のソファを示すと二人はソファに腰を下ろした。

きよるきよると見回す様子は見せなかったが、二人とも確実に部屋の中を観察している。眼光の鋭さはさすが刑事と言ったところだ。

間髪入れずにやって来た秘書の女がお茶を三つ運びテーブルの上に並べた。

「随分お忙しいようですね」

女が言う。

「表向きには科学研究所だとか」

初めからその話題が来ると思っていなかった齋は多少面を喰らう。秘書は無言のままお辞儀をして部屋を出て行く。

「表向き、というのは少し語弊があるようですが」

齋は驚いてしまった表情を隠すように苦笑いを浮かべる。

「実際に科学の研究も行っていますから嘘はないでしょう。研究する対象に超常現象に関することが混じっている、それだけのことです。昨今新興宗教などの起こした事件の影響でカルトを思わせる単語は嫌われますからね。我々もそれと同じと思われては心外です」

齋が責任者を務めるこの研究所は、事件や事故などを含め様々な

現象を科学を用いて解き明かしている。彼らと会うのは初めてだったが、警察関係者が捜査協力を求めてここを訪れることは多い。公開はしていないが、超常現象に関する研究も行っていた。

当然警察もそれを知っていただろう。あえて確認を取るのはいかを探っているのだ。斎は言葉に注意しながら話を進める。

「太一さんとは血が繋がらないようですね」

「ええ、弟は継母の連れ子です」

「人とは違うことを知っていましたか？」

「はい、知っています。義母は再婚後すぐに亡くなったので、彼がそうになった経緯は知りませんが子供の事から人と違うことは認識していました」

「よく、一緒に暮らせたね」

鋭い言葉だった。

怒り出す者もいるだろう。だが、斎は冷静に答える。

「私も子供でしたから、怖いと思うよりは、格好良い、を思っていました」

「妹さんとは随分と年が離れていますね」

「彼女は父の妾腹の子です。親子ほど年が離れていますが、血を分けた妹です」

「複雑な家庭環境なんですね」

女は淡々と言い放つ。

挑発をしているようだ。斎は瞳の奥を鋭くさせた。あまりにも率直すぎる質問に激昂して何か重要な事を漏らすことを待っているのか、あるいは動揺させて聞き出しやすくしているのか。

「何か、私に聞きたいことがあるようですね」

斎は敢えて直球を投げかける。

女は顔色を変えずに答える。

「回りくどいことは嫌いですか？」

「はい、時間の無駄と思います」

「ならば単刀直入に聞きましょう。あなたは最初の獣化の時、手早

く対処しました。その時に、あなたは彼が再び暴走する危険性を認知していましたね。それなのに何故今回、彼を野放しにするような行動を取ったのですか？」

なるほど、と斎は思う。単刀直入と言ったものの、彼女が本当に聞きたいのはそこではないのだろう。

この岩崎という女刑事、なかなかの智者だ。他の刑事と同じように見ていれば痛い目に遭いそうだ。

「私は弟を普通の人間だと思っています。檻に閉じこめる事はしたくありません。それに今回は私自身油断をしていました。今までこういった事はありませんでしたからね」

「前例があれば油断はしなかったと」

「どうでしょう。私は弟を信頼しています。それも油断の一因になった可能性は捨て切れません」

彼女はじつと斎の瞳を見る。

斎は逸らすことなく見つめ返した。

お互いに探り合うような一瞬。

観念した、という風に斎は笑って見せた。

「貴女は、この研究所で行われた実験の結果、太一のような子が生まれ、鈴華もまたその犠牲者であると思っていますね？」

「そう言った前例があるならば疑うこともあります」

「私を捕まえるべきと考えているのでしたら、何か理由をつけて拘束するのが宜しいでしょう。大人しくするつもりはありませんが、逃げたり隠れたりするつもりはありません」

「認めるのですか？」

斎は笑みを崩さないまま首を振る。

「いいえ。ただあなたの言動からはそうしたいように思えます。実際私は太一の血液を採取し、研究をしています。それを人体実験と思われても仕方のないことだと思いますが？」

何かを言おうと口を開きかけた女刑事を、隣で黙っていた男が止める。

邪魔をするな、と言うように岩崎が睨むが男は構わずに口を開く。
「気を悪くされたのでしたら申し訳ありません。我々は他の捜査班のように犯人を挙げることを目的にしているわけではありません」
男の外見は警官と言うよりはヤクザかマフィアのように見えるが、岩崎の印象が鮮烈すぎるために、むしろ優しい印象を覚える。

だが、この女刑事と組んでいる彼もまた相当なのだろうと思う。

「人は禁忌の力を持てば使いたがる。大惨事に繋がりがねないサインがあれば見逃すことは出来ません」

「同感です」

「いずれ、あなたに協力を仰ぐこともあるでしょう。我々は超常現象に関しては素人ですから」

やはり彼もまた食えない男だ。

斎は息を吐いてソファに寄りかかり、にこりと笑って見せた。

「その時は、出来得る限りの協力はさせて頂くつもりですよ」

2 四海波静か

入学式の翌週月曜日。

あの一日がどんなに異常でも、今はいつもと変わらない平穏を取り戻している。それは明弥が楽天的な性格のせいもあるだろう。あんな事件の後だから興奮状態にあってもおかしくないが、小さい頃から事件に巻き込まれてきた明弥にしてみれば今更騒ぎ立てる事でもなかった。

自分自身が妙な力を持っていた事には驚いたが、何故だかすぐに受け入れることができた。それも自分なのだと。

「おはよう」

明弥は教室の端で外を眺めている岩崎に声をかけた。

「ああ……おはよう」

あれから数日、お互いに事情聴取や学校のことなどありちゃんと話をする機会がもてなかった。挨拶程度の言葉は交わしたが、何だか久しぶりに幼なじみに会うような気がして少し気恥ずかしかった。

「大分、疲れただろう。聴取」

「そんなこともないよ、俺結構慣れているから」

「そうだったな」

岩崎は優しい笑みを浮かべた。

あれから彼に睨まれたりしない。こういう彼が本来の彼なのだろう。落ち着いていて優しい。

明弥は岩崎の手に視線を落とす。

「その手大丈夫？」

「ああ、俺はその……治りが早いから」

言った勇気の左手には包帯が巻き付けられている。あの夜、爛れているように見えた彼の手はやっぱり火傷を負っていた。

何をしたのか正直まだよく分かっていないが、明弥を助けるため

に負ったことは分かる。彼はちよつと失敗しただけだから、氣にする必要はないと言ったが、やはり氣にかかる。

「ねえ、それさ……えつと、ふ……巫術？　とか使ったせい？」

人が周りにいないことを確認して小声で聞くと岩崎は驚いた風を見せた。

「藤岡さんつていう刑事さんにも色々聞いて、あれからちよつと調べたんだ。色々ありすぎて全然わからなかったんだけど……岩崎くんつてそう言う人にはない力、持っているんだよね？」

「あ……ああ、まあ」

「凄いなあ、そういうのつてやっぱり修行とかするの？」

岩崎は嫌そうにそつぽを向いた。

「止めてくれ、そう言つの、嫌いなんだ」

「どうして？　格好良いと思うけど」

「……格好悪いだろ。へたをすれば頭がおかしい奴だつて思われる」

「でも、実際に見ればみんな信じるよね？」

彼は複雑そうな笑みを浮かべた。

それより、と彼は話題をすり替えるように言う。

「お前、氣にしていないのか？」

「何を？」

「俺はお前をわざと危険にさらしたんだ。聞いただろ藤岡刑事に」

「ああ、うん」

何故か女言葉を使う刑事に岩崎が取った行動の全てを聞いた。

正直驚いた。

だけど、驚いたのはあの短時間で岩崎がそれだけの事を考えついたと言うことで、怒るようなことではない。確かに明弥は危険にさらされたかもしれないが、結局岩崎に助けられて軽い擦り傷程度の怪我しかしなかった。

「何を氣にするの？」

尋ねると岩崎は瞬いた。

「何を、つてお前……」

何か言いかけた彼は、顔を手で覆いうつむき呆れたように息を吐く。

「お前やっぱり馬鹿だろ」

「また言われた」

明弥は口をへの字に曲げた。

岩崎から見れば確かに自分は馬鹿かもしれないが、それだけ馬鹿馬鹿連呼されるとさすがに複雑な気分になる。最も、彼は馬鹿にするつもりなどないようだったが。

ああ、そうだ、と岩崎が顔を上げる。

「あいつ、退院した」

「太一さんが？ よかった。あ、でも警察とかの方……大丈夫なの？」

彼が人狼と知っているのはごく僅かな人間だが、彼を拘束しようとする話もおかしくない。もう暴走の危険は無いだろうという話だったが、警察がそれで納得するとは思えない。

退院出来たとしても、自由に行動出来ないとすれば可哀想だ。

「一応しばらくは監視が付く。っていつても、付きつきりって訳じゃないが。定期的に彼の診断をすることで納得をした。むしろ、お前だ」

「ん？」

「気が付かなかったか？ 警察がお前の周りをうろついていただろう？」

ほら、と岩崎は窓の外を示す。

校門から少し離れたところに車が止まっている。パトカーではないが、警察関係者なのだろうか。

「護衛みたいなもんだ。南条太一は暴走した時にお前を狙う。それが分かっているからお前の安全を確保するために暫く付くだろうな。気を付けるよ、煙草なんか吸ったらすぐ補導されるからな」

「吸わないよ」

吸ったこともないし、吸いたいとも思わない。

飲酒は……少しだけ興味あるが。

「アキちゃん、来てる？」

明るい声が聞こえて明弥は微笑んだ。

教室の後ろのドアからトモミが顔を覗かせた。

「来てるよ、おはよう」

言つとトモミは教室の中に入ってくる。

「おはよー。ねえ、朝から悪いんだけどさ、英語の辞書ある？」

「ん、あるよ。何、忘れ物？」

「昨日家に持ち帰って置いて来ちゃってさー、一限だからすぐに返すから、お願い、貸してー」

両手をあわせて懇願するトモミに明弥は笑う。

「じゃあ、今度何かおごつてよ？」

「おっけー！ マックで良いよね？ 奮発しちゃうよ、この間千円分の商品券当たったんだー」

相変わらず運が良い。

明弥は辞書を彼女に手渡す。その様子を見ていた岩崎が窓に寄りかかりながら小さく笑う。

「お前ら、本当に仲がいいんだな」

「当然！ つてか、岩くんおはよう」

「ああ、おはよう」

「んー……？ あれ？ 何か二人急に仲良くない？」

辞書を胸に抱いて彼女は交互に二人を見比べる。

明弥は笑む。

「当然だよ。友達だから、ね？」

同意を求めるように岩崎を見上げると、彼は肩を竦めた。

「そう……らしいな」

「らしい、つて」

「そう言う素直に顔かえないところ、岩くんっぽいよね。素直じゃない。ツンデレタラシ」

「何だよそれ」

岩崎がトモミを静かに見下ろした。

「べつつにいー」

トモミは笑いをかみ殺したような表情であさつての方向を向く。
中学でもこんな感じだったのだろうか。

何だか少しうらやましい。

「でも、いいなー、私もこっちのクラスが良かったー」

トモミは訴えるように頬を膨らませる。

「こっちの方が面白そうだし、担任千野先生だし。あーあ、なーんか面白いことでもないかなー」

「トモちゃんの方、穂高先生だっけ？」

「そうそう。私、女の先生と相性悪いからなー……つとと、授業始まるから行くね。じゃ、後で」

辞書ありがとう、と言い残して彼女は廊下へと飛び出す。

時々嵐のようだけど、トモミは底抜けに明るくてこちらにまで元気をくれる。いつも笑っているひまわりのような存在だ。
ずっと変わらずにいてほしいと思うのは傲慢だろうか。

「久住」

「ん？」

「気を付けるよ」

岩崎は顎で廊下をしゃくる。

こちらを睨み付ける安藤の姿が見えた。

ちようど授業開始のチャイムが鳴る。慌てて教室に戻る生徒の波に紛れて、彼の姿はすぐに見えなくなった。

3 嵐の前

「コーヒーのおかわりいかがですか？」

胸に鮫島と書かれた名札を付けた女が控え目な口調で尋ねる。

太一は片手でそれを断った。

「連れが来たら頼むよ」

「かしこまりました」

珈琲屋orange猫は落ち着いた雰囲気のお店だ。

クラブのような派手で騒がしい店も好きだが、実はこういった静かな店の方が好きだ。穏やかで落ち着いた気分になれる。

店内を流れるリムスキーの曲を聴きながら太一は窓の外の通りを眺める。

短期間に色々な事があった。

こういった性格だから自分自身があんな形で暴走したことはあまり気にしてはいないが、鈴華に泣かれた事は正直堪えた。元々自分が泣くと他の人に余計な心配を掛けるからと滅多に泣かない子だ。それが目覚めたばかりの太一を前にして人目も憚らず泣いて怒ったのだからよほど心配をかけたのだろう。

彼女の為なら何だってすると心に誓った自分が彼女を泣かせるとはあまりにも粗末な結果だ。

からん、とドアベルが鳴る。

入り口を見やるとちょうど女が入ってきた所だった。彼女は店員に待ち合わせであることを告げるとすぐに太一の姿を見つけた様子で近付いてくる。

「ごめんなさい、待ちましたか？」

「いや、忙しいのにわざわざ悪かったな」

「いえ、誘って下さってありがとうございます」

そう言って彼女は、木村早希は太一の向かい側に座った。

白衣以外の姿はあまり見たことがない。

薄いピンクのシャツは彼女によく似合う。新鮮な感じがすると同時にどこか気恥ずかしい感じもした。

「体調、もう大丈夫なのか？ 倒れたって聞いたが」

言うと彼女は驚いた様子を見せる。

「良く知っていますね。少し疲れがたまっていたみたいです。おかげで変な夢見ちゃって……」

「変な夢？」

「笑いませんか？」

「場合によるな」

からかうような口調で言っていると彼女は少し躊躇って苦笑した。

「南条さんが赤毛の犬になる夢です」

「……！」

太一は絶句する。

その夢は笑えない。

早希は顔を赤くして息を吐いた。

先に注文をしてきたのだろう。彼女の目の前にコーヒーが運ばれてくる。太一のカップにも三杯目のコーヒーが継ぎ足された。

「……呆れてますね」

「あ、いや……」

「いいんです、自分でも馬鹿げてるって思いますから。それより用って何なんですか？」

早希はコーヒーカップに手をかけて太一の方を見る。

彼はポケットから小さな箱を出して彼女の前に置く。

不思議そうに彼女が見つめた。

「やる。滅茶苦茶遅くなったが、バレンタインの礼。病院で渡すわけにもいけないからな。……実は鈴華に怒られたんだ。お返しくらいちゃんとしろって。俺そう言うところ無頓着だから、その……悪かった」

「そんな、良かったのに」

言いながらも彼女の手は箱に伸びる。

「でも、ありがたく頂きます」

笑んだ彼女を見て太一はほっとする。

本当に今更だから突き返されることも覚悟していたのだ。

「あけても良いですか？」

「気に入るかどうかしらねーぞ」

大丈夫です、と彼女は言って箱を開く。

小箱の中には先日買った花のモチーフのネックレスが入っている。

彼女はそれを取りだして目を瞬かせた。

「……南条さんが選んでくれたんですか？」

「そう言うのは、邪魔にならないって聞いたから。あんたに似合いそうなの買ったんだが……気に入らなかつたら捨てていいからな」

彼女は首を振る。

「いいえ……！ 凄く嬉しい……ありがとうございます」

「なら、良かった」

太一は微笑んだ。

早希は何故だか少し驚いた様子で太一の方を見る。

「……どうした？」

「いえ。少し、雰囲気が変わったって思っ

「そうか？」

太一は顎に手を当てる。

実際少し心当たりがあつた。暴走して、鈴華に泣かれて、斎にも散々嫌味を言われて、ちよつと悩んでいたことをはつきり決めたというせいがあるだろう。

元々悩むより先に行動するような性格だ。

うじうじ悩んでいるのが馬鹿馬鹿しくなったというのが本音だ。

雰囲気が変わって見えるのはそのせいだろう。

早希はにこりと笑う。

「今の方がずっと南条さんらしくていいですよ」

「そうか」

太一はちらりと笑う。

彼女のことは多分嫌いではない。どちらかと言えば好きな方になる。彼女といると暖かい気分になれる。ただ、鈴華が何よりも大切な今は、それ以上のことは考えられなかった。

不意に鼻につく匂いを感じて太一は顔を外に向けた。

人間より敏感な嗅覚が窓越しに微かに焦げるような匂いを感じ取る。

「……どうかしましたか？」

「いや、今……」

言いかけた時、向かい側の建物の三階の窓ガラスが吹き飛び火の手が上がった。

店の中が一時静まりかえり、ざわざわと騒ぎ出す。火の手が上がったビルの店舗からは雪崩れ出るように人々が飛び出してくる。まるで生きているかのような炎が、三階の窓を突き破り赤黒い炎を上げる。

太一は奇妙な気配を感じて視線を人混みの中に移す。野生の勘が、何かを警告するように働いた。

逃げまどう人々に紛れるようにしながらビルから遠ざかっていく影。四十代前後の背の高い男。他の人とは違う不自然に冷静な態度。
(放火か?)

太一は立ち上がった。

早希に何か説明するよりも早くに店を飛び出す。店員の女にぶつかったためにカップが落ちて割れたが気に留めていられなかった。

あの男を捕まえなければ。

火事現場であんな不自然な態度を取るなど、疑って下さいと言っているようなものだ。太一の足ならばあの男を捕まえるのは容易い。店を出ると焼け焦げたような煙の匂いが鼻を刺激する。太一は鼻を押さえながら男の姿を探した。駅方面にゆつくりとだが確実に逃げる素振りの男。微かに煙以外の何かの香りを感じ取る。店の前を

横切り男に向かって走り出した太一の耳が細い鳴き声を聞き取る。

見上げたビルの二階。

取り残された子供。

「……ちっ！」

迷っている場合ではなかった。

太一は既に火の手が回り始めた一階店舗に飛び込む。

店の中はもつと酷い匂いがしている。スプリンクラーが回り始めていたが、既に火の勢いの強い今となつては無意味だった。見回した店内に取り敢えず人の気配がない。太一はそのまま奥の階段の方へ急ぐ。

一階と二階、そして三階まで繋がる階段は既に火に飲まれている。崩れた壁が邪魔をするように階段に覆い被さっていた。

びき、と彼の腕が音を立てた。

腕から指先に向けて筋肉が躍動する。逆立つような赤毛が手を覆った。爪が鋭い刃物のように輝いた。

勢いよく彼は振り下ろす。

ぶん、と鋭い音を立てて崩れた壁が粉碎される。人が通れる程の炎のアーチが作られる。

太一は常人を越えたスピードで二階へと駆け上がる。

窓辺で泣き叫ぶ小さな子供の姿が見えた。

がらがらと再び壁が落ち、退路がふさがれる。

太一は走って子供を後ろから抱き上げた。

一階には幌の様な屋根があつたはずだ。

落ちれば助かる。

万が一にも幌が焼け落ちていても、太一の身体をクッションにすれば子供に衝撃は少ないだろう。万一怪我をしたとしても、ここで焼け死ぬよりはマシなはずだ。自分の身体能力ならば助ける自信はある。それに、人狼の強靱な肉体ならば二回程度の高さから落ちて命を落とすことはない。

迷う所ではなかった。

「歯を食いしばれ」

太一は子供に言い聞かす。

驚いたような大きな瞳が太一を見、そして頷いた。

下を確認することなく彼は子供を抱えて二階から落ちる。

抱きかかえた子供が強ばるのを感じた。

何かが当たる衝撃。

さらに身体が下に沈む。

屋根はまだ焼け落ちていなかった。

幌状の屋根に包み込まれて太一と子供は地面へと落ちる。

周囲が悲鳴の様な声を上げ、そしてざわめいた。

「南条さんっ！」

悲鳴を上げて近寄ってくる早希の姿を複雑な視点から見上げる。

子供は無事だ。

「応急処置を」

「南条さんはっ」

「俺なら大丈夫、子供が先だ」

分かりました、と頷いた彼女に子供を預け、太一は他の大人達に助け起こされるようになりながら身体を起こす。

そこにはもう男の姿はない。

（子供が助かったんだ、贅沢は言えねえな）

太一は僅か自嘲するように口の端を上げた。

4 狂った炎

男は駅の中に入った。

電車に乗るためではない。電車を待つ人に紛れる為だ。

駅の中では例え走っても、立ち止まっても、辺りを見回しても違和感を覚える者はそれほど無い。

駅員以外の顔ぶれはすぐに変わるし、あまり長時間居座ったり不穏な動きをしない限り誰かに顔を覚えられる心配はない。

彼は改札周辺に設置された防犯カメラに注意しながら自動販売機の影で立ち止まった。人か電車を待つふりをして自動販売機に寄りかかった。

「有信」

声を掛けられ男の心臓は強く鳴る。

知った男の顔を見つけて、彼は表情を陰しくさせた。

「タケ」

かつての愛称を呼ぶと男は口の端を上げて笑う。皮肉っぽい笑い方は彼独特のものだった。以前と変わらない癖を懐かしく思うよりも、不自然さに不安な気持ちになった。

彼と最後に会ったのは十年以上前だ。それなのに彼の外見はそれほど変わっていない。無精髭のせいで顔の輪郭が曖昧になってしまっているためだろうか。もう五十近いはずだが、今の自分とそれほど変わらないような年齢に見える。

有信自身が長身のせいもあるが、背の低い彼とは頭一つ分の差が出来る。圧倒出来るほどの差がありながら彼に恐怖心を抱くのは狡猾な性格を知っているからだ。そして頭の回転も速い。正直なところ敵にも味方にもいて欲しくない男だ。

関わりたくはない、と言うように駅の外へ向けて歩き始める。

予測が付いたことだが、タケは有信の後を追いかけるように続く。振り向かずともニヤニヤと笑っている様子が見えるようで酷く嫌な気分になった。

「いつ戻ってきたんだ、アリ？」

「答える必要はないだろう」

「ご挨拶だな。俺はお前の兄のようなものだろう？」

手のひらに爪が食い込む。

挑発に乗ってはいけない。

「兄弟になった覚えはない」

「何だ、自分から行方知れずになった割に探さないでいたことを怒っているのか？ 捜しに来てやっただろう、これだけ火災が頻発してあれば否が応でもお前を疑う。もっとも、お前の生存を信じていたからこそだがな」

くつくつとタケは笑う。

有信は彼を睨んだ。そしてすぐに挑発に乗ってしまったことに気が付き視線を逸らす、それは逆効果だった。

タケはおかしそうに笑ってみせた。

「一連の、お前なんだろう？」

「俺は知らない」

「火災現場の周辺うろつけばお前に会えると思っていたよ。なあ、有信」

タケの目つきが険しくなる。

脅すような低い声で有信の耳元で囁いた。

「……妻を焼き殺した狂炎が。この街に戻って何をするつもりだ？」
有信は目つきが鋭くさせる。その瞳の奥が燃えるような熱を帯びる。

タケは間合いを取るように有信の側から離れた。

駅の中に進む人々は今にもケンカを始めそうな二人の雰囲気に関わる事を嫌って少し間を取って歩いていった。訝しんで立ち止まる者は無かった。

それでも有信は顔を隠すようにして地下道への階段を下る。

なおもタケは執拗に追いかけてくる。

こういう男だ。

おそらく今まで有信が何処にいたのかも見当が付いているのだろう。そしてこの街に戻ってくることも確信していた。だからこそ、火災というキーワードを見つける度に有信の情報を探った。

そしてどこからか手に入れたのだろう。

自分が、この辺りをうろついていると言う情報を。

良く言って根気強い性格のタケは、砂山の中から一粒の砂金を探すのも躊躇わない。そして最終的にはちゃんと見つけてしまうような奴なのだ。

だから厄介なのだ。

「俺には焼き殺される趣味はないな」

「なら、俺とはもう関わるな」

「そう言う訳にもいかねーんだよ。……なあ有信、お前の子供、西ノ宮の制服結構似合っていたぜ？ 親はなくても子は育つんだなあ」

「……っ」

「顔色が変わったな。女房殺して平然としているお前でも、子供は可愛いようだな。まあ、確かに可愛いよ。俺がお前の友達だつて言ったらあっさりと信用してくれたよ。タケおじさんって無邪気に笑ってたな」

「何処まで、お前らはっ……！」

有信はタケの襟首を掴んだ。

有信の右手には古い傷跡があった。手の平と甲、その両面が爛れたように皮膚が引きつっている。十年以上昔の古い火傷の跡だった。皮膚移植でもない限り、元のように直ることも知らない呪詛のよな傷。

タケはそれを見つめ、少し嫌な顔をしながら邪険に払いのけた。

「あれと俺を一緒にするな。言っておくが俺はお前もあいつも嫌いだよ、有信」

「……」

「どちらかと言えばお前の方がマシというだけだ。どうせ手を組むならまだマシな方がいいだろう?」

襟首を直しながら男は言う。

「俺もこの十二年、黙って見ていた訳じゃない。……いいか、直接的に言ってやろう。俺はお前みたいな力はねえ、お前には俺が培ってきた情報網と人脈はねえ」

有信は鼻先で笑う。

「……前の手駒になれ、と?」

「違うな。お前が欲しい情報の代わりに、ちよつと手伝って欲しい事がある。むろん、お前が本気で否というなら強要するつもりはない」

「……」

強要するつもりはないと言ったものの、彼に拒否権など用意されていなかった。

子供のことを口にした以上、タケは人質を取っているようなものだ。おそらくこの男のことだ、自分自身に何かあれば見せしめのうに子供に危害が及ぶように仕組んでいるだろう。

能力を知っている彼が、何の保険も無しに交渉をしにくると思えない。

そして、おそらく有信の考えがそこまで及ぶことを考えている。

やはり敵にも、味方にもいて欲しくない男だ。

本気で仕留める気があるのなら、差し違えるつもりで一撃でいかなければこちらが痛い目を見る。

「……お前、何をするつもりなんだ?」

「過去の亡霊共を片づけて住みやすい環境を作るのさ。あながちお前も無関係とは言えんだろう」

有信は男を睨む。

彼の言う言葉を迂闊に信用は出来ない。だが、こういった言い回しをする以上、有信にとっても全てが不利益に繋がるわけでは無さ

そうだ。

味方にいるうちは手出しをしない。そう言う男だ。もっとも、彼が既に敵ならば話は違うのだが。

「……いい目になったなあ、好きだぜその狂った男の眼。それならあの凶眼にも対抗出来る気がするぜ」

にやりとタケが笑みを浮かべる。

勝利を確信するような自信に満ちた微笑み。

選べない。

選択肢が残されていない。

「答えを聞こうか、久住有信。最上の選択をしるよ？」

5 誰も、悪魔から逃げられない

立ち入り禁止の黄色いテープが張り巡らされたのは、放火の疑いがあるからだけではなかった。五階建てのビルの半分以上を焼き尽くした火事だったが、上二階は空き店舗となっていたために、奇的に死者はなかった。

だが、遺体は発見された。

司法解剖の結果を待たなければならないが、死因はおそらく出血多量。

火元と思われるその遺体には複数の刺し傷があった。

状況から判断すると男はこのビルの一階から三階までのレストランカフェを経営する柴田という男。従業員の話からは責任者でありながらもあまり目立たない印象の男だったと言う。暗く怖い印象を覚えたものさえもいた。三階奥のスタッフルームで商品の発注や売り上げの管理をしているために店の方には滅多に顔を出さず、そのためか良い噂も悪い噂も特に聞かなかった。

「目撃者の証言によると、男は奥から持ち出した灯油を頭からかぶり自らの身体にナイフを突き立てて火を放ったそうです。三階の燃え方が酷いのは灯油がまかれたせいですね」

伊東はしゃがみ込んで現場の様子を見る愛に告げる。

彼の手には手帳が握られている。彼女が現場に到着するまでに聞き込んだことの全てが書かれていた。

ゼロ班は表向きには存在しないことになっているために、彼らは強行犯係に所属している事になっている。超常現象が関わる事件を扱うのだ。まさか警察が超常現象を信じていると発表するわけにも行かず隠されている。

本来ならば殺人が疑われる時以外では強行犯係が火災犯を追うこ

とは少ない。だが、一連の放火事件から無理に関係があるとねじ込みゼ口班はこの火事に介入した。南条太一が関わったと聞いて見過ごせなかったのだ。

ゼ口班は少し特殊な権限を持っている。それでもこの特殊捜査班の介入を良く思わない者も多い。愛が本来ならば課長となってもおかしくない「警部」の肩書きを持っているのも、他の事件に介入する際に余計な争いを少なくするためだ。

「それは自殺ということ？」

愛は少し考えながら問う。

この件は今までの火災とは無関係だろうか。

「それが少し妙なんですよ。軽く調べただけなんですが、特出した自殺の原因と思えるものがありませんでした」

「突然死にたくなる症候群？」

「何ですか、それは」

「若い子と、中高年くらいに多い病気。何か突然訳もなく死にたくなるらしいわ」

「そのまんまですね。その辺の事情は当人しか分からないのでしょうが、柴田は自殺する直前まで誰かと会っていたそうです。ちょうど、この辺です」

伊東は焼け焦げたテーブルの辺りをしめした。

原型は止めていないものの、配置からそこに四人がけのテーブルとソファがあつたことが推測出来た。

「この辺で誰かと話をしていたそうです。観葉植物の影になって顔は見えなかったそうなんですが、向こう側に座っていた主婦達が長身の男だったと証言しています」

「防犯カメラは？」

「これも妙です。火災発生の一時間ほど前に、店舗にある全てのカメラの線が漏電したかのように焼き切れたそうです」

愛は顔を上げる。

「……全て？」

「はい全てです。店員がメーカーに問い合わせた所、古いものなので不具合は生じやすくなっているそうなんです、それにしても全て焼き切れるのは作家的なものを感じますね」

伊東の言葉に愛は考え込むように口元に手を当てた。

彼はまだ重要なことはあるのだと言うように続けた。

「その、柴田なんです、男と話をしている途中で突然奥の部屋に入ったと思うとすぐに出てきて灯油をまいたそうです。異変を感じてすぐに逃げ出したのが良かったのでしょうか、三階にいた主婦達は無事でした。逃げる際に彼女たちはこんな言葉を耳にしています」

伊東はそこで言葉を切った。

愛が興味を抱いたと言う風に視線を向ける。

その視線に頷き伊東は手帳に書かれた言葉を読み上げた。

「誰も、悪魔から逃げられない」

「悪魔？」

呟くと何かぞつとするものが背筋を這った。

まるで映画かドラマのような台詞だ。これから死のうとしている人間が口にするような言葉には到底思えない。しかも男は笑いながらそう言ったのだという。完全に狂っている。「薬物は」

「調べています。それより南条太一の方はどうでしたか？」

はずれ、と愛は両手をあげて見せた。

「今回に限っては偶然居合わせただけのようなね。同行していた看護士の女性も、orange猫の店員も怪しい行動は見なかったですよ」

「そうですか」

伊東は頷く。

子供を助けた勇敢な男が南条太一であったと聞いて、一度は関連の事件であると疑った。しかし、よくよく考えてみれば、今の状況で南条斎が太一の勝手な行動を許す訳がない。もしもこの事件に関わっていたとしても、経済力のある南条家だ、事件を監視するにしても太一ではなく金で雇った者を使うだろう。

裏を読めばわざと太一に目立つ行動を取らせ、疑いを逸らそうと
している可能性もあったが、南条斎に限ってはそんな浅はかな行動
を取るとは思えなかった。

彼ならばもつと上手くやる。

だからあの規模で超常現象の研究をしながら、これまでゼロ班が
介入することがなかったのだ。警察庁の超常現象捜査班では彼らの
動向を窺うことはあったが、注意を促す声は聞こえなかったし、あ
ったとしても強制捜査のできるような事柄は無かったのだ。

南条斎は研究者としても、責任者としても上手くやっている。

だから余計に南条太一の件だけが引つかかる。

「伊東くん」

「はい」

「この火事は、連続放火事件とは無関係よね？」

伊東は少し考えてから頷く。

今までの放火事件は火元が曖昧ではつきりしないのだ。だが、今
回は男が灯油をまき、火を付けたという証言もとれている。
だとすれば、無関係と考える方が正しい。

「はい、理論上は」

「理論上？」

「ああ、すみません。そう考えるのが妥当です」

言ってから伊東は同じ事を言いましたね、と首を傾げる。

愛はちらりと笑う。

現場でこんな風に表情を緩めるのは珍しい。

伊東はきょとした表情で彼女を見つめた。

「どうかしましたか？」

「この火災、貴方が可能性あると思うのなら、ゼロ班でも調べまし
よう」

「俺の勘で動いて良いんですか？」

「貴方の勘が鋭いこと自覚なさい。その方がずっと効率が良いわ」
「過信はしたくないんです」

「過信かどうか、私が判断するわ」

愛はきっぱりと言う。この自信がどこからくるのか伊東は知らない。伊東を生活環境課から引き抜いた時もこの調子だったのだろう。「眞由美を連れ戻してこの火災を調べるわ。あなたは柴田と南条斎の接点を調べて頂戴」

手帳を閉じて伊東は頷く。

「了解しました」

「……それと」

「はい？」

「今日も戻れないって、勇気に伝えてくれる？」

これは部下の伊東刑事ではなく、伊東猛に言っているお願い事だ。最初はそのくらいは自分でやれ、といちいち腹を立てていたが彼女の性格に慣れるのと同じでもう随分と慣れた。

「はい、確かに伝えておきます」

伊東は頷いて緊急で設置されたはしごを下りる。

彼女の息子も同じだが、仕事面では器用なのにこう言うところに不器用なのだ。誰かがフォローしなければとづくに破綻してしまっている親子だろう。

二人のちょっとしたずれを直すのは別に苦痛ではなかった。

伊東ははしごを下りながら小さく笑みを漏らした。

6 感傷

穏やかに眠る彼女を見ると時々不安になる。

息をしているか、心臓は動いているかと。身体が弱いとはいえそんなに心配することもないだろうと、自分でも可笑しくなるがそれでも不安なことには変わらない。

鈴華を失えば生きる意味を見失う。

南条の家の中で心を許せるのは太一と鈴華だけだ。父親も、顔もろくに覚えていない母親も、斎の中では両親という認識だけでしかない。親戚や従兄弟達と談笑したり、時に些細な喧嘩をすることはあってもそれだけなのだ。

本当に大切に想っているのは弟妹の二人だけ。

斎はベッド脇に座り、鈴華の髪をそつと撫でた。

「イツキ、帰ったのか？」

斎は顔をあげ指を口元に当てた。

太一は軽く頷いて声を潜める。

「11時までお前の帰り待っていたんだけどな、明日にしろって寝かしつけた」

「何かあつたんですか？」

それ、と太一は鈴華の机を示す。

机の上には学校で配られたらしい藁半紙に印刷されたプリントが乗っている。授業参観と家庭訪問のお知らせの紙だった。

なるほど、と斎は溜息をついた。

兄妹の父親は今寝たきりの状態だ。時々調子の良い時はコミュニケーションがとれるほどに喋るけれど、そうでなければ殆ど口も聞かないし、意味不明な言葉を口にすることが多い。母親はいない。

両親に代わってこの家のことは長兄である斎が決めている。知らせ貰い、困って斎に相談しようと思ったのだろう。今までにも何度かあったことだが、授業参観はともかく家庭訪問に関しては気が重くなる。

南条家の家庭環境は複雑すぎるのだ。それを全て説明する必要はないが、担任と言うだけで土足で上がられるのはやはりいい気がしないのだ。忙しいことを理由に断れないこともないだろうが、やはりそれでも色々問題は出てくるし、鈴華にあまり寂しい思いはさせたくはなかった。

「このところ、なかなか話せる機会もありませんでしたからね、授業参観くらいは顔を出したいんですが」

「どうせまた忙しいんだろう？ 忙しいのは今更はじまったことじやねーし、参観に出るより一時間でも時間作ってやれよ」

「そうですね。ああ、言われると少し耳が痛い」

斎は複雑な気持ちで笑った。

授業参観は出られないだろう。出るとすれば幼い頃の斎がそうだったように、代理で坂上か太一が出ることになる。父親代わりでもあるはずの斎は、彼女に何もしてあげられない。

側に太一がいることと、不自由な生活をさせていないことだけが救いだ。もっとも、彼女の生活の三分の一は病院での生活になってしまっているが。

「色々悪かったな」

不意に太一が言う。先日のことを言っているのだろう。

斎は首を振る。

「いいえ、私は何も出来ませんでしたよ。むしろ久住君と岩崎君にお礼を言うべきでしょう。会ってきましたか？」

「いや、今日はごたごたしてそれほどじゃなかった」

「ごたごた？」

問うと彼はちよつとな、と誤魔化すように笑う。

こつという表情の時は話したくないと言うよりは、話しても仕方が

ないと言った意味合いが強い。聞けば答えるだろうが斎はそれ以上は問わなかった。

「明日、会ってくるよ」

「そうですか。私もいつかちゃんとお話したいですね」

「当面は自粛しているよ。そうでなくてもお前は警察に目を付けられている。久住明弥はともかくあつちの少年の母親は刑事だ。全部筒抜けのからな」

「肝に銘じます。もっとも目を付けられているのは貴方も同じですけどね？」

彼はちよつと顔をしかめる。

「俺は良いんだよ。どっちにしたって連中がその気になれば俺はすぐ‘捕獲’されるんだ。泳げるうちに泳いでおくつもりだ」

警察の中では当然太一をそのまま禁固にするという意見もあっただろう。人狼という事は極一部の刑事しか知らないという事だったが、それにしただけでそのまま放っておくとは思えなかった。

おそらく、あの女刑事の考えだろう。太一を野放しにすることで斎と接点を持つておきたいとでも考えた。太一もそれを把握している。彼女は、直接的には言わなかったが斎が何か企んでいるのではないかと疑っていることを隠そうとしなかった。それは自信が、それとも作戦か。

どちらにしたって厄介な相手に目を付けられたものだ。

「ただ」

「ただ？」

「久住明弥と直接話出来るの、最後かも知れないな」

それは確かにそうかもしれない。

あれだけ危険な目にあつたのだ。いくら彼が優しい性格でも、太一との接触は避けたいと思うかもしれない。

そうなってしまうば太一は彼と積極的に関わらなくなるだろう。

太一は身長だけでなく体格が良かったために巨漢という印象を受ける。発達した筋肉や、地毛である赤毛も要因だろうが、彼を見た殆どの

人間は怖いという第一印象を抱く。そのため勘違いもされやすいが、彼は人から「嫌われる」と言うことを敏感に感じ取る。

そういう性癖があるならともかくとして、嫌われていると分かっている人間に近付きたがる人はそういない。まして繊細な彼が傷つかないはずがないのだ。

この件では久住明弥も、太一も責められない。

「太一、ちよつとこつちに來てくれませんか？」

「ん？ 何だ？」

「ここに屈んで下さい」

「？」

太一は不審そうにしながらも言われたように齋の前にしゃがむ。

齋は太一の頭をくしゃくしゃにかき混ぜた。

「イツキっ！？ 何を……！」

「貴方はよく頑張りました、太一」

「……」

「子供の頃、私が落ち込むとあなたはこうしてくれましたね。今も貴方だけは私のことを叱ってくれる。それが、どれだけの支えになっているか、貴方は知っていますか？」

太一は苦笑をする。

泣きそうになったのを隠すのを失敗したような苦笑だった。

「何だかお前に言われると気持ちが悪いな」

「夜は感傷的になるものなんですよ」

「……じゃあ、感傷ついでに言うけど」

「はい？」

「鈴華は、大丈夫だよな？」

すぐに答えられなかった。

もちろん、と言いたい反面、齋自身も彼女のことには不安がある。

絞り出すように彼は言う。

「……そのために、私は今もなお研究を続けているんです」

あの刑事が「禁忌」と呼んだ力の研究を。

「私に出来るのは、それに近づく事だけなんです」

「お前、医師免許もっているだろう？」

意図が読めて斎は首を振った。

「発達した医学は、彼女を見捨てる結論を出しますよ」

「……」

「私は、諦めたくないんです」

彼女のことを。

いや、認めたくなかったのだろう。

だからまだこだわっているのだ。

彼女のことに。

太一は立ち上がりうつむいた。くしゃくしゃにして下ろされた前髪が彼の表情を隠した。長い付き合いだからどんな表情をしているか分かる。

そして、次に来る言葉も。

「……俺、寝るよ」

「はい、お休みなさい」

「イツキも早く寝ろよ」

「はい、そうします」

斎は彼の背中に微笑んで見せた。

終電を過ぎ行き交う電車もなくなった線路の下を走る通路。

暗がりから人の呻き声が響く。

「何だ、もう終わり？」

少年はどこか愉しそうに言った。

西ノ宮高校の制服を来ている少年は自分の足下に転がっている、同じ高校の制服を来た少年をつま先で蹴飛ばした。

「強がっている割に、意外とあっけないんだね、安藤くん」

「ごほ、と安藤が血を吐き出した。

彼のすぐ側には、何人もの少年達が道路に伏している。荒っぽい息をしているものや、腕や脇腹を痛そうに押さえている者もいる。その中からコンクリートの壁に寄りかかっていた馬場が相手を憎んだかのような声で唸った。

「……井辻いつ」

よせ、と安藤が止めるが、その声は言葉にならずひゅうと風を切る音しか出なかった。

馬場は片腕を押さえながら井辻を押さえ込もうと飛びかかった。

体格はそれほど変わらない二人だったが、井辻よりも馬場の方が体力も腕力もある。普段ならば井辻が押さえ込まれて終わりだ。

しかし、井辻は余裕があるという風に微笑んだ。

「馬場の‘バ’は馬鹿のバだよね？」

見下したように彼は言った。

刹那、飛びかかってきた馬場の身体が見えない力によって後方に飛ばされる。壁に叩き付けられた彼の身体はまるで固定されたように宙で停止した。

「うあつ……あ？」

馬場は苦しそうに喉元を押さえた。

止めるんだ、と安藤が吐き出す。

それを冷たい目で睨んだ井辻は、すぐさま馬場に視線を戻す。

「俺は優しいから」

彼は無邪気に笑う。

「殺したりしないよ。だけど、分かっているよね？」

愉しそうな声に、脅すような声音が混じる。

「……誰にも言うなよ、二度と俺に逆らうな」

「う……あ……？」

ばき、と何かが折れる音が聞こえた。

「っ……！」

ぼとり、と馬場の身体が地面に落ちる。

一拍置いて、断末魔のような悲鳴が響く。

その様子を見て、井辻が高く笑う。

「あはははは、ざまあみろ！」

その声は狂ったように夜の闇の中で響き渡っていた。

深い、夜の闇の中に。

1 親と子

岩崎親子のアパートは入り組んだ住宅街にある。周辺道路は車通りが少ないが、路地から一步外に出れば国道が走っているために人通りも車も多くなる。

近くにあるパーキングに車を止めると、伊東はクリーニングの袋を下げてアパートへと走る。部屋の前まで行くとチャイムを鳴らす前にドアが開いた。

「おはようございます」

先に声をかけると、制服のネクタイを締めながら勇気が挨拶を返した。

「おはよう、伊東さん。お疲れ様です」

狭いアパートのために、物が溢れ乱雑に入り乱れている様子はあったが、母と高校生の息子の二人暮らしの割に、部屋の中は整頓されている方だろう。あの大雑把な愛がこんな風に整頓をするはずもなく、勇気がマメに掃除をしていることを伊東は知っていた。ここ数年は伊東も時々掃除を手伝うことがある。

そうでもしなければこの家は愛によってすぐに無法地帯になってしまうのだ。

「クリーニング、仕上がっていたから取ってきました。俺のも入っています」

「置いていって良いよ、どうせ暫くマンションの方戻れないんだろ？」

「あはは、お見通しですか」

伊東は苦笑う。

仕事が増しくなるとマンションに戻るよりもここを拠点にした方が早い。愛の着替えを取りに来るのを口実に、勇気の様子を見るのも伊東の仕事の一環なのだ。あの敏腕刑事が安心して仕事をするた

めにはそのくらの努力は厭わないし、忙しい最中でも彼に会うと少し癒されるのだ。

綺麗な顔立ちをしているとはいえ、目つきの悪い男子校生を相手にそんなことを言えば気味悪がられるだろうが、本当に不思議な雰囲気のある人なのだ。彼の父親は幼い彼を見て「神に愛された子」と言ったそうだ。それが頷けるほど、彼の周りの空気はいつも優しい。

勇気は伊東がここに来た時に使うカップを少し上げてみせる。

「コーヒーは？」

「はい、お願いします。……愛さんも当分こちらへは戻れないと思いますよ」

「例の火災の件、進展があつたんだから仕方ないと思うけどね」

勇気は眉根を寄せながら笑った。

「それ誰から聞いたんですか？」

「真由美さん。ついさつき来て、愚痴こぼしてまた飛び出していった。ストレスたまっているみたいだな」

その光景がありありと浮かんできて伊東は溜息をつく。

どうしてゼ口班の人間は彼に迷惑ばかりかけられるのだろうか。伊東自身も身に覚えがあるだけに、藤岡に注意出来ないのが悲しい。

「そつちに母さんの荷物まとめといたから、渡しておいて下さい。それと、弁当。伊東さんの分もあるから」

勇気はコーヒーマーカーからコーヒーをカップに注ぎながら言う。包みの大きさからおにぎりだろうと推測出来る。愛の分はサンドイッチだろう。さすがに何年も付き合つとそれぞれの好みを知っているのだ。忙しい時になると食べる暇も惜しんで仕事をするから、片手で食べれるものもいいことも。

「俺の分までありがとうございます」

「いいよ、どうせついだから。……それより伊東さん、寝に戻るだけだったらマンション引き払ったら？」

伊東は椅子に座りながら苦笑する。

「……それ、去年藤岡さんにも言われましたよ」

本来独身寮を使うはずの伊東は今マンションを借りて住んでいる。しかし住んでいるとは名ばかりで殆ど寝るために戻る程度で、どちらかというと岩崎家に戻ることの方が多い。最近はここか仮眠室で寝ることも多くなったから、周囲から無駄だと散々言われている。

まさか勇氣にまで言われると思わなかった伊東はただ笑うしかなかった。

目の前に出されたコーヒーに砂糖を入れる。疲れている時はどうしても糖分が欲しくなるのだ。

それで、と勇氣は向かい合う席に座る。

「母さんとはどうなの？」

「う……っ！」

コーヒーを噴き出しかけて伊東は口元を押さえる。

誤って熱いまま飲み込みそうになるが、幸い大事には至らない。

「な、な、何を突然……！」

「……って、眞由美さんに聞かれた」

勇氣は何故かニヤニヤしながらコーヒーに口を付ける。慌てふためく伊東とは対照的に楽しそうな笑み。

完全に翻弄されている。

伊東は頬が紅潮していくのを感じる。

咳払いをして居住まいを正した。

「どう、と問われても質問の意味が分かりかねます」

「説得力ないけどね」

コーヒーカップを置いた彼の顔は少し揶揄するように微笑まれている。

あんな風に慌ててしまえば、意識したことがないという誤魔化しは通用しなくなる。相手が藤岡なら、こういう質問を投げかけてくることを覚悟しているから対処のしようがあったが、勇氣から来るとさすがに動揺した。

どうせ藤岡が要らぬ入れ知恵をしたのだろう。でなければ彼がこ

んな質問を投げかけてくるはずがない。

普段にないことを言われた時点で気付くべきだった。

「俺としては、今と生活あんま変わらないから別にいいよ。伊東さんが、お父さん' になったって」

「愛さんとは別にそんな間柄じゃありませんよ」

「二人とも独身なんだから、俺に気兼ねする必要な無いって言うてるんだよ。伊東さん、母さんに上司以上の感情もってるんだろ？」

「そ、そんなことより……ええっと、そう、隠しておいても耳に入る事だから、一応伝えようと思ったことがあつたんですよ」

「……はぐらかしたな」

うるさい、と悪態を付いて伊東は勇気の前にメモ用紙を差し出す。瞬間的に勇気の顔色が変わったのが分かった。

「伊東さん、これ」

「今朝末明のことです。ただのケンカともとれるんですが、どうしても引かかる点が多くて」

渡したメモ用紙には昨晩から今朝末明にかけておこった高校生の暴行事件のあらましが書かれていた。

今朝末明、夜勤明けで戻るタクシー運転手が七人の高校生が倒れているのを発見し警察に通報。一人は意識不明の重体、他の六人も骨を折るなどの重傷。元々、それほど素行のいい生徒達ではないからケンカか暴走族関連のリンチなどを疑っていたが、不可解な点が多かった。

病院に運ばれた高校生達は一人の人間に一方的にやられたと言い、その犯人に言及すると怯えた様子を見せ話することが困難になる。結局犯人が誰であるかは分からなかった。

本当ならば警察の家族だろうと捜査状況を漏らすわけにはいかないのだが、事情が事情だ。起きた事件の被害者に、入試の時に久住弥弥に絡んだ二人の名前があがればどうしても関連を疑う。久住明弥自身がどうというわけではない。これも、彼の周りで起きている事件の一つではないかと疑ったのだ。

「安藤に、馬場か。……井辻は？」

「先程連絡を取っていましたが、無事のようです。念のために母親に確認しましたが、彼は昨晚一步も外に出ていないようです。セキユリテイのしつかりした家ですから、夜間に玄関が開閉すればアラームが鳴るはずです。電源が落とされた形跡もないようです」

さすが、と勇気は笑う。

「調べるのが早い。井辻が無事なのはカモフラージュか、それとも無関係か。学校に來ているようなら少し探ってみる。警察も聞き込みに行くんだろう？」

「はい。このケースの場合、まだ担当は生活課の方だから俺等は介入しませんが、情報だけは仕入れておきます。何か分かってても分かんなくても連絡は入れますから……くれぐれも無茶はしないように」最後の下りは強めて言う。

放っておくと彼はいつも危険な場所まで関わってしまう。いくら協力者だからといって危険な目に遭わせて言い理由にならないし、純粹に彼のことが心配だった。

「無茶はしないよ」

そう言っても無茶をする性質なのは知っているが、言われれば信じるしかない。

若干の不安は残るものの、それ以上は何も言わなかった。

2 戸惑い

学校に出る準備をしてリビングに降りるといつもとは少し違う空気が流れていた。

「おはよう、どうかしたの？」

明弥は制服のネクタイを直しながら外を見ている姉と母に問いかける。何だか不審なものを見るように外を見ている二人は明弥に一瞥しただけで何も答えない。

代わりに一人食事をしている政志が答える。

「表に人がいるらしいんだ。男の人」

「父さんは？」

「早朝会議」

なるほど、と明弥は頷いた。

普段なら何かあれば父政信がすぐに出て行く。会議で早く出たせいで対処出来ずに困っているのだ。

おそらく明弥を監視している警官だろう。明弥はまだ焼けていないパンを押し込んで牛乳で流し込んだ。

「俺が先に出て様子見てくるから、奈津姉はその間に出ればいいよ」

「あ、俺も行く」

「マサはゆっくりおいで、大丈夫、だから」

暗に来るなと言うと、政志はちらりと母親を見る。母親も行くなとでも言うような厳しい顔をしていた。仕方なく彼は少し不服そうに頷いた。

政志はまだ小学生だ。危険な目に遭わせる訳にはいかないし、そうでなくてもこの間怖い思いをさせてしまった。それに、いくら警察でも一緒にいるところを家族に見られたくなかった。

行ってきます、と明弥は玄関を出た。

すぐに男と視線がかち合う。

正直、驚いた。

「……太一さん」

彼は少しばつが悪そうな表情で片手を上げた。

「よお、おはようさん」

自分に話があつてきたのだらう。

明弥はちらりと家の窓を見る。

「すみません、歩きながらでもいいですか？」

太一は明弥の視線を追つて家を見る。

小さく悪い、と呟いた。

こんな言い方ではきつと誤解をしただらう。けれど、誤解を解くよりもまずは家から離れるのが先だった。

相手が太一であれば余計に家族には見られたくない。政志ならともかく、奈津や母親には見られたくなかった。

「心配かけるのは嫌か？」

「そついうんじゃないんです、本当に。……退院出来て良かったですね、もう身体の方は大丈夫なんですか？」

嫌味に聞こえないだらうか。

太一は複雑そうに笑った。

「おかげさんでな。迷惑かけたな。お前には特に」

「別に気にしていませんよ。色んな人に助けられて、特別怪我とかしなかったから」

せいぜいかすり傷程度のものだった。

狼に襲われてその程度だったのは運が良い。太一もわざと襲ってきた訳ではないのだから初めから責める気なんか無い。怖くない、というのは嘘だが、だからといって彼のことが嫌いというわけではないのだ。

気を遣つてそう言ったと思われたのだらう。太一は少し微笑んでいたものの、その表情は晴れない。

こつ言う時、どう言った言葉をかければ上手く伝わるだらうか。

明弥は目を閉じて呼吸を整える。

「太一さんは、いい人ですよ」

「……ん？」

「俺たちが襲われた時、助けようとしてくれたし、狼の間も必死に助けようとしてくれた」

太一が本気で明弥を狩ろうとしたならば、明弥は初めてあったあの日に殺されてしまっただろう。けれど、二度も襲われたのに明弥は無事だった。それは太一が必至で理性を保とうとしてくれたからだ。

「ああなってしまった原因は俺の‘インパクト’にあるんでしょう？　だったら、責める理由ないし、謝る必要なんかないですよ。むしろ俺は太一さんこそ俺を責める権利があるって思う」
「だが……」

どうして上手く気持ちを伝えられないのだろう。どうして太一は初めから明弥が怒って決めつけているのだろう。

謝るだけ謝ってもうこれっきり関わらないつもりなのだろう。はじめから諦めている様子が明弥を苛立たせた。

せつかく知り合った人達なのに。

「俺は、まだ鈴華ちゃんとも、斎さんとも、太一さんともちゃんと話をしていません。俺といて、狂うのが怖いっていうなら仕方ないけど、そうじゃなくてだったら、俺本気で怒りますから」

まくし立てるように言うと、さすがに太一は驚いたように目を見開いた。

二メートル近い長身に、赤い髪。鋭い眼光。明弥如きに睨まれたとしても、びくともしなさそうな男が、虚を突かれたような表情をしている。

何だか奇妙な感じもしたが、それは次の瞬間消え去った。

突然、彼が腹を抱えて笑い出したのだ。

朝のゴミ出しに出た主婦が不審そうに二人を眺め、そそくさと家に戻っていく。

明弥は顔を赤くする。

「なっ……な、わ、笑うところですか!？」

抗議する明弥に、彼は謝るように片手を上げる。

笑いすぎて苦しそうだ。

「すまんっ……お前、ホント、変な奴」

「変な奴って」

「褒めてるんだよ。……あーあ、お前じゃなきゃホント迷わなかったのに」

「？」

「俺、やっぱりお前みたいな奴、好きだよ。凄く気に入っている。だから、やっぱり関わらねえとは言えねえよ」

その表情は鈴華に見せた顔のように優しい。

やっぱり本来の彼は優しい人なんだ、と明弥は嬉しくなった。

「太一さん」

「太一でいい。それと敬語もいらねえ」

「えっと、じゃあ、俺も‘明弥’で」

「ほんと、つくづく変な奴」

太一は破顔する。

褒めてる、とは言われたが、とても褒められているようには聞こえない。

明弥は唇をへの字に曲げた。

「だが明弥、許すのと、詫びさせないのじゃ全然違うからな」

「え？」

「つーわけで、詫びの代わりにこれやる」

手を出せ、と言われて明弥は慌てて両手を差し出した。

ゴツゴツとした大きい手の平から携帯電話が落とされた。メタルブルーの携帯電話だった。

「使い方は分かるよな」

「え？ う、うん」

「俺の番号だけ入れてある。何かトラブルに巻き込まれたらすぐに

俺を呼べ。足には自信があるからすぐに駆けつけてやる」

「えっと……」

明弥は受け取って良いのか迷う。

普通のものだったらすぐにでも受け取ったが、携帯電話は使用料金がかかる。それをすんなりと受け取っていいものだろうか。

「遠慮はするな。どっちにしたってお前に渡すつもりで契約してきたんだから。月にン万とか使わなきゃ適当に使え。必要なものは後で届ける。岩崎にも俺の番号とお前の番号教えておけよ」

な、と念押しされて、明弥は頷くしか出来なかった。

3 友達

「で、断り切れずに貰ってきたのか」

岩崎は呆れたのか、それとも純粹に可笑しかったのか携帯を手に取り眺めながら少し口の端を上げて笑う。

「うん、どうしよう」

「くれるっていうなら貰っておけよ。お前、他に携帯持ってないんだろう？」

「ないけど」

岩崎は自分の携帯電話と明弥の携帯を交互に操作しながら言う。

「南条太一にしてみれば、お前と連絡付かないのは不便なんだろう。俺だってお前と簡単に連絡付いた方がありがたい。……携帯持つのが嫌だとか言う訳じゃないんだろう？」

「うーん、でも」

「気になるなら、新しい携帯持つか、名義変更してもらえ
そうしたいのは山々だ。」

だが、母親に言い出しにくかった。経済的に不安のある家ではないが、やはりお金のかかることは言い出しにくかった。進学する時も私立の南陽高校でなく公立の西ノ宮高校を選んだのも、その理由があつたからだ。

岩崎は暫く携帯をいじった後、明弥の手元に携帯電話を返す。

「ああ、やっぱり親に言いにくいのか」

「え？ 何で……ああ、そうか」

一瞬彼がどうしてそんなことを知っているのかと問いかけそうになるが、彼の親は岩崎刑事だ。明弥の事情を知っていてもおかしくない。

別に隠すつもりもないから、別に嫌な気分にもならなかった。

「じゃあ、あれだな。月々の使用分渡せばいい。受け取ってもらえるかは微妙だが」

「携帯って……月額、いくらくらいなの？」

「聞くと勇気はそういうことか、と頷く。」

「珈琲屋でバイト募集してる。あそこは慢性的に人手不足だから」

「お見通しなんだ」

「久住と事情は違うけど、俺も似た経験あるから。母子家庭だし」

「あ……ごめん、そうなんだ」

確かに事情は違うけれど、そう言うことはありそうだった。母親を気遣ってお金のかかることは言い出しにくい。まして岩崎の母親は刑事だ。忙しく飛び回っている母親を煩わせたくない気持ちもあったのかもしれない。

お互いに家庭の事情は複雑だ。

岩崎は少し首を傾げた。

「川上に聞かなかったのか？」

「トモちゃんはその言うこと、あんまり言わないから。俺も本人のいないところでそう言うところまで詮索するの嫌だし」

「なるほどな」

トモミに聞けばきつと本人に聞け、と怒られるだろう。

彼女に聞かなかったかと尋ねると言うことは、中学時代、そういう話をしていたと言うことだろうか。

じつ、と彼を見つめると、彼は半ば吹き出すように言う。

「お前、思っていること全部顔に出てる」

「え、嘘」

「お前等、仲良いのはいいいけど、あんまりくつつきすぎると誤解されるぞ」

「うーん、俺としてはそれでも構わないんだけど」

明弥は苦笑する。

岩崎は複雑そうに笑う。

「お前のそう言うところ、呆れる通り越して感心するよ」

言った彼の視線が不意に泳いだ。

何かを追った。

そう言う目線。

無意識に明弥も振り向いた。

彼の視線の先には井辻の姿があった。入学式からずっと休んでいたようだが、ようやく出てきたようだ。入試の時に見た彼と少し印象が違う。

何かを吹っ切ったような晴れ晴れとした表情。そして口元は微笑むように緩んでいると言うのに、どこことなく周囲を見下したような目つき。

何だか、凄く嫌な気配がした。

「……井辻君、やっと出てきたんだ」

「お前、安藤と馬場が入院したの知っているか？」

問われて明弥は目を見開く。

「どうやらケンカらしい」

一瞬、頭の中で嫌な連想をする。

井辻が二人を殴り飛ばすシーンだ。

今までリーダー格だった安藤を倒して、今度は井辻がリーダーになった。そんな嫌な連想をしてしまった。そんな連想をしたのは彼があんな表情を浮かべているからだろう。

安藤だって根は悪い人じゃ無さそうだった。だから、一緒にいる彼らだってそうだろう。なのに、勝手に井辻を悪役にしてしまった自分の思考がたまらなく嫌だ。証拠もないのに人を疑うというのは人を傷つけた時と同じように嫌な気分になる。

不意に軽く腕を叩かれた。

明弥は我に返った。

「あ、また顔に出てた？」

「分かりやすいな、お前は」

揶揄するように笑ってから、彼は表情を引き締める。

「そう考えるのは多分自然なことだ。あいつにはアリバイはあるが、

あの様子だと十中八九関わりがあるだろう。最初はお前関連も疑ったんだが」

「俺関連って？」

岩崎は椅子に寄りかかって息を吐く。

また意味の分からない事を言われるかと思ったが、彼は順を追うように説明した。

「報復だよ。入試の日、入学式の日、色々とおっただろう？ お前のインパクトが周りの何に対してどんな影響をおよぼすか、まだわかっていないから」

「でも、俺別にもう何にも思っていないし」

「無意識にも憎んでいないって言えるか？」

「……」

今考えても、トモミの作ってくれたお守りを便器の中に入れようとした安藤の行為は許せない。だからといって安藤が怪我をすればいいとか、そんな風には思っていない。むしろ友達になってあの時のわだかまりをなくしたいと思っている程だ。

彼らがそんなに悪人とも思えないし、思いたくもなかった。

でも、無意識にも憎んでいないかと問われれば答えられなかった。あの時水道管が破裂してうやむやになったが、一瞬今までにないくらい相手を憎んだ可能性まで否定出来なかった。

それに、と岩崎は付け加える。

「お前自身が、とも限らないからな」

「どういうこと？」

「第三者が、お前がそんな目に遭ったのを怒って報復したという可能性も考えられる。入学式の日、井辻以外がお前に絡んだのを知っているのは十や二十の単位じゃないだろう？」

確かに安藤と馬場が絡んだ時、沢山の生徒がその場に居合わせた。だけど明弥の為に誰かがそんなことをするだろうか。仮にそんな奇妙な誰かがいたとして、どうやって安藤と馬場を入院させたのだろう。

明弥の為に怒るという点ではトモミが一番可能性が高いが、彼女がそんなことをするわけがないし、彼女の腕力で安藤をどう出来るとは考えられなかった。

もつとも、と岩崎が言う。

「井辻があんな風に平然と歩いている所を見ると、純粹に彼が関わったと考える方が自然だな」

「でも、アリバイとかあるんでしょう？」

「ああ。だが、直接手を下さなかっただけかもしれない。それに……」

言いかけて、彼は言葉を切る。

「それに？」

促すように問いかけるが、彼は何でもないと言う風に頭を振った。岩崎とは友達だ。

彼の周りにいる他の人に比べ、明弥はうち解けている方だと思う。トモミに指摘されるほど、周囲には二人の仲は良く映っているだろう。だが、まだ彼は時折何かを隠す素振りを見せる。信頼されていないのか、それとも明弥を巻き込むことを心配して口に出さないのか。

どっちにしても何でも話せる「親友」になるには少し時間が必要そうだ。

お互いに。

4 圧倒的な存在

C組の教室を覗き込むとトモミの姿はすぐに見つかった。

クラスメートの女子と何やら話している彼女は、他の子に指摘されてようやく明弥の存在に気付いた。彼がこのクラスに用事があるとすれば彼女だけだ。一緒にいるところを何度も見られているから、他の子達も二人の仲の良さは分かっているのだろう。

トモミはすぐに明弥の方に駆け寄ってきた。

「どうしたの、何か忘れ物でもした？」

明弥は首を振った。

「そうじゃなくて、これ」

彼女にメモを渡す。

そこには090から始まる番号が二つ書いてある。

「ん？ 携帯の番号？」

「上の方が僕ので、下のが岩崎君の。知っていた方がいいんじゃないかな
いかつて」

「岩くんが？ へえ？」

言ってからトモミは首を傾げる。

「あつくん携帯持ったの？」

「色々あつてね。番号変わるかも知れないけど」

「おばさん良く口説き落としたね」

「実はそうじゃなくて、今度また話すけど、ある人から貰ったんだ。
だから母さんと奈津姉にはこれね」

明弥は指を一本唇に押し当てた。

「ふうん？ じゃあ、後でちゃんと話してよ？」

「約束するよ」

どっちにしたってそのうちトモミには話さなければいけないだろ

う。

信じてくれるかどうかは分からないが、ずっと彼女に黙っているなんてとても出来なかった。

不意に、明弥の視線がある一点を捕らえた。

吸い寄せられるように明弥の目は釘付けとなった。

実際に誰かいるわけでも何かいる訳でもない。興味を惹く何かがあるわけでもない。

それなのに明弥は何故かそこから視線を逸らすことが出来なかった。

何も見えないけれど、確実にそこには何かが‘いる’のだ。

「ごめん、トモちゃん、行かなきゃ」

「行くって……授業始まるよ？」

「うん、でも‘呼んでいる’から」

「呼ぶって誰が……あつくん!？」

聞き返すトモミに答えている暇なく、明弥は走り始めた。

目に見えないその姿を追う。

今までならば気のせいで済ませてしまっていた。

だけど、もう自分は知っているのだ。人ではない何かの力が確かに存在することを。

今更気のせいだと言って無視をして、何かが起こった時に後悔するのは嫌だった。

階段の踊り場までさしかかった時だった。一瞬‘それ’がゆらりと揺らぎ明弥の目にも見える姿で人のような形を造る。影のような人型の何かだ。前にアニメで見た‘光学迷彩’という状態に似ている。それが、ゆっくりと手を上げ校舎の外を指差した。

明弥は窓から乗り出すようにして外を見る。

窓のすぐ下には駐輪所の屋根。

通路を挟むようにして奥には水が張ったままになっているプール。その脇に、今は使われていない焼却炉があった。

そこに、二つの人影が見える。

岩崎と井辻だった。

「……！」

血の気が引いた。

何か見えない手でつかみ上げられているように、岩崎の身体が宙に浮いている。

「岩崎君っ！」

叫んだ瞬間、明弥は何かにつ張られるような感覚を味わう。そのまま、その力に反発することなく駐輪所のトタン屋根の上に飛び降りる。がたん、と強い音で鳴り響いた。

「……っ来る……なっ！」

苦しそうにしながらも岩崎が叫んだ。

井辻が振り向いた。

刹那、明弥は胸の辺りに衝撃を覚える。まるで金属バットで殴られたような痛み。後方に突き飛ばされるような激しい衝撃。

「っ！」

息を飲んで次の衝撃を覚悟した。

壁か床、どちらかに叩き付けられる。

目を瞑って歯を食いしばった。

だが、

「……？」

明弥は妙な感覚に気付き、おそろおそろ目を開く。

衝撃は無かった。

その代わりにあるのは何かの柔らかい感触。目を開くとそこに男がいた。背景を透過してしまう半透明の姿だった。二十代か三十代くらいか。穏和そうな顔立ちに少し細い強く優しい瞳。どこことなく岩崎と似た面差しがあった。

男は岩崎の方を見つめながら何かを呟く。

不意に、彼の姿が消えた。

「わっ！」

支えられていた身体が落ち、明弥はトタン屋根の上に軽く尻餅を

付いた。

何か暖かい風が明弥の隣を駆ける。

風は目に見ることが出来ない。

だが、その風がまるで守るように岩崎の身体に巻き付いたように感じた。

明弥は伝うように駐輪所の屋根から降り、焼却炉の方に向かって走る。

井辻と視線があった。

「来るなよ、久住」

井辻が嗤う。

ぞくり、とした。

明弥が井辻に会ったのは入試の時の一度きりだ。けれど、何か違う気がした。明弥の知る井辻とはまるで違う人のように思えた。

これが、本当に彼なのだろうか。

「お前には感謝しているんだ。出来ればあんまり痛めつけたくない」

空虚に思えるほど無邪気な微笑み。

けれどそれは狂気を孕んでいる。

怖い。

太一と向き合っている時の怖さとは違う。本能が拒絶するような恐ろしさがあった。

くすりと笑って井辻は岩崎の方を向く。

岩崎の身体はやはり宙に浮いている。その手はもかくように喉元を押さえている。苦痛に歪んだ顔は恐ろしいほど青かった。

「変に突っかかって来なきや、お前もこんな目に遭わなかったのにな？ いいか、俺がやったなんて口が裂けても言っつなよ？ ま、言っただとところで、俺は手すら触れてないんだから、証拠なんて何もないけどな」

井辻が、何かをしようとしているのが分かった。

「止め……っ！」

声は、言葉にならなかった。

代わりに身体の奥底から何かがせり上がってくる。

押さえきれない衝動が一気に吹き出すように、自分の身体から何かが吹き出したような感覚に襲われる。

後で考えればそれが「インパクト」だったのだろう。

その瞬間、明弥の頭の中は岩崎をどうにか助けたいという思いで一杯だった。だから、出てくる何かをさらに押し上げるように押し出す。

「!？」

がくん、と膝から力が抜けた。

明弥はその場に蹲り全身に走る妙な痛みに耐えた。

どさり、何かが落ちる音がした。岩崎の身体が地面に転がっている。

井辻もまた、その場にへたり込むように尻餅をついた。

さつきまでとは違う「何か」がそこにいた。

恐怖とも何ともつかない、圧倒されるような感覚。

見えないけれど何か恐ろしいものが、そこにいる。

息が、出来なかった。

竦むどころか、動くことさえ出来なかった。

「……………」

弱々しく岩崎が何か呟く。

「……駄目……だ、やめてくれ……俺はそんなことを、望んでは……いないっ」

ごぼつ、と岩崎が咳き込む。

それは明弥に向けられたものではなかった。そこにいる不可視の何かに向けて言った言葉だった。

お願いだ、と岩崎が呟く。

何かに観察されているような、嫌な感覚があった。しかし、次の瞬間、ろっすくに息を吹きかけた時のように気配が一瞬で消えた。

とたん、息が軽くなる。

「……？」

授業開始のチャイムが鳴った。

騒ぎを聞きつけたのかばたばたと教師達が集まってくる。

「……今の」

一体何が起こった？

その疑問に答えは見つからなかった。見つめた手の平はかたかたと小刻みに震えていた。

5 人の噂

噂というものは残酷なものだ。

真実如何はともかくネガティブな内容ほどすぐに広まる。それが目立つ人の噂ならばなおのこと広まりも早い。

「……え？ 岩崎ってあの総代の？」

「……が、安藤たちを病院送りにしたらしいよ」

「でも何でそれで普通に学校に来てるの？」

「親が警察なんだって」

「え？ それってもしも消したってやつ？」

岩崎と井辻が揉めていたという噂はすぐに広まった。それに尾鰭背鰭がつき、いつの間にか安藤と馬場に大怪我を負わせたのは岩崎だという噂に変わっていた。元々無口で人から距離を置いている岩崎は、冷たいとか怖いという印象を受ける。

頭のいい人や真面目な人が殺人を犯す近年、彼と関わったことがないひとから見れば、その噂は事実のように思えるのだろう。

彼の性格上、聞かれればきちんと否定はしたが噂をしている人達に一々否定して回るようなことはしなかった。だから、悪い噂は広がりたいうように広がっていった。

「言いたい奴には言わせておけばいい」

気にする様子も無く彼は言う。

「大方井辻が牽制の為に広げたのだろう。それよりもお前も暫く近寄らない方がいいかもしれない」

「何で？」

「側にいればお前まで悪く言われる。実際、俺があいつ等とやり合った原因はお前だっていう噂している連中もいる。曰く俺と、できている、そつだ」

「できて……？」

笑い半分で言われた為に一瞬何のことか分からず聞き返しそうになるが、すぐにどういう意味なのか気付き口を押さえた。

岩崎は口元に手を当てながら言う。笑いを堪えていると言った風情だ。

「俺としてはその噂に関しては不本意だが、今までにそう言う噂立ったことあったから、大きく否定する方が広がりやすいってのも知ってる」

「そういう噂立ったの？」

「彼女作ってもそう長持ちせず、周りには伊東さんや藤岡さんみたいな男の刑事がうるついているんだ。中学の時は母親が刑事ってこともみんなに黙ってたからな、変な噂も立つだろう」

「た、確かに」

知らない人が見れば勇気の交友関係を不審に思うだろう。

それでも自分のことなのにまるで他人事のように離す彼が不思議だった。

「事実で無ければ騒ぐ必要もない。噂はそのうち消える。でも、当分距離を置くのが利口な考えだろう」

「じゃあ、俺バカのまんまでいいよ」

「いいのか？ ただの噂でも正直キツイぞ」

「それこそ、言いたい奴には言わせておけばいいんだよ」

明弥はふん、と鼻を鳴らす。

実際状況が違ったら明弥も岩崎を避けていたかもしれない。変な噂を立てられるのも怖い。けれど、こんなことでせつかく仲良くなつた彼と距離を取りたくなかった。どうせ噂はそのうち消えるのなら、今はこそそと陰口を言っている人よりも岩崎という方を選ぶでないとずっと先、後悔しそうだった。

「覚悟があるなら何も言えないな」

岩崎は微笑む。

何だかお礼を言われた気分だ。

「もう一つ、覚悟する必要があるんだが」

「ん？」

岩崎は表情を引き締める。

「……井辻は、PKだ」

「PK？」

「一番分かりやすい単語で言えば超能力者だ。ウィッチクラフトって呼ぶ人もいる」

「ウィッチクラフト……」

魔女の技術、魔女術。魔法。

「入試の一件で目覚めた可能性が高い」

明弥は瞬く。

入試の一件、それは初めて岩崎と出会った時の事だ。あの時、突然水道管が破裂したのは明弥の能力が原因だと聞いた。

「インパクトで？ それって太一みたいな人を無理矢理獣にしちゃうんじゃないの？」

「それは結果の一つだ。本来お前の力は人が持っている能力をたたき起こしたり、無理に使わせる能力だ。あの時波は見えたが、誰に対して影響を与えたのかは分からなかった。井辻だったようだな」

岩崎は腕組みをする。

「潜在的に資質があったのだろう。でもそれは表面に出ていなかった。インパクトがきっかけであれだけ強い力を得た。普通、PKと言ってもマツチ箱一つ動かせるのがせいぜいだ。あんな力、身体にも負担がかかっているだろうな」

「それって……」

岩崎くんはどうなの？

聞きかけて、明弥は言葉を切る。

明弥が見ただけでも岩崎の使った力は強いものだった。超能力とは違うのだろうが、彼の身体にも負担がかかっているのではないか。そう尋ねようと思ったが止めた。岩崎は自分のそう言う話を嫌う。

「えっと……太一の時みたいに、もう一度インパクト使えば元に戻

るの？」

「どうだろうな。南条太一の場合コインの表裏のようなものだった。自分の意思で裏返せるし、元にも戻せる。ただ、第三者の力が介入したせいで暴走しただけのこと。井辻の場合、鍵のかかった箱に能力が封印されていた。インパクトは……」

「その鍵を壊しちやったってこと？」

岩崎は頷く。

「まだ仮定の段階だが」

本来その鍵は外れることはなかったのかもしれない。けれど明弥が勝手に壊してしまったのだ。もう元に戻すことはできない。

つまり、井辻に何かあったのなら半分は明弥の責任なのだ。

どうにかして、彼に超能力を使わせることを止めさせなければ取り返しの付かないことになりかねない。

「久住」

「……ん？」

「井辻の身に何かあったとしても、お前が気に病むことはない」

「だけど……」

「遅かれ早かれ目覚めていた可能性はある。それに、井辻は自分の力に溺れている」

それは何となく感じていた。

狂気のような彼の自信溢れた顔。突然手に入れた力に酔って他人を思い通りにしようとしていた。実際あんな力を見せつけられて脅されれば従ってしまう人の方が多いだろう。明弥だってその場に立つてみなければ分からない。

「忠告をしようと近付いたが、あの様だ。止めたいなら、もう少し様子を見るか別の方法を考える必要があるだろうな」

「南条さんなら何か分かるかな？ あの人、そういう方面の研究者だって聞いたし」

「南条斎か」

彼は難しそうな顔をする。

明弥は首を傾げる。

「何かあるの？」

「いや……忙しい人だからな。それに警察にマークされている時に、俺やお前と関わりたいとは思わないだろう」

「ああ、そうか」

「別の専門家を知っているからそっちの方当たってみる。久住は暫く井辻とは距離を置いた方がいいだろう。様子をみよう、今はそんなことくらいしか言えない」

「そう……だね」

井辻が話を聞いてくれないのなら、話を聞いてくれるまで待つしかない。何か解決の方法が見つかるまでは闇雲に動くよりも様子を見る方がいいだろう。

（……でも、本当にそれでいいの？）

多分明弥がいつものように「考えても答えが出ないなら考えない方が良く」と本当に何も考えずにいても、岩崎は気にしないだろう。多分、一人で考えて、一人で対処するのだ。

昨日、井辻を説得した時と同じように、誰に相談することもなく自分が正しいと思ったことをするのだ。

間違っていないと思う。

岩崎の考え方も、しようとすることも間違っていないと思う。

だけど、本当にそれでいいのだろうか。

明弥は息を吐いて周囲を見渡す。

視線があつた女子にあからさまに視線を逸らされた。ひそひそと何か囁きあう声が聞こえた。どんな内容か聞き取れなくてもおおよそ想像は付く。

噂の真相は違つと大声で言つても逆効果にしかない。

本当にこれでいいのだろうか。

明弥は首を振った。

良いわけではない。

岩崎ばかりに全てを背負わせて良いわけがない。

6 それは美しくあるほど

「斎様、太一様がお見えになって……」

「面倒なことはいい。入るぞ、イッキ」

坂上の言葉を遮るように太一は部屋の中に入ってくる。

窘めるように坂上が声を上げた。

「太一様」

「構いませんよ。弟と自由に会わない兄などいません。……それにしても検査の日でもないのにここに来るのは珍しい。しかも女性を連れて来るのは初めてではないですか？」

斎は揶揄するように笑う。

太一は妙にニヤニヤしながら連れの女性の肩を叩いた。

彼の傍らに立つ小柄な女性。太一自身が小柄であるために小柄に見えると言うのもあるだろうが、華奢な体格の彼女はまだ十代くらいの少女だろう。顰の広い帽子を目深に被り恥ずかしそうにうつむいていた。顔は影でよく見えなかったが口元から可愛い少女であることが見て取れた。

「ちよつと相談事があったな。坂上サン、お茶とかどうでもいいから悪いが他の連中近付かせないでくれ」

坂上は意見を求めるように斎の顔を見る。

頷くと坂上は承知したといわんばかりに頭を下げた。

「承知いたしました」

ばたん、とドアが閉じられ、太一は少女を座るように促しながら自分もソファに腰を下ろした。

斎もまたその向かい側へと座る。

「何か意味ありげですね。どうしました？」

「話はこいつから聞いてくれ」

太一はぞんざいに少女の帽子をはぎ取る。あ、と少女が僅かに声を上げ、次いで恥ずかしそうに顔を覆った。

「！」

斎は覺えず息を飲む。

手の平の隙間から見える顔。それは、見覚えのある顔だった。

いやその面差しに覚えがあると言った方が正しい。

「さすがに今の状況でお前に会わせるのは気が引けたが、警察を巻けば問題ないと思ってな。一応この辺には警察の気配はなかったな……って、お前驚きすぎだろう」

「あ………はい、すみません。一瞬誰なのか分からなくて」

斎は少女の格好をした彼の方を見る。

明弥は申し訳なさそうに肩を竦めた。

メガネをかけていないせいもあるだろうが、今の彼はまるで印象が違う。つけ毛をして軽く化粧をした顔は久住明弥だと分かっている。でも女性にしか見えなかった。

「警察を巻くために変装、ですか。私の為にお手数をおかけしました」

「いえ、僕が会いたくて頼んだんです。斎さんなら何かわかるかと思っ」

そう言っただけで彼はインパクトで超能力に目覚めた少年の事を話し始めた。

彼は名前だけ伏せていたが見た能力に関しては事細かに話した。人を持ち上げる程の強いPKはいないと言っわけではないがそれほど多く聞く事例ではない。本来‘彼’がそれだけの資質を備えていたのか、あるいはインパクトの影響か。

放っておいても良いような問題では無さそうだった。

「久住君」

「はい」

どこから話すべきだろうか。

彼は何も知らない。何も知らない相手に一朝一夕では理解し難い

ことを話して何処まで理解されるだろう。出来ることなら彼がもう少し大人になつてから話したかった。いや、大人になつていれば余計に理解は難しかったかもしれない。

「予知や念力と言う普通の人が持たない能力を誰かが持てば利にも害にもなりません。我々はその中でも特に害になりそうな程明確で強い能力をウィッチクラフトと呼んでいます」

彼は真剣な表情で頷いた。

「ウィッチクラフトは個人で能力の差があり、また、一生において使える量も違います。そして一部の例外を除いて無尽蔵に使える訳ではありません」

「一部の例外？」

これには太一が答える。

「俺の場合は獣と人間が混じっているのが本来の姿だ。男か女かのレベルと一緒だな。だから意識さえはつきりしていれば俺が……いわゆる‘変身’の能力を失うことはない。それが例外だ」

斎は頷く。

「そうです。それとも一つ、話を聞く分に岩崎君は巫覡……世間一般で神と呼ばれる者と交渉し力を得る人です。彼が神の声を聞けなくなるか、あるいは神と呼ばれる存在が消滅しない限り彼は無限に力を使えるでしょう」

「……身体に負担はかからないんですか？」

「普通のウィッチクラフトは本人の中のを力を中心に使います。ですから中にある力が空になれば使えないし、無理な運動をすれば身体を壊すのと同じで負担がかかります。巫覡は私自身それほど詳しく無いので分かりませんが精神面で大きな負担がかかると言われています」

日本は超常能力に関して後進的な国だが、先進的な国ではウィッチクラフトに関しての研究も進んでいる。ただ、神の概念に関しては諸説あるために、シャーマン、巫女という類に関しての研究はあまり進んでいない。

巫覡の知識は斎よりむしろ岩崎本人の方があつたろう。

「神という力は強大です。故にそれを使えるだけの安定した精神が無ければすぐにでも暴走するでしょう。神道などでの修行はそのためにあります。不安定な状況で力を使えば自分自身すら傷つけることもあるでしょうね。その意味で負担はかかるでしょう」

明弥は一瞬後ろ暗いことがあるかのように表情に影を落とした。

彼は岩崎の能力を見ているはずだ。おそらく思い当たるところがあつて、自分自身を責めているのだらう。

本当に可哀想なほど優しい子だ。

「目覚めた彼は自分の中の力を使っているでしょう。そんな能力の使い方をしていれば身体に相当負担がかかっているはず。自分の中の能力を全て使い切る前に、生命の方に危険が生じる可能性の方が高いですね」

「やっぱり、そうなんですか」

「説得出来るならまだしも、出来ないのなら彼と深く関わらずにいるのが賢明です」

「だけど」

太一は片手を上げて彼の言葉を遮る。

「それが出来ないからお前はここに来たんだらう？ イツキも分かっているよ」

その通りです、と頷いて見せる。

彼は転がり落ちそうになっている人を見て放っておける人ではない。巻き込まれ自分も一緒に落ちる可能性を考えても手を差し伸べる性格だ。

それが例え自分に害を与えた人間でも、分け隔てなく手を差し出す。片手じゃ間に合わなければ両手も出す。

それが彼の長所であり短所でもあるところ。

「彼と話し合おうと思っても能力のせいで近付くのを拒まれます。ならば、一時的にも能力を強制的に眠らせましょう」

「出来るんですか？」

斎は太一をちらりと見る。

なるほど、と納得したように彼は頷く。

「お前、俺が最初にお前を襲った時、こいつがどうしたか覚えているか？」

「えつとなんか赤いインクみたいな麻酔を水鉄砲みたいなもので打ち込んでいたっていう記憶があるんだけど……」

「あれは俺用の強力なやつだが、能力を制御するための薬だ。効果を落とした薬をそいつに打ち込めば一時的に能力が混乱して意識的に使えなくなる。多少荒っぽいのが、話し合うためにはそうするのが一番だろう」

同意の意味を込めて斎も頷く。

「その方の、命に関わる問題ですからね。それが一番良い方法ですよ」

良い方法と言ったけれど、方法はそれしかないというのが現状だ。もしもそれほどの力を使っていなければもう少し方法は選べただろうが、本気で助けたいと願うならば迷ってなどはいられないのだ。

斎は安心させるように微笑む。

「あなたには太一が世話になりましたからね。あなたが望むのなら協力はしましょう。ただ、あなたにもその彼にも危険な事になりますよ」

「でも、何も出来ないよりずっといいです。このまま放っておくよりも彼が無事でいる確立は高いんですよ？」

斎は瞠目する。

彼の瞳には嘘偽り無い。自分のことなど二の次で相手のことばかり気に掛けている。

「……、それは、保障しましょう」

斎が言い切ると、彼は納得したように頷き居住まいを正した。

「協力してください。お願いします」

7 兄のような人

蝶が舞っていた。

光る針金で作られたような幻影の蝶。

それは変幻自在に色と形を変えながら、男にまわりつくように何匹も飛び回っていた。

蝶の姿を見ながら、勇氣は男を見て目を瞬かせた。まさか彼が来ているとは思っていなかったのだ。

モデルのように細く長身で整った顔をしている二十歳前後の男だ。彼は脇にファイルを挟んで神社の鳥居に寄りかかりながら空を見つめていた。服装はカラーシャツにジーンズとラフなものだったが、安っぽく感じさせない不思議な男だった。

「雅斗兄」

呼びかけると男が振り返った。

綺麗な顔が完璧な笑みを作る。綺麗でどこか妖艶な雰囲気があり、写真だけ見れば女と見間違えそうなほど中性的な顔立ちをしている人だったが、女々しいという印象はなかった。

煌めく蝶をまわりつかせている姿は人ではないものにさえ見える。

「久しぶりだな、勇氣」

変わらない静かな口調だった。

前にあった時より少し髪が伸びているだろうか。

「わざわざ来てくれたんですか。無理にお願いしたのはこっちなのに、すみません」

雅斗は何て事無い、と首を振って答える。

「こっちについてがよかったからな」

「……相変わらず、それ」に付きまとわれているんですね」

「ああ」

彼はちらりと蝶を見る。

「害はないよ。ただ時々現れて人の生き死を教えていくだけ。贅を与える者がいなくなつたからあの時ほどの力はもうない」

この蝶は他の人間には見えない。勇氣と同じように「そう言うもの」を見ることの出来る彼だから見えるのだ。否、雅斗の場合はこの不可視の蝶と因果関係があるために見えるという方が正しい。

四年前、この蝶のせいで雅斗は殺人事件に巻き込まれた。勇氣は蝶のおかげで雅斗と知り合った。彼の言うように生け贄を与えて使役する者がいなければ特に害をなさないものだった。これが良い物なのか悪い物なのか勇氣には分からない。事件の時は飲み込まれそうで嫌な感じがしたが、今の蝶はただあるだけのもののようにだった。勇氣は手を伸ばして蝶に触れる。

指先が触れた瞬間、それは霧か砂になるように細かい光の粒子になつて消えた。

雅斗はその蝶の姿を見て「脆いだろう」と笑う。

有賀雅斗は勇氣にとって兄のような存在だ。四年前、あの事件で渦の中心に一番近いところにいた人で、死神に狙われながらも生き残つた人だ。それはもう昔の話で、今は警察の頂点を目指すために大学に通っている。

彼は勇氣が今まで出会つた人の中で一番頭が良い。多分天才とはこういう人のことを言うのだらうと思う。その天才はある人物を捕まえる為に権力を手に入れようとしている。大学に通っている今もその下準備を進めているのだ。

「……珈琲屋の向かい側の店、火事で人が死んだらしいな。ゼロ班管轄で動いているのか？」

「伊東さんが気になるからと調べているとは聞きました。何か引つかかる点か？」

「あの辺りで蝶達が騒いだ。蠱毒とは違うようだけど、この辺りで何かしようとしている人がいる。警察もバカじゃないから気が付い

ているだろうけどね」

「嫌味ですか」

「よく分かったな」

相変わらずだ、と息を吐き出すと叩くようにファイルが頭の上に置かれた。

「勇気の知りたがっていたことだ。メールを貰った時に父さんのラボにいたからすぐに集められたよ。運が良かったな」

ファイルを受け取って勇気は礼を言う。

「ありがとうございます。今度必ずお礼します」

「出世払いでいい。いつか勇気の力を借りる時が来る。だから恩を売っているだけだから」

はつきりと打算で動いているのだと言われる。

半ば本気だろうが、勇気に気を遣わせない為もあるのだろうと思う。

「それに、暫くここから離れるから」

「離れる？ まさか、母さんにこき使われて？」

「違うよ、もっと上の方からちょっと公に出来ない臓品捜査を頼まれただけだ。本当はこの事件に興味あるけど、まあ、上を目指すなら誼を結んだ方が得だから」

彼はそう言って自嘲気味に笑った。

「それよりも勇気、あの守り刀はどうしている？」

「神社の方で祀ってます」

勇気は上を示した。

確認するように頷いて彼が言う。

「持っていた方が良い」

「予言ですか？」

「経験に基づく推理だよ」

「そうします」

勇気が頷くと、綺麗な顔がじっと勇気の方を見つめた。

まるで自分の頭の中を探られているような気分になった。

天才と呼ばれる人達の中には、頭がいい分人の感情の機微に鈍感な人や敏感すぎて極端に捉えてしまうような人が多い。だが、雅斗に関しては違う。

自分の感情に関しては鈍感な部分もあるが、人の感情に関しては論理的に理解し、的確に判断する人だ。だから時々彼と話していると見透かされたような気分になる。

雅斗は笑いを含んだ声で言う。

「何を悩んでいるのか知らないけど、あんまり考えすぎると身動きがとれなくなる。たまには無茶をするのも良いだろうね」

「伊東さんと正反対な事を言う」

「心配症なんだよ伊東刑事は。勇氣は俺と同じで頭で考えすぎる所がある。冷静に対処するのは悪いことではないけれど、時々感情で突っ走ってみるのも悪くないと思うよ。その上で人を頼るのも悪くない。そんな簡単な事柄の事じゃないよ」

彼は勇氣に渡したファイルを示す。

勇氣は複雑そうに顔をしかめた。

何を悩んでいるか知らないと言ったのに、何について悩んでいるのか知っているかのような口ぶりだ。

嫌ではないが、やはりこの人に敵わないことを思い知ってしまう。

「じゃあ、俺はこれで行くよ。こっちに来たついでにまだ会って行きたい人がいるからね」

「忙しいところすみません」

いや、と彼は屈託の無い風に笑う。

そして不意に思い出したように言った。

「ああ、そうだ。聞きたいことが一つ」

「何ですか」

「『コタケレイカ』という名前を知っているか？」

「……レイカ？」

「覚えがあるのか？」

「いえ、鈴華という名前の子を知っているだけです。その人が何か

？」

雅斗は首を振る。

非常に曖昧そうな表情だ。

「それを調べている時に父さんが不意に思い出した名前なんだ。それ以上何か記憶があるわけでもなく、ただ酷く混乱をした様子を見せた。軽い催眠術で思い出せなくなっているような様子だった」

「だからあるいは関連がある、と？」

そうだ、と雅斗は頷く。

「片隅に名前くらい覚えておいても害はないだろう？ 残念ながら俺は協力出来ないけれど、調べてみるのも悪くない」

勇気は頷く。

ゼロ班が動向を窺っている南条斎の妹、南条鈴華。

そしてウィッチクラフトについて調べていくうちに不意に出てきた名前、コタケレイカ。

共通するレイカという名前。

偶然の一致。

それとも関連があるのだろうか。

関連があるとしたら、どんな関連だろう。

そもそもコタケレイカという人物は一体どんな人物だろう。

謎は深まる。

だが、糸口は見つけた。

勇気は「コタケレイカ」という名前を脳裏に刻み込んだ。

醜惡

一瞬、酷く混乱をした。

何故、彼には自分の力が及ばなかったのだろう。

殺しても構わないつもりで力を振るった。けれど無事だった。それどころか、彼は圧倒的な力を見せつけるように使った。

何故。

その答えはすぐに見つかった。

久住明弥がいるからだ。

自分の力を呼び覚ました久住が、今度は岩崎の味方をしている。久住を騙して味方に付けている。だから岩崎は強いのだ。

そうでなければ神に選ばれた自分が神主の血筋と言うだけで力を持っているあんな奴に負けるはずがない。

入試の日、自分の力が呼び覚まされた。最初は気が付かなかった。気付いたのは家に戻ってからだった。手を触れず物を動かせる。そして破壊も出来る。

何故そう思ったのかは分からないが、本能的にこの力を目覚めさせたのはあの気弱そうな男だと悟った。得た力の強大さに驚き、やがて自分が神に選ばれたと実感した。最初は制御しきれずに動かそうとしたコップを粉々に破壊した。だが、その力も徐々に自分のモノとなっていた。

今では多少集中力は必要だが、手を使うよりもっと簡単に巨大な物でも動かせるようになった。

神が自分を選んだ。

安藤に従って歩いているだけの凡庸な自分を。否、凡庸であったのはそもそも隠れ蓑だったのだ。その日が来るまで誰にも気付かれないように。

久住を奪えば自分こそが最強になる。

いない間に、岩崎を「殺して」しまえばいいのだ。
「そうだな」

口に出して呟くと岩崎は硬い表情を井辻に向けた。
「決着を付けようか、岩崎？」

8 無限花序

吐き気のするほど嫌な臭いがした。

まるで饅えたドブの、いや、生き物が死んで腐った時のような臭いだ。それは赤黒い影と交じり合うようにゆっくりと近付いてきていた。

この悪臭はおそらく殆どの人間が感じ取れない類のものだ。人の妬みや嫉妬という負の感情が交じり合い濃縮され、危険を知らせるために悪臭となって感じるだけなのだ。

悪意の塊だ。

息をするのも嫌になる。

今までにもこういった臭いを感じたことはあった。だが、これはその程度を越えている。誰かの念に引きつけられるように周囲の念が集まり塊となって姿を現したのだ。これ以上進んで万人が匂いをかぎ取れるほどになれば、近づいただけで精神を病むものも出てくるだろう。それだけ、これは危険なものだった。

神社の気配がざらりと変化した。

結界の役割をする鳥居をすり抜け、何かが敷地内に入ってきたのだ。

勘の良い鴉たちが警告するように一斉に騒ぎ始めた。呼応するように他の鳥たちも騒ぎ始める。遠くからは犬が吠える声が聞こえた。勇氣は水干の紐を諸鉤に結ぶ。

神事以外で装束を着ることは滅多にない。

まして、勇氣は出仕前だ。練習着として袴を着用することはあったが、水干を着ることはそう滅多にはなかった。けれど皆無ではないのは、今までにこういった事が幾度かあったからだろう。

巫覡として戦う為の衣装だ。

神職の装束は着るだけで自然と背筋が伸び集中力が増す。

だから「そういったもの」と対峙する時には着用するのだ。それが勇気の「仕事」でもあった。

「そうだよな」

ぼつり、と声が聞こえ勇気は顔をあげる。

神社の長い階段を上がってきた井辻が赤黒い悪意に満ちた気配を纏って笑う。

思っていたよりも状況が悪い。昨日よりも赤黒い気配は強くなり井辻の姿がおぼろげにさえなっている。気配が強すぎて飲み込まれてしまいそうだった。

何故もつと早く気が付かなかったのだろう。

少し考えれば分かったはずだ。安藤達の誰かが能力に目覚めている可能性があるかと分かっていたはずなのだ。それなのに何もせずにここまで状況を悪化させてしまったのは自分の落ち度だ。

井辻には可哀想な事をしてしまったと思う。

彼の周りの悪意は、彼本人だけのものではない。

強い力に引きつけられて周囲の悪意も飲み込んでしまい、もはやそれが誰の悪意であるか区別が出来なくなっているのだ。

それが夕暮れとなりさらに悪い感情を増したのだ。

もつと早く気付いていればこんな風にはならなかった。

「決着を付けようか、岩崎？」

井辻は嗤う。

悪意は自分に向けられている。それだけがせめてもの救いかもしれない。

勇気は人型に切った和紙に向かって息を吹きかける。

「我が息は神の御息、」

ふわり、と浮かんだ和紙は意思を持ったように空高く舞い上がる。

「御息を以って吹けば穢れはあらじ残らじ、」

ふう、と息を吐き出すと、言葉が力を帯びる。

言葉自体には元から力があるのだ。どんな些細な言葉でも悪意を

持つて使えばそれは悪意として自身に返ってくる。だから、これは霊力が宿ったと言うべきだろうか。

「何を言っているんだ、岩崎、心霊ごっこか？」

「井辻、もう一度言う。頼むからもう止めてくれ。無駄に強い力を振るえばそれは害にしかない」

「それを、お前が言うのか？ あんな力を使っただお前が！」

勇気は真っ直ぐ井辻を見た。

あんな力、それは久住のインパクトに押されて力を暴走させてしまった事を言っているのだろう。久住は追及して来なかったが勇気は無意識で‘神’を呼び出したのだ。どんな神であつたのか名は知らない。ただ‘それ’は勇気を救うだけに悪意のある井辻を消滅させようとしたのだ。

井辻が赤黒い影に飲まれた原因はそれにもあるのだろう。

あれと出会ったことで、残っていた彼の良心が希薄になり取り込まれてしまったのだ。

すべて、自分の責任だ。

「お前の言葉は聞かない。大人しく、死ね」

鋭い言葉が吐き出される。

彼のウィッチクラフトは赤黒い影を吸って強大なものになって勇気に襲いかかった。

せめて、

「……あの影を」

少しでも浄化することが出来れば。

勇気は井辻から目を離さず手の平を会わせて打ち鳴らした。

「疾く来たれ 白き神の子 穢れを祓い大経を開かん 急急如律令」

言葉に従うように上空から白い光が落ちる。

それは銀色の毛並みを持つ小柄な狼。

大地を踏みならし、赤黒い塊に噛みつくように躍りかかる。

赤黒い影が霧状に散り、残った衝撃が勇気の身体を後方に突き飛

ばす。

「……っ!？」

左足に、尋常ではない痛みが走った。
何か硬質なもので叩かれ砕かれたような激しい痛み。
意識を手放したくなるほどの衝撃。

「……ぐっ……あ……?」

呻き声を上げると井辻がせせら笑う。

「あはは、こんなものも避けられないのか! 情けないな、神社の
息子が」

左足から、おびただしい血が流れていた。

不安と恐怖、そして憎しみが、勇気の中に流れ込んだ。

(憎い)

自分をこんな風にした井辻が憎い。

殺してしまいたい。

神は自分に味方をする。

いつそひと思いに消滅させてしまえばいいのだ。

……殺してしまえ!

(違う!)

勇気は頭を振って必死に意識を保とうとする。

この憎しみは自分のものではない。

あの赤黒い影が、そうさせているのだ。

感情を憎しみに流すのは簡単だ。負の感情の方が楽なのだ。流れ
てしまえば取り込まれる。全てが見えなくなる。苦しみも消える。

けれど、それは違う。

自分はそれを望んではない。

でも、果たしてそうなのか?

井辻を消滅させればこんな想いをしなくていい。

(神の力を使えば)

誰も自分には敵わない。

勇気は暗く笑う。

「消える」

白銀の狼が勇気の方を見る。

（……………だめだ）

「消滅しろ」

（違う、そんなことをしたい訳じゃない）

意識を保とうとすればするほど、赤黒い影が精神を刺激してくる。勇気の中にある人に対する悪意や攻撃的な部分を刺激し、頭の中に流れ込んでくる。足に走る痛みが正気をかき消そうとしていた。

「これで終わりだ！」

井辻が叫ぶ。

白銀が低く唸りを上げた。

（どっちだ？）

このままでは自分が死んでしまう。だったら、殺される前に相手を殺すのが正しい行動ではないだろうか。

思いながらもそれだけは駄目だと頭の中で何かが警告する。

（どっちが正しい？）

決まっているはずだ。なのに、分からない。

交錯する二つの感情。

黒い影が流れ込む。

取り込まれる。

（……………いやだ！）

「勇気！」

誰かが、叫んだ。

井辻ではない誰か。

心の奥底から、何か強い力がこみ上げてくる。

まるで花が先端に向かって咲いていくような感覚。

無限花序。

その力は、勇気を暖かく包み込むようにして開花する力。

「そうだ……………」

勇気は呟いた。

「忘れてた」
大切な事を、忘れていた。

9 力のある言葉

その人は、なんの前触れも無く現れた。

人の形をしていたが、人ではないことはすぐに分かった。明弥は彼を見つめ、言葉より先に「勇気に危険が迫っている」ことを理解した。

太一や斎に不審そうな顔で見られたが、明弥は今すぐ岩崎神社に行かなければと、送って貰えないかと頼み込んだ。酷い胸騒ぎがした。早く行かないと取り返しが付かないことになってしまいそうなそんな予感だった。

太一のバイクの後ろに乗り、小さな路地を幾度も抜け、最短距離で岩崎神社を目指す。

とんでもないスピードだったが、それでも遅く思えてしまうほど明弥は焦っていた。

神社にたどり着くと、バイクから転がるように落ち、足を縛れさせながらもヘルメット度脱ぎ捨て、礼もろくに言わずに明弥は薄暗くなった神社の階段を駆け上がる。

鳥居を抜け、上へ上へと駆け上がるうちに、何かが明弥を追い越した。

『明弥、乗れっ』

赤毛の狼が唸るように自分の背を示した。

完全に狼の姿へと獣化していたが、今までとは違い意識がはつきりしているようだった。

階段を駆け上がりながら首にしがみつくように背に飛び乗った。

明弥が走っていくスピードよりも遙に早い速度で彼は階段を上がっていく。あの人が、急かすように階段の頂点に立っている。奥へ、早くと指し示すように手を動かす。明弥達は鳥居を潜り抜け、広い

場所へ抜けた。

井辻がいた。

その奥には岩崎の姿。

間に挟まれるように太一よりも小柄な白い狼の姿があった。

何か嫌な気配がする。

言い知れぬ不安。

「勇気！」

無我夢中で叫ぶ。

岩崎が、勇気が、こちらを向いた。

「……てた」

彼は優しく目を細める。

ぱりん、と皿の割れるような小さな音が響き、空が一瞬青紫に染まった。

次いで轟音が鳴り響く。

「！？」

それは雷だった。

白い狼と井辻の間に雷が落ちる。

巨木を一瞬でまつぶたつに割ってしまうほどのエネルギーは無かったが、その雷は井辻をひるませるだけの効果はあった。

太一から飛び降り明弥は勇気に駆け寄った。

赤かった。

彼の足下に血溜まりを作っている。

「怪我して……」

「……お前、何て格好してる？」

勇気は額に脂汗を浮かべながらもからかうような笑みを作る。女装していたままだった事に明弥はようやく気が付く。

答えようがなくて明弥は勇気に切り返した。

「え……あ、そっちこそ」

勇気はあまり見られなくなかったという風に顔をしかめた。それでも、口元に浮かんだ微笑みは消えなかった。

彼が左足に大きな傷を負っていることは明白だった。相当の痛みがあるのだろう。それなのに、何故笑っているのだろう。

自分に心配をかけまいとして笑っているのだろうか。

「久住イ！」

井辻が憎々しそうに吐き出した。

どくん、と心臓が強く鳴った。

むき出しになった感情が怖いのか、何か悪いものでも食べてしまったかのように気持ちが悪かった。

嫌な感情が流れ込む。

不安や憎しみ、恐怖や悲しみ、妬み、恨み。感じたことも無いほど沢山の嫌な感情が一気に流れ込み、呼吸が止まってしまいそうだった。

「気をしっかり持て」

勇気が言う。

「大丈夫だ、俺がいる」

言われて不安な感情が嘘のように軽くなった。

勇気がそこにいる。

彼は怪我をしている状況で、むしろ助けなければならぬのは明弥の方だろう。けれど、これ以上に心強いものはないと感じてしまう。

勇気がいれば大丈夫なのだ。

「あいつの感情に引つ張られるな。好きな食べ物の事でも考えている」

「好きな食べ物って……」

「好きな事でも何でも良い。とにかく、余計な事考えて悪いことは何も考えるな」

彼は引つ張り込むように明弥の身体を後方に隠す。

高鳴っていた心臓が静かになり、嘘のように呼吸も楽になった。代わりに流れ込む暖かな気配。

それは、岩崎神社を包み込むものとよく似た優しい気配。

「はは……」

不意に井辻から笑いが漏れる。

「あははは、結局、そういうことなのか！」

嘲るような、それでいて何処か助けを求めるような笑いだった。先刻一瞬感じたあの嫌な感情を全てを集めたような激情。振れすぎて、それが最早苦痛なのか快樂なのか分からなくなっているような笑い方だった。

「結局、誰も俺を選ばないのか」

泣きたくなった。

怖いのではない。

ただ、彼の感情が胸に迫ってくる。井辻のことは正直何も知らないし、どんな思いでこんな事をしているのか分からない。

けれど、辛かった。

剥き出しになった感情が酷く悲しかったのだ。

それなのにどうすることも出来ない。

だから、余計に辛い。

「ならもう誰もいらない」

びく、と太一ともう一匹の白い獣が反応する。

勇気が小さな刀を引き抜き構える。

「まとめて、死ね」

それは突風のようにもあつた。

目に見えない何かが迫ってくるのを感じた。

太一と白い獣が同時に井辻に襲いかかった。

勇気が刀を地面に突き立てる。

「九 天 応 元 雷 声 普 化 天 尊、！」

ばちん、と電流が流れたような音が響いた。

勇気の突き立てた刀を境に光の壁が浮かび上がる。まるで守るために作られた優しく強い光の壁。網を張った時のように悪いモノはそこで捕らえられているかのようにだった。

強い風が吹き付ける。

しかしそれは消して二人を傷つけるものではなかった。
ぱん、と勇気が柏手を鳴らす。

「被戸の大神 被い給へ 清め給へ 六根清浄」
力のある言葉が放たれる。

それは清めの言葉。

言葉は強い光に変わり、一帯を包み込んだ。

激しい光の中、

一瞬泣いている子供の姿が見えた気がした。

10 蒼は翻る

『明弥！』

叫ばれてはつとする。

頭の中に直接響いてくるような太一の声。

井辻は酷く混乱した様子で頭を押さえていた。

先刻までの彼とは違い、何処か正気を取り戻しつつあるように見えた。

「う…あ…？ 俺は何で……」

「井辻君」

「み、見るな！ 俺をそんな目で見るな！」

「！」

強い風のような衝撃が明弥達に向かって吹いた。

しかしそれは立ってられない程のものでもなかった。

井辻は何か呻くような声を上げながらふらつくように二歩、三歩と動いた。

太一の声が響く。

『‘blue’を打て。使い方は分かるな？』

「う、うん」

「ブルー？」

勇気が訝しげに振り返る。

間髪入れずに太一が唸る。

『説明は後だ！ 勇気、お前は明弥が安全に近づけるようにサポートしろ。あいつは俺が押さえる』

勇気の瞳が確認するようにこちらを見る。

明弥は真っ直ぐ瞳を見返して頷いて見せた。

その手には斎から借り受けた水鉄砲のような注射器が握られてい

る。討てば一時的に井辻のウィッチクラフトを鎮める事ができるという薬剤が入っている。太一の時とは違い、タンクに入っている薬剤の色は青。便宜上‘blue’と呼ばれていると斎は話した。

この注射器は高圧で打ち込む事によって針無しで薬剤を注入出来るものだ。ただ、麻酔銃のようなものとは違い、密着させて討つ必要がある。

だから、明弥は井辻に接近する必要があるのだ。

「行けるのか？」

勇気が尋ねる。

明弥はもう一度頷いた。

「やるよ。見ているだけ何て……足手まといになるしかないなんて嫌なんだ」

明弥には太一のような強靱な肉体があるわけでも、勇気のように立ち回れる訳もない。インパクトの力も自分で制御出来ないのだから意味がないし、制御出来たとしてもそれで何が出来るのか咄嗟に機転が利かないだろう。

だからといって勇気に全てを任せて足手まといになっているのは嫌だった。

「久住は足手まといなんかじゃない」

「え？」

「だけど、そう言うことならお前に任せる。……シロ、路の穢れを被え、久住に怪我をさせるな！」

うおーん、と遠吠えをするように白い獣が声を上げる。

その毛並みから青白い光が放たれる。

その青白い光はちょうど明弥達の位置から井辻までの路を一本照らしたように明く光っている。

行け、と勇気が促す。

その道の上を進め、と言っているのだ。

「うん」

頷いて明弥は駆ける。

「う……ああああ！ 来るなあああ！！！」
井辻が叫ぶ。

同時に彼の周りの土が盛り上がった。
それは塊となって明弥の元へと迫る。

「護れ！」
勇気が叫ぶ。

瞬間目の前の土塊は激しい音とともに粉碎された。
明弥は粉塵をかいぐり走る。

「来るなああ！」

二撃目の塊。

白い狼が跳躍し、顎でかみ砕く。

太一が井辻にのし掛かる。

赤毛の狼が見えない力で高く飛ばされる。

入れ替わるように白がのし掛かる。

「白き子 其れ神の斎串なり、達其道急急如律令、」

白の毛並みが再び青白い光を帯びる。

立ち返った太一が上から更に押さえ込むように飛び乗った。

「靈縛！」

抵抗するようにもがいていた井辻が一瞬痙攣を起こしたように震えた。

明弥は大小二匹の獣によって押さえつけられている井辻の腕に向かって注射器を押し当てる。

引き金を引くようにすると、青い液体が一気に射出される。

「う……？ ああ？」

井辻が呻く。

その瞳が、睨むように明弥の方を見る。

「久……ズ……ミ」

恨んでいるのか、求めているのか。

それすら分らない苦しげな声。

荒い息を整えながら明弥はその場に座り込んだ。

ぼたり、と涙がこぼれる。

ほっとしたからではなく、ただ悲しかったのだ。

「同情なんか、するな！ 同情なんか！」

井辻が払うように二匹を押しつける。

よろめきながら立ち上がった彼は腕を大きく振った。空気を切る音だけがむなしく響く。

「くそっ！ 何で……何で出ないんだ！ 何でっ！ ……っぐ！？」

「井辻君！」

ごほ、と咳き込む井辻。

覆った口と手の平が赤く染まっていた。その場にへたり込み、苦しそうに胸を押さえた。

「……無茶、し過ぎたんだ」

左足を引きずりながらゆっくりと勇気が井辻に近付く。

心配そうに白い狼が彼の足下で鼻を鳴らした。

『何をする気だ？』

太一が唸る。

「井辻を、治す」

『治すって、お前……』

「同情なんか……いない！」

噛みつくように言う。

勇気は首を振った。

「同情じゃない。お前に何かあれば久住が泣く。だから治す。もっとも、神域で暴れたお前を、彼ら、が何処まで赦すか知らないけれど」

苦笑を浮かべるように笑った勇気は井辻の横に座ると人差し指を立て第一関節だけを曲げるという奇妙な形に手を作った。

「この手はわが手にあらず 常世に坐す少名彦名の苦手なり 苦手を持ちて呪えば いかなる病も消えずということなし、」

何かが、そこにいるのを感じた。

小さい人のようなもの。

それでいて強大な力を感じる何か。

明弥は、ほんの少し勇気の力の本質を理解する。

意思を通わせることは出来ても、勇氣自身には力がない。そして万能でもない。ただ‘神’と呼ばれる強い存在に強く願ひ言葉を紡ぐことでその一端を借りるのだ。

多分、その瞬間、彼の中に神が宿る。

だから強い精神が無ければすぐに壊れてしまう。

強すぎるから危うい。

それが、彼の力。

11 異能者の末路

井辻はそのまま昏倒した。

薬の影響なのかそれとも力を使いすぎたためなのかは分からない。太一が彼を背に乗せ神社の下へと降りていった。下には斎が「車を回している」のだと太一は言った。

そのうち救急車も来るだろう。

自身で足の怪我の応急処置をした勇氣はそう言った。

「大丈夫？」

勇氣の側に腰を下ろし、明弥は尋ねる。

「ああ……俺は怪我が治るの早いんだ」

「それって神様の力？」

そう、と勇氣は頷く。

「凄いんだ……うわっ？」

脇腹に何か感触を覚え明弥は声を上げた。

白い狼がじゃれつくように明弥にすり寄っている。狼の頬や目の周りには隈取りをするように赤い色で紋様のようなものが描かれている。

人懐っこい中型犬のようだった。

勇氣はくすりと笑った。

「褒めてやってくれ。どうやらお前の事、気に入ったみたいだ」

「名前、なんて言うの？」

「シロガネ、白の銀って書いてシロガネって読む」

「ありがとう、白銀。おかげで助かったよ」

声を掛けて撫でると白銀は嬉しそうに尻尾を振った。

ふわふわした毛が暖かった。

それがとたん姿を消す。後には白い紙切れが残り、それもすぐに

青白い炎に包まれて消えた。

「え……？ 消えた？」

「シロは式神だよ。本来の霊体に戻っただけだ」

「でも今確かに……」

触っていたはずだ。その感触はまだ手に残っている。だが触っていたはずの毛並みはそこにはもう無くなっていた。

何か奇妙な感じがした。

「……岩崎君は、いつもああやって戦うの？」

「勇気でいい。さつきそう呼んだだろ？」

「あれは何か夢中で……」

「あの声のおかげで正気に戻ったんだ」

勇気は穏やかそうに笑っていた。

「俺は物心付いた頃から人には見えないものを見ていたんだ。見えない人がいるのが不思議なくらいに当たり前だった。元々岩崎の家系は何代かに一人そう言う力を強く持つて生まれてくる子供がいるらしい。だから俺はこの神社で‘霊’と戦う術を学んだ」

彼がこんな話を自分からするのは初めてだ。

明弥が目を瞬かせると、勇気は苦笑して言う。

「救急車来るまで気を紛らわせたんだ。聞いてくれ」

「……うん。俺も勇気のこと、聞きたかった」

勇気は笑む。

優しい顔だ。

痛みに苦しむような苦悶の表情は浮かんでいない。

「俺の父親も、そう言う力持っていたんだ。親子二代で力を持つてるのは稀だったから、爺さんが酷く心配していた。……その心配は現実になった」

「心配って……？」

不意に勇気を守っていた守護霊の人のことを思い出した。

細い目をしていて優しい笑みを浮かべる、何処か勇気に似た人。

「父さんは巫覡になる道を選ばず警官になった。事件を追っている

途中で殉職した。父さんが若くして亡くなることを知っていたから、俺が必要だったのか、俺が生まれたから父さんがいらなくなったのか知らない。でも、俺は父さんが死んだ時この岩崎神社には巫覡が二人も要らないんだって、そう思った」

だから神は片方を見捨てた、と勇氣は呟くように言う。

「そうやって沢山否定したんだ。神の存在も、巫覡の力のことも、人には見えないものが見える力のことも片っ端から否定し続けた。でも、どんなに否定してもこの力は無くならなかった」

独白するように言う勇氣の姿にはいつものような大人びた印象はなく、初めて同じ年齢になったように見えた。

多分これが本来の勇氣。

ようやく誰かにさらけ出す、彼の弱い部分。

無理をしていることを心の何処かで明弥は気が付いていたのだ。

だから彼一人に任せているのが嫌だった。

「そのうち、怖くなった。当たり前前の力が無くなったらどうするのか、俺も父さんみたいに必要ないからと捨てられるじゃないか……それがなくても、井辻のように自分の持っている力に溺れてしまうんじゃないかって怖かったんだ」

だから巫覡の力は使いたくなかった、と勇氣は言う。

「正直井辻がこんな事になったのには堪えたよ。俺の行く末を見ている気分になった」

「勇氣は、絶対に力に溺れたりしないよ」

「何でお前が言い切るんだ？」

「僕が、止めるから」

明弥はきっぱりと言う。

「自分の力の強さを理解している勇氣が簡単に力に溺れるとは思えないよ。でも、もしそう言うことがあったなら、勇氣が助けてくれたみたいに今度は僕が助けるから。溺れそうになったら殴ってでも止めるから。だから、安心して良いよ」

勇氣は目を見開き、そして深く閉じるように瞑った。

「お前は……どうしてそう……」

彼の言葉が途切れる。

深く閉じられた目の端から、何か光るものが零れて落ちた。

明弥は見ないフリをして勇氣と背中合わせになるように座り直した。

「僕は、何も出来ないから。力じゃ足手まといにしかねないから、だからせめて、支えになりたい。こうやって言われるの、迷惑？」

いや、と彼の声が聞こえる。

「もう助けられているよ」

「え？」

明弥は問い返す。

「お前が……明弥が名前を呼ばなかったら俺は井辻を殺していたかもしれない。お前の声じゃなきゃ駄目だった。他の誰かじゃ届かなかったんだ。俺が俺であることを思い出せなかった。明弥は、足手まといじゃない」

とん、と勇氣が背に体重を掛けてくる。

それは信頼の証のように思えた。

これが勇氣の重み。

ありのままの彼。

重みを感じながら明弥は小さく笑った。

「助けになったなら嬉しいよ」

結局、と彼は言う。

「どんなに否定しても、肯定しても俺が神の声を聞けるのは事実だ。俺が俺であるように、一生声を聞き続けるんだろうなって思う。でも聞けなくなっても俺は俺だ。お前といると俺はそれを思い出せる」

「僕は何もしてないって思うけど……」

勇氣は微かに笑いを漏らした。

「明弥は俺がどんな形でも否定しないよな」

「うん？」

「俺にとってそれが一番必要だったんだよ」

彼はふうと息を吐いた。
「……ありがとう、明弥」

12 真実

「ふうん、そう言うことがあったんだ」

トモミは唸るように息を吐いた。

警察病院の病棟脇にある待合室で二人は飲料ディスプレイの紅茶を飲みながら勇気が戻るのを待っていた。

安藤の面会謝絶が解けるのだという。

本当ならばクラスの代表として担任の穂高と委員長のトモミが会うはずだったが、彼が明弥に会いたいと名指ししたこともあり、勇気も含めた三人が見舞いに来た。トモミの担任の穂高は来る途中に車のトラブルに見舞われこちらに辿り着けなかった。面会の許可が下りたら先に会っておくようにと言う連絡があったそうだった。

安藤は警察に何を聞かれても、何があったか一度も話さなかったそうだった。

それは井辻の報復を恐れていたのか、それとも他の理由があったからなのか知らない。けれど、彼は体力が回復しても、勇気に指摘されるまで一度も井辻にやられた事を明示することは無かった。

「信じる？」

明弥が尋ねるとトモミは首を傾けた。

「正直信じられないけど、アキちゃんや岩くんが私を騙すためだけにそんな頭の悪い嘘付くとも思えないからねえ。二人が急激に仲良くなったのもそう言うことあったなら頷ける。だから信じようと思っ
うよ」

「そっか、ありがとう」

それに、トモミは付け加える。

「人が傷つくのは嫌だけど、そういうのって少しわくわくするよね」
彼女はくすくすと笑った。

「あとね、アキちゃん少し感じ変わったよ」

「そう?」

「うん、何かちょっとうらやましいくらい。男子ってそういうところあるよね。付き合う仲間に影響されるのか急に大人になるっていうかさ。私も男の子に生まれればよかったなあ」

「トモちゃん」

「そ・れ・よ・り! 他に何か隠していることあるでしょ?」

明弥は誤魔化そうと表情を作ろうとするが、曖昧に笑うような表情になってしまい失敗したことがすぐに分かった。

軽く舌を出す。

「やっぱばれた」

「当たり前だよ」

一緒にいる時間が短くても、明弥がトモミのことがよく分かるように、トモミも明弥のことをよく分かっている。

やっぱりどうしても隠し事をしているのは分かってしまうのだ。

「本当はちゃんと確信持ってから話したかったんだ」

「確信?」

「うん、お父さんのこと」

「政信おじさんがどうかしたの?」

明弥は首を振った。

「そっちの、お父さんのことじゃないんだ」

「……!」

トモミは酷く複雑そうな表情を浮かべる。

当然だ。

小さい頃はともかく、最近はお互いに触れなかった事だ。

「生きているかもしれない」

「うそ……どうして?」

「それらしい人、見たんだ。政信父さんに良く似た感じの人。だけど、父さんよりも少し痩せてて、背が高かった」

バレンタインの日、火事の現場のすぐ近くに人混みに紛れていた

あの人。明弥と視線が混じり、明らかに動揺した素振りを見せた。明弥を「育ててくれた」父親よりも少し細身で背が高い人。でも確かに感じは似ていたのだ。兄弟と言われれば頷けるほどに似ている感じの男の人。

「じゃあ、何で会いに来ないの？」

分らない、と明弥は首を振る。

一瞬、続きを言うべきかどうか迷った。けれどやっぱり伝えておくべきだろう。

「……その後、僕、尾行されているんだ。尾行してきた男の人が言っていたんだ、手に火傷のある男、に頼まれたって」

「手の火傷……」

トモミは自分の手の平を見つめる。

震えている。

突然のことに動揺しているのか、それとも恐怖に似た感情か、純粹な喜びか。そのどれもが入り交じったような複雑な感情。当然だ。

明弥だって見た日に車が突っ込んでくるといふ事故が無ければこの上ないほどに動揺していた。繊細なトモミが驚かないはずがない。「二人とも」

呼ばれて明弥ははつとする。

「面会、許可がおりた」

勇気は病室の方を示した。

「あ、うん」

「了解」。あ、紙コップ捨ててくるからちょっと待ってて」

トモミはいつもと変わらない風に明るい声を上げ、明弥の手からコップを奪うように持って自動販売機の方まで行く。

無理をしている。

分かったが、それ以上は言えなかった。

「何を話していた？」

勇気が尋ねる。

「父さんが、生きているかもしれないって事」

彼は若干驚いた風を見せる。

「本当の？ 確か失踪届を出して随分経つんだっとな」

「うん、だから戸籍上ではもう死んだ人」

何年も戻らなかった。

失踪した事件が事件なだけに、もう戻らないか、あるいは本当に死んでしまっているか。まだ幼かった明弥には父親がどんな人だったかの記憶もない。だから、今更死んでいたと言うことを聞かされても何の感慨もなかっただろう。

でも、生きていた。

まだはつきりそうだと分かった訳ではないけれど、多分あの人は自分と関わりのある人なのだ。

だから動揺した。

「勇氣はその辺のこと、良く知っているよね」

「明弥の身边は一度調べてるから。……悪い」

「いいよ、隠すつもりもなかったから。前に、僕を尾行していた人火傷の男’って言うていたよね。多分その人が父親」

「実父が息子を尾行、監視？」

「理由は分からないけど」

そう、だからどうしようもない。

何故今更戻ってきたのか、いつから明弥達の周りにいたのか、どうして直接会いに来ないのか。

分からないことだらけだ。

ただでさえインパクトのことで頭がいっぱいだったというのに。

「お前さ」

「うん？」

「自分のこと、僕’って呼ぶようにしたんだな」

「ああ、うん。弟に、僕’は子供みたいでかつこわるい言われてたんだよ。でも、どうもじっくり来なくてね。なんかもう、無理するのも止めようと思って。……格好悪い？」

「いや、と彼は笑う。」

「その方が明弥に会ってる気がする」

「……んー？　ちよっと二人で何内緒話しているの？」

二人の間に割ってはいえるように彼女が顔を覗かせる。

いつもと変わらない表情。

もう切り替えた、と言う風だ。

勇気が少し意地の悪い笑みを浮かべる。

「川上には秘密だ」

「あ、ひどっ……明弥は教えてくれるよね？」

明弥は苦笑する。

そんなこと、今更自分口から言うのも恥ずかしい。

「うーん、言うほどでもないから」

「むっ」

トモミは一瞬頬を膨らませるが、すぐに破顔する。

「ま、いいか。安藤君のお見舞いしちやおう？」

そう言って授業で使ったプリントやルーズリーフに映した板書が挟んであるファイルを上げる。

うん、と明弥もつられたように微笑んだ。

13 もう一人の巫覡

安藤は井辻を助けてくれてありがとうと明弥に言った。

どうして彼が警察に「井辻が犯人だ」と言わなかったのか。その答えはそこにあるような気がした。

彼との短い面会を終えて、トモミを家まで送ってから明弥は家路を歩いた。

不意に何か呼ばれた気がして彼は立ち止まった。

誰もいないはずの道に誰かが立っている。

夕陽に照らされてぼんやりと浮かび上がった影には何となく覚えがあった。

「……勇気の、お父さん？」

問いかけると、その影は人の形を作る。

どこことなく勇気と似た雰囲気のある人だ。いくつで亡くなったのかは知らないが、父親と呼ぶには若すぎる印象を抱く。目が細くて、優しいな笑みを浮かべた人だ。

「うん、そうだよ」

「あ、喋れるんですね」

「君とは波長が合うから、声が届きやすい。もっとも、もうすぐ眠らなきゃいけないから長く話せないけれど」

彼は髪を掻き上げる仕草をする。

今、明弥は幽霊と話している。

奇妙な気分だった。

「えっと……成仏しちゃうって事ですか？」

「うーん、ちょっと違うかな。僕は勇気の父親だけど、それだけじゃないんだ。イワサキマサヨシとしての僕は力を使いすぎているから、回復するまで暫く出てこれないってことだよ」

今ひとつ言葉が分らず明弥は首を傾げた。

「えっと、勇氣には、会ったんですか？」

尋ねると勇氣の父親は寂しそうな笑みを浮かべた。

「会えないんだ」

「え？」

「……近づき過ぎると、僕は消えてしまう。そういう約束だから約束、と明弥は口の中で反芻する。

詳しくは分からないが、そう言う話は何となく知っていた。何か大きな力を得るために、何かを犠牲にして成り立たせる。それは物だったり、魂だったり、想いだったり、そして行動と言うこともあるのだろう。

「寂しくないんですか？」

会いたいだろう。

自分の息子に。そして勇氣も父親に会いたはずだ。

「寂しいけれど、自分で選んだ事だからね。ただ、勇氣は、見える子だからね、僕が会いに行かないことで自分のことはどうだっていいんだ、って思っていたからそれは少し辛かったかな」

「あの、じゃあ、伝えますか？ 勇氣だってそう言うわだかまりがない方がずっと……」

彼は首を振った。

その姿が少し揺らいで見えた。おそらく本当に時間がないのだ。

「必要ないよ。そのことは勇氣自信が自分の中で解決している。それに、あの子の側にはもう父親に代わる人がいる。だからいいんだ。何より、君がいる」

「僕……ですか？」

「君はとても清らかな力を持つ子だ。君がいる限り、あの子はあの子であることを忘れない。だから、僕はもう必要ない」

「そんなことは……」

ない、と言いかけて明弥は口を噤んだ。

慰める言葉をかけるのは簡単な事だ。明弥の言葉は気休めにはな

るだろう。けれど、彼に、勇気の父親にそんな簡単な言葉をかけた
くはなかった。

彼は気持ちを汲んでくれたように微笑んだ。

「死んだ人のこといつまでも忘れずにいることと、その影を追いか
け続けることは同異議ではないよね。……でも、生きているなら別
だ」

「え？」

「勇気の側で君のことも見ていたから分かる。君の父親、生きてい
るよ」

その言葉に少し心がざわめく。

殆ど確信に近かったけれど、誰かの口から確認めいた事を言われ
ると動揺した。

「彼のしようとしていること止めさせた方が良い。僕に言えるのは
このくらいだけど、星を読める人を捜しなさい。その人が、力にな
ってくれる」

「星を読める人？」

「……ごめん、時間だ」

彼の姿がぼんやりと薄らいでいく。

夕焼けの赤が、夜の色に飲まれて一面を薄暗い紫に染め上げる。

「勇気を助けてくれてありがとう。それと、くれぐれも気を付けて
君たちは強い星の元に生まれているけれど、それが必ずしも良い方
向に導くとは限らないから」

だから気を付けて。

彼はそう言い残して暗闇に飲まれて消えた。

「懐かしいものを見ていらつしやいますね」
坂上に言われ、斎は頷いた。

地下研究室の一室。ガラスで仕切られた向こう側には命を助けるための機械に繋がれて井辻の存在がある。

モニター脇にある机の上には写真が散らばっていた。

その写真には何人もの男女が映っている。川辺で釣りをしたり、テントを張ったりする男女の姿。十年以上前のキャンプの時の写真だ。まだ大学に入って間もないくらいの斎の姿がある。少し険のある顔つきだが、不器用な笑いを浮かべている姿だった。

暇さえあれば写真ばかり撮っていた友人が撮影したものだ。友人とはいえ、彼は斎より十以上も年上だ。今どこで何をしているのか知らない。彼はデジタルカメラが主流になりつつあった頃でも妙にフィルム式のカメラにこだわっていた。当時から古く、修理出来る技師もいないため自分で修理しながら使っていた。今もあの古いカメラで撮影しているのだろうか。

写真を見つめながら斎は答える。

「確かめたいことがあったんです」

「久住くんの事ですか？」

坂上は机の上に紅茶を置きながら、散乱した写真一枚手に取った。

「そうです。坂上も思いましたか？」

「はい、正直驚きました。あの方々のご子息なんですね」

「そう……彼女の、子」

坂上の手にある写真には女性の衣服を着て微笑む久住明弥の姿がある。いや、それは明弥本人ではない。彼によく似た本物の女性だった。年齢はちょうど同じくらいだろう。本人と見間違っほどよく似ていた。

以前から似ているとは思っていた。

むしろ確信めいたものはあったのだ。久住明弥が彼の知る「久住」と写真の女性の子供であることを。だが、両親のどちらもないなかった今、それを物質的に確かめる手段は無かった。だからほんの少し他人のそら似である可能性を疑っていたのだ。

けれど、彼の女装姿を見た時に確信した。まるで本人と見間違え

る程にそっくりな明弥の姿。これで血縁関係がないと言える方が冗談を言っているようでもあった。

斎は懐かしむように写真の彼女に触れた。

「明弥さんの‘明’はアスカさんから頂いたんですね」

はしゃいで上半身裸になった男の腕にマジックで「明香命！」と書いてある。それを見つけた彼女が恥ずかしそうに顔を覆っている姿が映っている。その奥には若い斎が呆れたような表情を浮かべている。

もう二度と戻れない懐かしい記憶。

突然、斎の前にあるモニターが警告音を発した。

一瞬驚いた表情を浮かべたものの、慌てる様子無く、斎は立ち上がり、ガラスで仕切られた隣の部屋へと向かう。

「後で紅茶淹れなおして下さいね」

「はい、心得ました」

坂上もまた慌てる様子無く、斎に頭を下げる。

部屋のベッドに拘束され、もがき苦しむような井辻の姿が見えた。暴走する弱いウィッチクラフトが奇妙な光を帯びて井辻から四方八方へと広がる。それを避けようとせず斎はベッド脇にある針のない注射器を手取る。それに白い薬剤の入った小さなガラスタンクを取り付ける。

彼は井辻の腕を掴むと、注射器を押しつけた。

高圧で吹き付けるような音と共に、彼の身体の中に薬剤が注入される。

暴れ回っていた彼の力は次第に力を失い、やがて正気を取り戻した様子の少年が斎の方を睨み付けた。

「お前は誰だ……！」

「目が覚めましたか、井辻正伸くん。私は南条斎と申します」

彼は訳が分からないと言う風に眉根を寄せた。

斎は優しく笑いかける。

「貴方の能力は危険なものと判断されました。それ故、私が保護を

しています。言っている意味が、分かりますね？」

井辻は動揺した風に視線を逸らせた。

彼は周りの悪意を寄せ集め、凶行に及んだ。度が過ぎたのは周囲の影響があるとしても根本の原因は彼自身にある。

ようやく自分の理性を取り戻した彼は自分のしでかした事に驚き怯えているのだろう。そしてこれから自身がどうなるのか、それに対しても怯えていた。

くすり、と齋の口から笑いが漏れる。

「得た力が強大であればあるほど、人は己に溺れる。それは貴方に限ったことではないでしょう。それを気に病むことはありませんよ」

「……どうするつもりだ」

「そうですね、もうしばらくは検査させて頂きますが、体調が回復したら、別の土地に引っ越すことをおすすめします。ここでは貴方も他の方も住みにくいでしょう」

「な……っ？」

井辻は驚いたように声を上げた。

「あんな事をしたのに、ほっといいていいのかよ!？」

「あんな事、と理解しているのなら問題ないでしょう。そもそも、貴方にはまだ早すぎた。それだけの事なんですよ」

齋は彼の拘束を解く。

少年は起きあがって不思議なものを見るように齋の方を見た。

齋は彼を見返した。

びくん、と井辻の身体が痙攣を起こしたように震える。

「だから忘れなさい」

齋の瞳は見開かれている。

井辻の視線はそれに吸い寄せられ、次第に虚ろなものに代わっていく。

「ウィッチクラフトの事は忘れなさい。真実その力が必要となるその時まで、貴方はその力に触れることも、思い出すこともない」

蓋を開け中に閉じこめ、もう一度錠をかける。そしてそれを開く

ための鍵はどこかに捨てられた。だからもう開くことはない。

斎は微笑みを浮かべた。

「お休みなさい、井辻正伸くん」

どさり、と力を失ったように井辻の身体がベッドの上へと倒れ込んだ。

1 薄荷の煙

誰もいない部屋の中心にあるテーブルの上には一本の蠟燭がたたっていた。その先に炎は灯っていない。

ふ、と誰かが息を吹きかけたような小さな音がした。

蠟燭に炎が灯る。

一瞬、その炎の勢いが増し蠟を急速に溶かしていったが、すぐに勢いを失いやがて灯った炎は消えた。

蠟燭の先から一筋の煙が立ち上った。

それから一分も経たないうちに、男が二人、その部屋の中に入ってきた。

背の高い細い男と、頭一つ分小さい無精髭を生やした男。

先に入ってきた無精髭の男は蠟燭を蹴飛ばすように足をかけ、ソファに座った。

「正確だな、有信」

「当然だ。距離と位置関係を把握出来ればこのくらいのことは出来る」

男に言われ有信はろうそくを拾い上げながら不服そうに言った。

その手の平の中でろうそくが燃え上がり、一瞬にして塵一つ残さずに消えた。

「おいおい、勿体ねえな、エコ時代だぞ。資源は大切にしろよ」

「お前が言うな」

言われてタケは笑いを浮かべる。

彼はとん、と煙草の箱を叩き煙草を銜える。

「火」

付ける、と言うように男は銜えた煙草を揺らす。

それを睨め付けて有信は向かい側のソファに座った。

「自分で付ける。ガキじゃないんだ、ライターくらい使えるだろう？」

「悪いな、年を取りすぎたせいで握力なくなっているんだ」

「じゃあ、煙草なんて身体に悪いもんは止めるんだな」

彼はにやけ顔のまま舌打ちをした。

「減らず口を」

「どっちがだよ」

有信は苦く言い放って自分の懷から煙草を取り出し、ライターで火を付けた。

ふかして吐いた煙草の煙から、仄かに薄荷の香りがした。

鼻をひくつかせて男がくつと笑いを漏らす。

「ダビドフのメンソールか、ドイツに女でも出来たのか？」

「俺がどの煙草を愛飲しようと古武には関係がない話だ」

「違いない。おい、ライター貸せ」

言われてライターをタケ……古武に向かって放り投げた。

古武はそれを空中でキャッチすると、自分の煙草に火を付け、ライターを投げ返す。ライターを受け取って有信はテーブルの上に置いた。

「この煙草は」

古武は煙を吐き出しながら言う。

「増税後製造中止になった。増税前に買い占めたんだが、残り二カートンとちよつとだ。せいぜい保って一ヶ月つてところだな」

「随分と煙草の量が減ったんだな」

有信が知っている昔の古武は日に二箱以上の煙草を吸うヘビースモーカーだ。日に数回しか煙草を吸わない有信ならともかく、古武くらい吸っていれば二カートンあったとしても十日として保たないだろう。

男は肩を竦めた。

「最近じゃあ煙草を吸える場所も減ってきたんだ。出張っていることが多いから、必然的に量は減ったさ。ま、祝杯をあげる時には是非

これでといきたいものだな」

古武はトン、と自分のポケットの煙草を叩いた。

「ともかくこれが終わるまでには掃除を終わらせるつもりだ。お前は俺の指示通り動いていればいいさ。悪いようにはしねえよ」

有信は息を吐いた。

濃い薄荷の匂いが鼻から抜けた。

「具体的にどうするつもりなんだ？」

古武は口の端を上げて笑う。

「今は言えないな。どこから漏れるとも限らん。ま、もつとも、聞いてくる時点で大体想像は付いているだろうな。‘レイカ’のこと嗅ぎ回っていたのは興味本位じゃないんだろう？」

「何のことだ？」

そう、問い返して見たもののすぐに表情の作り方を失敗していることに気が付く。この表情でだませる相手と、だませない相手がいる。

もちろん古武は後者。

これでははつきり「そうだ」と言っているのと変わらない。

有信は頂垂れるように頭を抱えた。

せせら笑うような声が響く。

「相変わらず芝居が下手くそだ」

「……」

「レイカのことを調べて成果はあったのか？」

有信は顔を上げる。

「その様子じゃあ何も……」

「成果はあった」

「うん？」

古武は興味深そうに眉を跳ね上げた。

「何も出てこないんだ、何件か調べたが何も出てこない。それは明かな‘成果’だろう」

「……なるほど」

古武は煙を吐いた。

「それで柴田の所にまで行った訳か。あいつを焼き殺したのはあいつからお前の生存が漏れる可能性があったから口封じに、か？」

有信は灰皿に灰を落とす。

「それは違う。新聞にもあっただろう。あいつは自分から死を選んだんだ」

「どうだか」

「そもそも口封じに殺すのならあんなに派手にはやらない」

「ふん、殺すつもりはなかったとは言わないんだな」

もちろんだ、と有信は暗い笑みを浮かべる。

正直答え如何では柴田を殺しても構わないと思っていた。一瞬で灰も残らない程に焼き尽くし、ただ失踪しただけと思わせるような殺し方をするつもりだった。死体が見つからなければ殺人事件にはならないのだ。

ただ、彼は答える前に自ら命を絶つただけのこと。

結果は死という変わらないものだが、その意味するところは大きく異なるのだ。

「今更誰を殺しても変わらない。あいつは、彼女の実験に協力していた側」だ。積極的に殺すつもりはないが、別に結果死んでも構わない程度には思っている」

「それは、同感だな。アレに関わった連中はみんなどっかイカレだ」

「その、イカレが残した言葉だ」

「あん？」

「誰も、悪魔からは逃げられない」

一瞬、古武は驚いたように目を見開く。

彼のこんな表情は珍しい。

古武は瞬いて表情を戻してから、くつ、と引きつった笑いを笑う。
「なるほど、悪魔ね。それは柴田なりの忠告か、それとも悪魔からの警告か……どっちにしたって愉快的話じゃねえな」

「だが、おかげで決心は固まった」

有信は煙草をもう一度ふかして灰皿の上でもみ消した。

「逃げられないなら、逃げないだけだ」

古武は有信の目を見返す。

強い眼差し。

押し返すように戻ってくる。

「オーケイ、ならこつちも腹割って話そう。お前のその目は嫌いじゃないぜ」

ゾクゾクする、と呟きながら煙草を灰皿の上に放り込んだ。

2 星を読む人

「注文入ります、パンケーキ一つ、ブレンドN一つ」

注文書を読み上げるとすぐに厨房から返事が返った。

明弥はボードに注文書を貼りつけて、ダスターを手にテーブルの片付けに向かう。

勇気の紹介で珈琲屋「orange猫」のアルバイトに入って三日が過ぎた。まだ不慣れではあるが、仕事は大分覚えられたと思う。接客の仕事は不向きかと思っていたが、思っていたよりも楽しかった。従業員の人柄も良いし、今のところ質の悪い客に会ったことはない。良い店だな、と思う。

「久住君、それ、私がやるわ」

声を掛けられ、明弥は振り向いた。

同じアルバイトの鮫島泉だった。アルバイトとはいえ、明弥の先輩であるし仕事も早い。明弥に仕事内容を教えてくれた人も彼女だった。本当ならフロアチーフになってもおかしくないくらい働いている人だったが、夜間学校に入っているためにフルで働けないからアルバイトという形を取っているそうだ。彼女が何故夜間学校に通っているのかは触れてはいけないことがらのように思えた。

「まだ休憩取っていないでしょう？ 今ちようどお客さん少ないから少し休んで」

「あ、はい、ありがとうございます」

お礼を言って明弥は彼女にダスターを渡した。

泉は明るく気さくな人だ。彼女に「覚えが早くて助かる」と言われたが、それは彼女の教え方が上手いからだと思う。

「……惚れるなよ」

「うげっ！」

後ろからヘッドロックをかけられ、明弥は覚えず奇妙な声を上げた。

「さ、鮫島さん」

「俺の妹だ、お前にはやらん」

「えっと……」

反応に困って明弥は鮫島を見上げる。

キッチンで働いている鮫島は泉の兄だ。結構体格が良く、人からは怖がられそうなタイプだが、太一に慣れたせいか怖いという印象はなかった。それにこの店で出る繊細なお菓子を作っているのは鮫島だ。怖がるよりもまず感動したのだ。それに、ああいった繊細なお菓子を作る人はきつと優しい人なのだろうと思っている。

勇気には「お前は誰でもいい人にしてしまう」と笑われそうだが、純粹にそう思った。

「パンケーキは、どうしたんですか？」

「じゃんけんで負けた吉岡が焼いている」

後方で吉岡の苦く笑ったような声が聞こえた。

羽交い締めされているために厨房の様子を窺うことはできないが、もう一人のキッチンスタッフである吉岡が苦笑しながらパンケーキを焼いている姿が想像できた。厨房には時折女の人がいることもあるらしいが、基本的には鮫島と吉岡の男二人だ。忙しい時間は手の空いた方が作るのが当たり前だが、暇な時はこういう遊びをしているようだ。明弥が働いている三日の間もこういったやりとりを何度か目撃した。

「泉はああいう性格だから、優しくされた男が勘違いする。だが、残念だったな、泉は誰に対しても優しいんだ」

「分かります。本当に優しい人ですよね」

「……お前、話通じてるか？」

呆れたように言われ、明弥は肩を竦める。

「えっと、鮫島さんが泉さんをどれだけ大切に思っているかは分かりました」

「お前なあ」

明弥を羽交い締めに使っていた手が緩み、明弥は彼の腕から脱出をする。

くすくすと笑い声を上げたのは吉岡だった。

焼き上げたパンケーキを盛りつけながら彼は楽しそうに言う。

「久住君の方が上手だ。望の負けだね。俺、望の脅しに動じない子、久しぶりに見たよ」

「動じないっつーか、アホなんじゃねーの？ 危機意識ないっつーか」

よく言われる事に明弥は苦笑いを浮かべる。

危機意識があるのではないではなく、本当に鮫島はいい人なのだから警戒する必要はないと思うのだが、言えば呆れられそうで止めた。

「新しく入った子いじめたら駄目だろ？ そうじゃなくても望のせいでこの店人手不足なんだから」

「俺のせいじゃねーよ」

むっつりとして鮫島は冷蔵庫からトッピング用のアイスとフルーツを取り出して作業台の上に乱雑に置いた。

「店長が店舗増やしているせいだろう？ ここ数年でどれだけ店舗増やせば気が済むっつーんだよ。せつかく教育した連中すぐに連れ出していい迷惑だったの」

「だけど、その分俺たちの給料いいじゃないか」

「そうだけだよ……」

給料はどのくらいなのかは聞けなかったが、アルバイトの研修中の明弥でさえそこその時給を貰っている。働き次第では昇給もあるのだと言っていたから他に比べて待遇もいいのだろう。

不況だと騒がれている中、職場の雰囲気も待遇もいいという良い場所を紹介して貰ったと思う。

「ところで久住君は好きな子、いるの？」

「えっ？ え、な、何ですか突然！」

何の脈絡もなく突然話を振られて明弥はどきまぎとする。

吉岡はにこにこと笑いながら、慣れた手つきでトッピングをしていく。鮫島もそうだが、彼らの作業は細かい。メニュー自体は普通の喫茶店で作ってくるものと変わらないのだろうが、仕上がりは彼らの作ったものの方が断然綺麗だった。

「好きな子いるとか言えば望もちよっかい出さないかなって思ってた。何か別の意味に聞こえないか、それ？」

わざとなのか吉岡は鮫島のセリフを無視して続ける。

「ほら、一日目の時来た可愛い子いただろう？ あの子とかは？」

「え？ ああ、トモちゃんですか？ そう言うのじゃないですよ、だってトモちゃんは……」

からん、とドアベルが鳴った。

明弥は話を中断すると、二人に軽く挨拶をしてからすぐに接客に向かった。

「いらつしやいま……」

言いかけて明弥は動きを止めた。

髪の色から靴の色まで全部を黒でまとめた女性だった。

驚いたのは喪服のような衣装のせいではない。

彼女は怪訝そうに明弥を見返す。明弥は慌てて謝った。

「す、すみません、水守さんですよね？」

「そうだけど……何処かです？」

「えっと、僕、久住明弥です」

名乗ると水守はああ、と微笑む。

そう言えば彼女と直接言葉を交わすのは初めてだ。最初に出会った時は彼女は気を失っていたし、二度目三度目は共に電話での会話だった。

それなのに何度もあっているような印象を受けるのは、彼女の存在感のせいだろう。

「ここで働き始めたの？」

「はい、アルバイトで」

「そう。それじゃあこれから何度も会うことになるわね。私、ここ

良く来るから」

「そうなんですか？ それじゃあ改めてよろしくお願いします……
つてのも変か」

明弥は頭の後ろを掻いた。

どうもこう言う時にどう言えば良いのかが判らない。

彼女はくすりと笑う。

「それでいいと思うわ。貴方と私は縁が浅くはないようだから」

「え？」

「巡り合わせ、よ。私が必要な時に貴方がいて、貴方が必要な時に私がいた。それは偶然でなく必然。そうある以上、貴方と私は初めから巡り逢う運命にあったの」

「えっと」

相変わらず分からない物言いをする人だ。

意識すれば「これから仲良くしましょう」というところだろうか。ともかく、と明弥は彼女を席に案内する。客と話し込んで入り口付近にずっといるわけにはいかない。

案内された席に座りながら彼女は苦笑いを浮かべた。

「ごめんなさい、回りくどい言い回ししか出来なくて。職業病」
「職業？」

そう言えば彼女は占星がどのと言っていないなかっただろうか。

彼女はうん、と頷く。

「占い師よ。占いというのはいくつかの未来の中から一番可能性の高い結果を相手に伝えるの。けれど、口にした時点で未来が確定してしまう場合も少なくないわ。だから、結果を伝える時は良い悪いは関係なくはつきりと伝えないのが通例なの」

「それでそう言う言い回しをするんですね」

「そう、だから回りくどいと言われてしまうわ」

水守はくすくすと笑う。

こうして笑っていると明弥と同じくらいか少し上か。若いように見えるけれど、落ち着いた話し方を聞いていれば随分と年上のように

にも思えた。

女の人に年齢を聞くのは失礼だろうが、何だか話し方動揺、年齢も掴めない人だ。

「ところで、明弥さん」

「はい？」

「注文いいかしら」

「あ、すみません、何になさいますか？」

いつもの、と彼女は笑う。

泉に聞けば分かるだろうか。分からなければもう一度聞きに来ればいいことだ。

はいと頷いて明弥は厨房の方へと戻っていく。

不意に思い出して明弥は立ち止まった。

「星を、読める人？」

勇気の父親が言っていた人物だろうか。

振り返ると水守は自分のバックから取り出した文庫本を読みふけている。

明弥は首を振る。

今は仕事中だ。

本当に水守との縁が浅くないのなら、また話をする機会もあるだろう。ともかく今は彼女の注文を伝えに行く方が先だと明弥は急いで厨房の方へと向かった。

3 水守という女性

車内に買ったばかりの地図を広げて道を確認しながら、伊東は指先の感覚だけで携帯を操作する。日に何度もかけることがあるために、一々確認をしなくても指先がその数字を覚えている。

短縮で0番。

誰よりも先に登録した番号だった。

携帯電話を顎と肩で挟み込んで固定し、地図でルート確認をする。ややあつて携帯がふつ、と鳴った。

「……伊東君？」

眠そうな声だ。

少し不機嫌そうな愛の声に伊東は少し笑う。

「起こしましたか？」

「いいえ、寝る暇もないわ。どうかしたの？」

「これから三班の植松と一緒に長野に向かいます」

「長野？ どうして？」

伊東は運転席に座った巡査に出るように合図を送る。

新人刑事は頷いて車を発進させた。

本来班の違う彼とはコンビを組むことはないが、中津が連れて行くようにと指示した為に連れて行くことになった刑事だった。名前は植松駿介という。まだゼロ班どころか刑事部の何も理解していないさそうな新米は、現場もろくに分からないために、先輩に言われた事だからとただ従っている様子があった。

中津は誰であっても単独行動を嫌う。伊東に彼を付けたのはそのためであり、右も左も分からない若手を付けることで伊東の無茶な行動を抑制しようとしているのだらうと思う。伊東自体まだ若手と呼ばれるような年数しか働いていないが、愛の側にいたおかげで勘

も能力もベテランに負けないほどになっていた。そして彼女の側にいたせいで、無茶なことをする面も出てきてしまっている。それは自覚済みだ。

伊東は必要なページを開きシートの横に差し込むと、シートベルトを締めて電話を持ち直した。

「柴田と言う男ですが、どうやら戸籍の人物とは別人のようです」「どうということ?」

「ここ数年、少なくともあのカフェが開いた八年前からは遺体で見された男が柴田貞夫と名乗っていたことには間違いありませんが、柴田貞夫として戸籍を持っている人物ではあり得ないんです」

伊東はかいつまんで説明をする。

戸籍にある柴田は高校生の時に事故に遭い、左足に金属が入っているはずなのだ。だが、遺体で発見された男にはそれらしいものは無かった。

つまり、どこかで本物の柴田と、遺体で発見された柴田は入れ替わっていると言うことだ。

『あるいは、何らかの理由で柴田本人が死に、その戸籍を今回死んだ柴田が利用していた』

「そうです。一応俺が簡単に調べましたが、時間も足りませんしここから先のことは中津刑事に任せました。近く連絡が入るはずですよ。そう。それで、どうして長野なの?」

「柴田と南条の接点を調べる際に、興味深い名前を発見したんです。超常現象に関する論文に連名で記されていた名前なんです。ローマ字で、レイカコタケ」と

『レイカ?』

電話の向こうで愛の顔色が変わったのがわかった。

南条斎に関しては嫌と言うほど資料を読んでいるために分かっているだろう。彼の母違いの妹「南条鈴華」と同じ名前だ。引っかかるない方がおかしい。

『レイカという名前の子が日本に何人いると思うの? ……と、言

いたいところだけど、この状況で出てくる名前だから無関係なんて思えないわね」

「はい。ですから調べました。面白いことが分かりましたよ」

「面白いこと？」

「何も分らないんです」

「うん？」

伊東は植松に左折するように指示する。

「論文に書かれていた所属大学を調べてみたのですが、コタケレイカという女性に関しては出てきませんでした。念のため、論文の提出された前後数年調べましたが特に何もありません。まるでそんな人間は存在しないかのようでした」

「誰かが論文提出の為にだけに使った偽名……それとも
そうです、と伊東は頷く。

「何者かによつて記録を改竄された可能性もあります」

もつと徹底的に調べれば大学の記録に改竄された形跡などを発見出来るかもしれない。残されていたデータを見ただけのため、全てを調べ尽くしたとは言いきれない。場合によつては徹底的に調べ上げる必要もあるだろう。

「それで、どうして長野なの？」

三度目の質問だった。

伊東はようやくそれに答える。

「その論文の連名で記されていた名前の人物が長野にいるようなんです。こちらの人物に関してはあつさり出てきました」

「名前は？」

「ミモリサヨコです。水を守る小さい夜の子で水守小夜子です」

水守、と呟いて愛が怪訝そうな声で言う。

「何処かで聞いたことがあるわ」

「はい、勇気くんが言っていた南条太一の件で助力してくれたという女性と同じ苗字ですね」

「また同じ名前ね。偶然の一致かしら……ああ、ちょっと待って」

電話の向こう側で何か話し声が聞こえた。

おそらく藤岡がいるのだろう。

ややあつて電話に出たのは藤岡の方だった。

『もしもーし、伊東くん？ その水守って人、長野の真ん中あたりにいる人？』

「ええ、現在の所在地は中信地区です」

伊東は手帳にメモをした住所と地図を確認しながら言う。

『うん、じゃあ間違いないかも』

「間違いない？」

『その人、ギョーカイじゃちょっとした有名人よ』

「芸能人ですか？」

『ううん、占い師なんだけど、そっちの方面での有名人なの。テレビとか出ないから一般知名度は低いけど。私も会ったことないから本物かどうかは分からないけど、相当‘当たる’ってのと、変わり者で有名』

「変わり者……」

『ちよつと、私に言われるようじゃおしまいとか思ってたでしょう？』

伊東は苦笑う。

実は少しそう思った。

「別にそんなことは思ってもいませんが」

『あーあ、私の心はいたく傷ついたわ。ってわけで、お土産はワインがいいわ。信州ワイン！ 出来れば貴腐ワイン』

「……テールワインで良かったら買ってくださいます」

『やった！ 愛に代わるわ』

また電話の向こう側で会話が交わされ、ややあつて愛が電話に出てくる。

『伊東君、一応公務なんだから忘れないでね』

「……はい」

『と言うわけで、私はアルコールなしで、栗羊羹と栗鹿の子』

伊東は吹き出した。

たまに上司的な事を言っただかと思っただら次の言葉はこれだ。彼女らしいといえば彼女らしい。

「分かりました。探してきます」

『お願いするわ。……伊東君』

「はい？」

『無茶はし過ぎちゃだめよ』

「はい、もちろんです。愛さんもお気を付けて」

上司へと言うよりは、個人的な気持ちも込めて言うと、向こうから苦笑したような息が聞こえた。伊東はそれを聞かなかったフリをして電話を切る。

車は一般車道を抜けて高速道路へとさしかかっていた。

4 獣と煙草

「仲が良いんですね、岩崎警部と」

植松に言われ伊東は唇をへの字に曲げた。

彼の言葉には揶揄する部分も含まれている。上司が女で、しかも名前で呼ぶ間柄だから変に勘ぐられているのがすぐに分かる。実際、彼女の家族とも交流のある伊東の立場的にはそう思われても仕方がないのだが、変に誤解されたままなのは嫌だった。

そもそも植松は岩崎愛が警部で、彼の上司である中津と仲があまり良くないこと位しか知らない。

「愛さんは、岩崎警部って呼ばれるのが嫌いなんだ。所長すら愛ちゃんって呼ぶこともあるくらいだからな」

「そうなんですか？」

「そう、だから迂闊にそう呼ぶとすぐに不機嫌になる。気を付けた方がいい」

それは純真な忠告というよりは、後で尻ぬぐいをするハメになりそうな自分に対する予防線だった。

中津刑事は愛のことを「岩崎警部」か「岩崎さん」と呼ぶ。それはあからさまな嫌味であり、嫌がらせでもあった。中津龍二は元々そんなに嫌味でも、誰かに対して執拗に嫌がらせをするようなねちっこい性格でもない。だから彼女のことが本当に嫌いなのだろと思うっていたが、最近そうで無いことに気が付き始めていた。

それを愛も承知しているのだが、彼女のあの性格で嫌がらせに対して爆発しないわけがない。中津が彼女に嫌がらせをするたびに、不機嫌になった彼女を宥めるのは伊東か藤岡の役目になっている。何も知らない新人とはいえ中津の直属の部下が「警部」と呼び出せば彼女が不機嫌になるのは目に見えている。

「随分と若いですよ、キャリアですか？」

「キャリアではないよ。それと、彼女ああ見えて高校生の子供いるからね」

「え……？ 高校生？ てことは、えーっと……ものすつごく、若く結婚されたんですね」

植松は一瞬だけ考え込んで現実逃避をしたような答えを返す。

「本当にそう思うか？」

「……う」

伊東に言われ、植松は呻き声を上げる。

キャリアではないのに警部、高校生の子供がいる。それだけ考えても彼女が三十を少し越えた程度とは考えにくい。

「ま、女性で、警部って肩書き持っている割には確かに若い人だよ」「綺麗な人ですよ。うらやましいなあ」

「中津刑事はいい上司だろう？」

「厳しいですよ、人使い荒いし。でも、俺ら以上に仕事こなす人だから文句も言えませんがね。岩崎刑事はどうなんですか？」

伊東は苦笑した。

現場に出ていない愛は眠ることが仕事のようなものだ。資料室で仕事をしているフリをしながら眠っていることが多い。それを今の植松に説明しても分からないだろう。納得いくような説明は彼がゼ口班をどんなものか理解した上でないと成り立たない。

「いい上司ではあるな。何処に誰を付ければ能率がいいとか、よく分かっている。ただ、気むずかしいし、かなり癖のある人だから最初の頃は病院通いだっただな」

とん、と胃袋の辺りを叩く。

彼女のおかげで胃は丈夫になったと思う。

植松は羨ましそうに恍惚そうな笑みを浮かべる。

「気の強い女刑事の部下かぁー。何かいいつすよね」
「……？」

伊東は眉をひそめた。

何か伊東には理解しがたい特別な意味が含まれている気がした。それを問いかけるよりも前に、伊東には気にかかることが出来る。黙ってミラーを覗んだ。

「どうしたんですか？」

急に伊東が押し黙った事に違和感を覚えた植松が怪訝そうに問う。すぐに伊東の視線に気が付いたのか、植松もバックミラーを覗いた。そこには真後ろを走る大型バイクがある。

「バイク？」

高速をバイクで走ってはいけないという法律はない。むしろ走っているのをよく見かける。ヘルメットを着用しているし、特に違反しているところは見られない。空気抵抗を少なくするために、車の後ろを走ることは良くある話だ。

だが、伊東達の運転する自動車はパトカーではないものの遅い速度で走行している。あのタイプの大型バイクならば軽く120キロは出るのだ。混雑している訳ではない高速道路でこんな速度の遅い車の後ろに付いているのは奇妙な感じがした。

その奇妙な感覚を植松も味わったようだ。

不安そうに伊東の顔色を窺った。

「植松、次のサービシアに入ってくれ」

「は、はい。分かりました」

植松は少し身を強ばらせてハンドルを握り直した。

サービシアに入る斜めの道に入るためにウインカーを付けると後方のバイクも同じように曲がるという合図を示した。

どうやら自分たちに用があるようだ。

なるべく目立たない空いた駐車スペースに車を入れると、真横に大型のバイクが入ってくる。バイクが大型ならば載っている人物も大型だった。

「車内で待っていてもいいぞ」

「え？ あ、俺も行きます」

シートベルトを外して外に出ると、バイクのエンジン音が止まる。

彼がヘルメットを外すと赤い色がすぐに目に入る。男がバイクから降りた。男は伊東に話があつて来たと言う風に近づいてくる。

何かを狙う獣のような瞳が伊東を見下ろした。

（南条太一）

伊東は押し返すようにその瞳を見る。

身長180センチを越える伊東は人から見下ろされる経験はあまり無い。今までであまり覚えのない奇妙な威圧感を覚えた。急に自分が縮んでしまったかのようにさえ思えた。伊東の側にいる人間はいつもこんな威圧感を覚えているのだろうか。

体格が良い男が二人並んだのを見て、植松が覚えす息を飲んだのが分かった。

「伊東刑事、だったな？」

「こんなところでどうしたんですか、南条さん」

問いかけると、南条は睨み付けるように伊東を見た。

彼が警察に保護されて事情聴取などを行ったため南条太一と言葉を交わすのは初めてではない。聴取の際、南条は座っていたためにこれほどの圧迫感は感じなかった。

首筋を中心にじつとりと汗ばんでくる。

実のところ、伊東が人狼に会うのは彼が初めてではない。だから人狼が怖い訳ではない。抵抗感がないと言えば嘘になるが、人狼が人の姿でいる時は人より身体能力が高いものの、さして変わらないことも知っている。言葉も通じない訳ではないのだから、怖がる必要はないはずだった。

けれど伊東は緊張をしていた。南条斎の弟だからだろう。彼には油断してはいけない気がした。

伊東は彼の一拳手一投足を注意深く観察する。

「……俺はイッキみたいな頭脳戦は得意じゃない」

彼は伊東を見下ろしたまま言う。

「単刀直入に言うよ。イッキの回りをあまり嗅ぎ回らない方が良い」

「我々は、事件の調査をしているだけですよ」

「刑事らしい答えだ。だがそれじゃ足りないな」

「足りない？」

「覚悟だよ。その程度なら明弥や勇氣の方が上だ。例え本気になったとしてもお前程度じゃ無理だ」

南条はじつくりと観察するように伊東の目を見つめた。

伊東はそれを見返す。

「残念ですが、やる前から諦めるような性格ではありません」
言い放つ。

恐ろしいほど鋭い、射抜くような視線が返る。

人でも狼でもない、人狼の瞳。

正直、人ではない生き物を前にして少し足が竦んでいた。歩けと言われても上手く歩けないだろう。震えを押さえて立っているのがやっとだった。

それでも負けを認める訳にはいかない。

「ふうん、だったら見せてみるよ」

南条は笑う。

「俺はあんたでも、あの女刑事でもイツキの相手は荷が勝ちすぎると思うな。それでもやるってなら、やってみるよ」

挑発するような言葉だった。

それともいつでも仕留められる獲物で遊ぶ獣で遊ぶような感覚だろうか。

これではどちらがどちらを追いつめようとしているのか分からない。

後ろで、植松が息を吸い込んだのが分かった。伊東は片手で動かないように指示をする。新人刑事が勢いだけで噛みつくには少々相手が悪い。

楽しそうに笑って南条は懐に手を入れた。

一瞬だけ、伊東は緊張を走らせた。

南条が懐から取り出したのは、少しぐしゃぐしゃになった煙草の箱だった。メンソールだろう。特徴のある緑の箱だ。

南条太一が煙草を吸っていた記憶はない。

「南条さんは煙草を吸うのですか？」

「いや、俺は煙草の煙の匂いは好きじゃねえ。だからお前にやるよ、伊東刑事」

言って煙草の箱を手の位置目かけて放り投げる。

伊東はそれを受け取った。数本無くなっているものの、相当な量が入っている。

「開けたばかりでは無いんですか？」

「要らなきゃ捨ててくれ」

言って、彼はバイクに跨った。

エンジンが掛かる。

「それじゃあ、くれぐれも気を付けろよ？」

脅しとも忠告ともとれる言葉を残して南条太一を乗せた大型バイクは駐車場を走り始める。

先刻愛に同じような事を言われたが、それに含まれる意味も重みも随分と違った。

5 灼熱の炎

「鈴華ちゃん、また明日ねー」

クラスメートに言われて鈴華は微笑んで手を振る。

「うん、また明日」

進級をして三週間ほどが過ぎた。もうすぐ最初の長期休暇であるゴールデンウィークに入る。それまで大丈夫だろうか、と鈴華は胸に手を当てた。

時々、心臓が奇妙な音を立てる。

幼い頃からそうだった。

それが体調を崩す前兆であることを鈴華はよく知っている。

最近ますます頻繁になってきた前兆。それを騙すように鈴華は明るく振る舞った。まるで病気など抱えていないかのように振る舞う。もう慣れたこととはいえ、病院での生活は辛い。

クラスメート達が見舞いに来てくれるものの、時間が限られている。良く来てくれる男の子も週に二、三回。太一でさえ、ずっと一緒にいられるわけではないのだ。他の子供が授業を受けたり、当たり前に生活している時、病院のベッドの上にいる自分はどんどん他に置いて行かれる気がした。

女の子達は自分に気をつかって話しかけてくれるけれど、やっぱり自分はお客様なのだと感じる。彼女たちに取って自分は同じクラスの子ではなく、身体が弱くて少し可哀想な女の子なのだ。

それが酷く寂しい。

けれど、時々そんなのもどうでも良くなる。

奇妙な音で鳴る心臓がそんな悩みなど些細なものと嘲笑っているかのように聞こえる。

だから余計に病院にいるのが怖い。

自分と彼女たちの微かな繋がりさえ断ち切られてしまう気がするのだ。

「っ！」

どくん、と心臓が鳴った。

いけない、倒れる、と鈴華は感じる。

視界が揺らぐ。

このまま倒れる。

そう思った時だった。

彼女の身体を支える腕が差し伸べられた。微かに甘い煙の匂いがした。

「……運がない」

声は男のものだった。舌打ちをして呟いた言葉だったが、それは鈴華をせめるものではなく自分を嘲るような笑いを含んだ声。

「大丈夫か？　すぐに救急車を呼ぶ」

「だめ」

鈴華は言う。

逆光になって男の顔は見えない。だが、男が怪訝そうに首を傾げたのが分かった。

「救急車は、呼ばないで」

病院には行きたくない。

「だが……」

「お願い……休めば良くなるから」

男は一瞬躊躇った素振りを見せた。だが、すぐに出しかけていた携帯電話を懐にしまい込んだ。

「分かった」

頷くと男は鈴華の身体を抱き上げる。

「その公園で休め。何か欲しい物はあるか？」

何も、と鈴華は答える。

そうか、と男は短く答えた。

斎よりも少し年齢が上だろうか。太一に比べて細身のせいか、

とても身長が高く見えた。

男は鈴華をベンチの上に寝かせると自分の上着を掛ける。

誰だろうか。何処か懐かしい。会ったことがあるような気がした。「少し、熱があるのか。家の者に連絡を取った方がいいだろう。自分で電話はできるか？」

鈴華は頷いて自分の携帯電話を取り出す。

太一は今どこだろうか。

彼ならこのくらいなら斎に内緒にしていってくれる。心配し過ぎて入院の手続きをとったりしないだろう。だから迎えに来るなら彼が
いい。

電話を掛けると太一は少し心配そうな声を出した。大丈夫、と伝え
ると「急いで向かう」と返事が返った。

「冷やした方が楽か？」

僅かに冷えたものが額に当てられる。

電話している間に買ってきたのだろうか。ハンカチにくるまれたそれは缶ジュースのようだった。

「ありがとうございます」

受け取り言くと男は少し笑う。

何かを懐かしむような優しい顔だった。

男はベンチの空いたスペースに腰を下ろし腕を組んだ。鈴華の位置からちようと彼の右手が見える。爛れたような引きつった奇妙な傷跡があった。火傷の跡だった。

心がざわついた。

何か知っているような気がした。

（……この人を？ それとも、この火傷を？）

鈴華はじつと男の手を見つめる。

男は気が付いたようにさっと手を隠した。

（傷のある男……ああ、あの時の）

鈴華は微かに覚えている記憶を辿る。

久住明弥を尾行していた男がそんなような事を言わなかっただろ

うか。手に傷がある男に頼まれたと。

鈴華は男の顔を見る。

（こんなに優しいそんな人が？ まさか）

自分を気遣ってくれるような優しい人が、明弥のような優しい人を尾行させたりするだろうか。鈴華にはとてもそう思えなかった。だが、この人がそうなら「運が悪い」と呟いた理由が繋がる。

あの尾行していた男の人からあの時明弥の側にいたと報告を受けているのかもしれない。そうなれば言葉の意味が分かる。

（でも、ならどうして？）

「おじさん」

「何だ？」

「誰にも言わないわ。だから教えて。……私を知っているの？」

男は静かに鈴華を見つめた。

怪訝そうにするのでも、驚いた風にでもするわけではない。まるでその質問を覚悟していたかのような表情だった。

「ああ、知っている」

「……おじさん、誰？」

「俺は」

何故だか酷くざわついた。

心が。

何処か、疼くような感覚。

耳を塞がなくては。

自分でした質問。

でも、聞きたくない。聞いたら何かが起こってしまう。

いや、

終わる？

「久住有信だ」

彼女は目を見開いた。

焼き切れた。

ギリギリで繋がっていた回線が、激しい炎で焼き切られたように、
そこで彼女の記憶は、終わった。

6 惑わされるように

「先輩、あの人」

運転しながら植松が道ばたに蹲る女性を見つけ指を差した。

中信の目的地にほど近い場所だった。駅前というのに人通りはまばらで閑散とした印象を受ける場所だった。

人通りの多い場所ならば既に誰かが声をかけているだろうが、殆ど人がいない上に死角になっているために彼女の姿は他の人に見つけ難くなっているようだった。蹲っている彼女の側には誰もおらず、危険な状況に見えた。

伊東は植松に止まるように指示をした。

「大丈夫ですか？」

車から降りて声を掛けると、女が顔を上げた。

四十代半ばくらいだろうか。癖のある茶色の髪を束ね、横に垂らしている。学校の教員を思わせる厳しい視線。中肉中背、蹲っているために正確には分からないが女性の割に長身のように見えた。

「……ちようど良かった、あんた、煙草持っているだろう？ 一本分けてくれないかい？」

「え？ た、煙草……ですか？」

要求された物に伊東は面を喰らう。

「そうだよ。懐の方のじゃなく、右ポケットのヤツだ」

女に指を差され伊東はぎくりとした。

懐の方には伊東自身が愛飲している煙草が入っている。だが、ポケットの中には南条が渡してきた煙草が入っている。懐に手を入れる素振りも、ポケットを触る仕草もしていないはずだ。何故彼女はそこに煙草があると分かったのだろう。

無意識に南条の煙草を取り出すと、女は奪うようにそれを取り――

本に火を付けた。

「なっ……」

あまりにも傍若無人な振る舞いに植松が声を上げる。

「あー、やっと落ち着いた。これがないとどうにも活動出来なくてねえ」

女は男性的に笑って煙草の煙を吐き出した。

メンソールのキツイ匂いがした。

「おや、よく見たら、なかなかいい男じゃないか」

言いながら彼女は立ち上がり伊東の背を強かに叩いた。伊東は背に痛みを感じながらも表情を変えずに立ち上がった。

何て人だ、と植松が呆れたように呟く。

女は楽しそうに二人を見つめ、突然伊東の頬に手の甲を触れさせた。一瞬、その目の奥が鋭くなったのを伊東は見逃さなかった。

「へえ、あんたら、警察か」

「何故そう思うんですか？」

「思っんじゃない。分かるんだよ。向こうからわざわざ長野まで来るなんて随分厄介なヤマ抱えているようだね。しかもそれが本命って訳ではない、もう一つ気になる所も調べたいと思っっているのか」

伊東は目を瞬かせた。

「な……んぞ？」

植松が明らかに動揺したような声を上げる。

まるで、心の中を読まれているような気分になった。

女は煙草を吹かしながらにっこりと笑いを浮かべる。

「煙草の礼だ。少し協力しよう。あんたらの探している人物は……」

おや、これは奇遇だねえ」

「それは、どういう意味ですか？」

女は煙草を口に付けて吸い込む。

鋭い瞳がますます鋭さを増したように輝いた。一瞬、光彩が微かに青白い光を帯びていると錯覚をするほどに。

「水守小夜子を捜しに来たのだから？ それとも占い師の方をかい

？ どちらにしても同じ事ではあるけれどね」

言動に伊東は納得して彼女を見つめる。

「では貴女が」

「そう、水守小夜子は私の事だ」

想像していた人物像と大きく異なる雰囲気、伊東は少し驚いたが、本物だ、と感じる。

「そうだね、コーヒー二杯分くらいの時間なら付き合っただけでも構わない。どうする？」

そう言われれば「お願いします」というより他になかった。

軽く挨拶だけを済ませ、彼女を車内に招き入れた。

正直、こんなにも早く水守小夜子に出会えるとは思っていなかった。地方警察に挨拶をし、役所で調べて目的の場所を探し当てるのに少なくとも二日か三日は時間を潰すのを覚悟していた。それがまたま道に蹲っていた女性に声を掛けたことでこんなにもあっさりと進んでいく。何か因縁めいたものを感じざるを得ない。伊東同様に植松もこんなに早い展開に困惑している様子だった。

水守はミラー越しにじつと植松の顔を見て、くすりと笑った。

「精神感應能力っていうんだ。テレパシーと言った方が分かりやすいかい？」

「え？」

「あんた、ずっと気にしていただろう。何で自分たちの事がわかったのかって。波長の問題もあるが、感情の表面はある程度読める。」

まあ、あんたは比較的分かりやすい顔をしているけどね。あとは経験と、推理だ」

「あなたは占い師ではないのですか？」

「そうだよ。でも、どうせ得る情報なら、占いなんて曖昧なものではなく正確なものがいいだろう？ もっとも、表面しか読めないから、あんたらが私に会いにきた事くらいしか分からなかったけどね」

藤岡に変わり者だと言われた事を思い出す。

なるほど、彼女は一筋縄ではいきそうにない人物だ。だが非協力

的でないのだからまだやりやすい人物だろう。
アクの強い仲間と一緒にいるせいだろうか。
彼女はまた常識的な人物に思えてならなかった。

鈴華からの連絡を受けて、太一はすぐさま彼女の元に向かった。

伊東達に会ってからすぐに高速を降りてこちらに戻ってきた。実のところ、秘密裏に調べておきたいことがあったのだ。

そう、あの火事の時の男。

集中をすれば雑踏の中でもただ一人の匂いを嗅ぎ分けることが出来る。あの時、強い煙の匂いが立ちこめる中、太一の鼻が僅かに感知したのは煙草の匂いだった。特定の煙草を愛飲している人はその人本人の匂いに混じって髪や肌にも少し匂いが残る。あの匂いは独特なもの。

だから同じ匂いを感じたことを覚えていた。

明弥をつけ回していた男から、移り香のようにしていた僅かな香り。それと同じ匂いがしたのだ。それ以外で、太一があの煙草の匂いを気にしたことはない。

おそらくコンビニや自動販売機で気軽に入手出来る種類ではない。そう思った太一がようやく見つけ出したのが伊東に渡したあの煙草。

賭だ。

伊東がこちら側の意図に気が付き、乗ってくるか。それによって彼らがどちらを優先させるか。それが大きな賭だった。

辿り着くかもしれない、あの男に。

「……？」

公園にたどり着き、脇にバイクを駐輪した時、嗅いだことのある匂いに顔をしかめた。

あの煙草の匂い。

だが薄い。少し前にここにいた、そう言う感じの匂いだった。

「まさか……鈴華っ！」

慌てて公園の中に入っていくと、ベンチの上に腰掛ける鈴華の姿を見つける。鈴華の柔らかな匂い。間違うはずがない。

ほっとして太一は息を吐く。

だが、次の瞬間、心音が高く鳴った。

少女が振り向く。

だがそれは鈴華ではない。

（……誰、だ？）

こちらを見つめる鈴華は確かに鈴華なのに、何故か別人にしか見えなかった。

表情の作り方が、鈴華のそれとは大きく異なったのだ。

「太一くん？　どうしたの？」

「え？　ああ」

呼びかけられて太一ははっとする。

心配そうにこちらを見上げる素振り。

いつもの彼女だった。

気のせいだったのだろうか。太一は平静を装って鈴華の頭を撫でる。

「いや、何でもない。それより誰か一緒だったのか？」

「どうして？　ずっと、一人だったけど……」

「いや、そのハンカチ」

太一は鈴華が握っているハンカチを指差した。缶ジュースを巻いているハンカチは鈴華のものではない。男物で、僅かにあの匂いがする。

指差すと鈴華は自分でも驚いたような表情を浮かべた。

「え？　あれ？　これ、誰の？」

「覚えていないのか？」

うん、と鈴華は頷く。

嘘を言っている様子はなかった。

嫌な感じがした。

腹の辺りで何かが渦を巻いているような錯覚。自分の知らないところで彼女が危険にさらされている。

それがたまらなく恐ろしかった。

「太一くん？」

「あ、何でもない。帰ろうか、鈴華」

太一は嫌な予感を払拭しようと笑みを浮かべた。
ちゃんと微笑めた自信がない。

7 白い悪魔

水守の指示に従って車で5分ほどの喫茶店へと移動する。

個人経営の店らしく、地元の常連客で無ければ入りにくいような雰囲気のある少し薄暗い雰囲気の店だった。

顔見知りらしい店の店員から水守は煙草を受け取ると、案内される前に自分から店の一番奥の席へと移動した。店員も何言わなかったところを見ると、どうやらそこが彼女の指定席になっているらしい。

彼女は新しい煙草に火を付けて一服すると灰を落とす。

「さて、何を知りたい？」

問われて伊東は背筋を伸ばした。

「まずはこれを」

「？」

伊東は彼女に論文の写しを差し出す。彼女は怪訝そうにそれを受け取ると、表面の文字を見てあからさまに顔をしかめた。

連名で記された名前を信じるのであれば彼女が書いたものだ。覚えがあつて当然だろう。嫌そうな顔を見るにどうやら思い出したくない類のものらしい。

「なるほど、コタケレイカを調べに来たのか。それにしても随分と懐かしいものを持ち出したな。全て処分したはずだったが、読み違えたな。これだから占いは当てにならない」

「処分ですか？ あなたは、この論文を処分しようとしたんですね？ それは何故ですか？」

「決まっている。名前を残しなくなかったんだよ」

注文もしていないのにコーヒーが運ばれてきた。

「名前を残したくないとはどういう意味ですか？」

「コタケレイカとこれ以上関わりたく無かったんだ。名前を残せば関わる事になりかねない。事情があつてあの時どうしても論文を完成させたかったから連名にしたんだ。業界じゃ私の方が有名人だったからね」

「貴女は彼女をご存じなんですか？」

うん、と彼女は頷く。

「知ってるさ。だが、論文発表のためにせいぜい数回会っただけだ。あの時はあまり興味も無かったから年齢までは聞かなかったが、十代半ばくらいの子供だったね」

論文発表は二十数年前。

生きているとすると現在は四十前後といったところか。

「どんな人物ですか？」

植松が聞く。

水守は少し考え込むようにして煙草を置くと、コーヒーに口をつけた。

霊媒師や超常能力者を名乗る人間には偽物が多い。ただ、本物も確かにいることを伊東は経験から知っている。恐らく彼女は本物の能力者だ。

彼女の能力は占いで未来が読めるというものではない。その才能もあるだろうが、一番は人に触れる事でその人の内面を読みとる能力なのだ。恐らく彼女が占い師として有名なのはそう言った能力を使って一種のカウンセリングを行っているのだろう。誰にも話せない事を言い当てれば相手も驚き信頼する。そうして彼女は名前を知らしめて来た。メディアで顔を出さないために誰もが知っている程ではないが、この業界の中では有名人と言われているのは彼女が本物だからだろう。

彼女がコタケレイカに会ったとしたら、彼女の能力でコタケレイカの中を読んでいるかもしれない。そうなれば、どんな人物であるか、垣間見える。

彼女は考え込み、暫くして口にする。

「白い、悪魔だね」

「悪魔？」

「悪魔なのに白？」

伊東が反応したのは柴田が死ぬ間際に口にした「悪魔から逃げられない」という言葉のせいだったが、植松はたとえられた色に反応を示した。

水守は少しだけ面白そうに口の端を上げた。

「私は後にも先にもあんなに波長の合わない人物に会ったことはないよ。だから私自身の感想になるが、彼女は理想論者だ。己の理想が何より正しいと信じそのためなら人を殺そうとも構わない」

「それで、白なんですか」

伊東は納得したように頷く。

「え？　どういう意味ですか？」

「罪だとも思わないんだ。自分自身の中ではそれが正しく罪とも思わない。……ですね？」

最後の下りだけ水守に質問する。彼女は満足そうに頷いた。

「聡明だね。そう、彼女はいい意味でも悪い意味でも無垢だった。だから人から非難されるような行動を取っても彼女自身それが正しいと信じているから、咎められても何故咎められているか分からない。どうして怒るのかと首をかしげるだけなんだ。残酷で、悪魔みたいな精神を持っていた」

伊東は刑事部に入るまでは少年課の方にいた。非行に走る少年少女の多くは家庭環境や友人関係の寂しさを紛らわせるために軽い気持ちで万引きなどに手を出す。一瞬の達成感や満足感が得られるために繰り返す行い、それでは飽きたらず暴力的な行為に走る子供も多い。そんな子供の多くは本当はやってはいけないことを知っている。罪悪感もある。だから、ちゃんと話し合う事が出来れば更生する子供も多い。

けれど、本当にごく稀に倫理観が完全に欠如している子もいた。例えば殺人を犯して捕まっても、人を殺すことが何故いけないのか

が分からないという。それが法律として犯罪になると言うことは理解しても道徳や倫理的な理由が理解出来ないのだ。両親や大切な人が殺されたら、あるいは自分が殺されたらと説いても理解が出来ない。お気に入りのマグカップが割れた時の方がよほど心を動かされるというのだ。

恐らくコタケレイカという女性はそう言う類の人だ。

「理想論者と言いましたね」

「ああ」

「それは具体的にどんな理想だったんですか？」

「詳しくは聞いたことはない。ただ気持ちが悪くて理解をしたいとおもえなかったからね。ただ、彼女が生まれながらにして超常能力を持つ子供を作ろうとしていたのは確かだよ。奴に取って論文などは二の次で、私の遺伝情報を手に入れることの方が重要だった」

「遺伝情報……！」

彼女は冷静な表情でコーヒーを口に運ぶ。

「察したね、そっちの彼も」

植松が酷く動揺した風に青ざめた。

「……えっと、取り敢えず俺は超常能力とかあんまり信じてないし良く分かんないっすけど、そういうのって、遺伝とかするんですか？」

「すると思うよ。環境の問題もあると思うけれど、特定の家に同じような能力をもって生まれるというケースは多い。私の場合、叔母が私と同じような力を持っていたね」

伊東も頷く。

「自分も親子二代で特殊能力を持って生まれたケースを知っています」

伊東は勇気の事を思い出しながら口にする。

彼は特殊能力を遺伝により引き継いだ可能性がある。彼の場合、神社という特殊な環境も関係しているのかも知れないが、彼は神社でずっと生活をしていたわけではない。むしろそう言った能力に対

して否定的な考え方を持っていた。その場合環境によって自己暗示がかかり能力が目覚めたと考えるよりも遺伝的な問題の方が大きい気がする。

彼の父親も母親も、特殊な能力を持っている側の人間なのだ。

「えーっと、待って下さい、そう言う話を始めたって事は、ひよつとしてひよつとします?」

水守はくすくすと笑う。

「この話を誰かにするのは初めてだよ。本当は墓場まで持っていくつもりだったんだが、まあ、これも運命だろうね。……彼女は作ったんだよ、私の遺伝子を使って」

「水守さんが生んだんですか? それとも……」

「それとも、の方だよ。誰が生んだのか私は知らないし、興味もない」

きつぱりと言い放つ。

どこか怒っているようにも聞こえた。

「その子は残念ながら彼女の求めた力を持っていなかった。だからすぐに興味を失って私に返してきた。……でも、失敗ではなかった」

「目覚めたんですか?」

水守は頷く。

一敗目のコーヒーが空になった。

「それからは悪魔から子供を隠すために逃げ回っていた。腐っても私の子。どうしても守り通したかった。幸い私には占いの才能があったからね。危険を察知すればすぐに逃げられた」

「論文を処分したのもそのためですね。誰かがあなた達の関係を暴くのを恐れ、唯一の接点に成り得るものを消した」

「でも、あんたらは私の所まで辿り着いた。こう言うのを巡り合わせ……いや、因果か。悪魔に関わった人間は誰も悪魔から逃げられないってことだ」

伊東はその言葉にぎくりとする。

悪魔から逃げられない。

柴田が言った言葉。

やはり繋がっているという予感がする。

コタケレイカと柴田。

では、南条斎は？

「お子さんは今どちらに？」

「捜し物をしに出かけている。……場所が場所だから、運が味方をすれば出会っているかもしれないね。名前は祐里子という」

ミモリユリコ。

久住明弥に関わった女。久住明弥と接点を持つ南条斎。僅かに繋がる。

だが、まだ接点と位置づけるにはパーツが足りない。

「あの後、コタケレイカと会っていないから分からないが、祐里子と同じように、彼女の手によって作られた存在があるかもしれない」

「誰かの遺伝子を使って作られた存在……ですか」

「一度二度の失敗で揺るぐようには見えなかったから、必ずと言ってもいいだろうね」

「……不躰な質問ですみませんが、祐里子さんはクローン体ですか？」

「それだけはない。祐里子は違う。ただ、私の遺伝子、あるいは誰かの遺伝子でクローンを作った可能性は否定出来ない」

「父親にあたる遺伝子の提供者には心当たりは？」

彼女は少し息を吐いて、煙草を揉み消した。

「彼女自身、能力者だとして、超常能力が遺伝すると信じるなら、身近なところにいるだろ？」

少し考えて伊東は答えを出す。

「親か……兄弟？」

うん、と彼女は頷く。

「当時服役中の兄がいると少し聞いた覚えがある。可能性はなくはない」

「服役中の兄？」

「そっだよ」

「どんな名前ですか？」

「だからソウだよ。古武宗。調べる価値はあるんじゃないかい？」

水守は新しい煙草に火を付けながら笑った。

1 嫉妬心

「いーわーくん」

呼びかけられて勇氣は溜息をつく。

振り返らずとも声の調子で誰なのかが分かる。

「あ、ちよっと、無視した挙げ句盛大な溜息って女の子に対してどうよ？ モテモテのくせして」

勇氣は振り返ってトモミの方を見た。

陸上部のジャージ姿の彼女は口元に手をあてて、揶揄するかのようにくすくすと笑っている。

「見てたのか？」

「相変わらずもてるよね、つい最近、不穏な噂流れたつてのに。っていつか、こんな朴念仁の何処がいいんだか」

「朴……、……川上、覗きは好かないぞ」

言い返そうとして言葉が見つからず、勇氣は話をすり替えた。

「私はアキちゃんさえいればいいの」

「ホントお前ら相思相愛だな」

からかうように言うとな彼女は少し頬を膨らませた。

「最近二人だつて相思相愛でしょ。おホモ達なんて私が認めないからね」

「気色悪いこと言うな。大体おホモ達つて何だよ」

うんざりした気分で言うとな彼女は妙に身体をくねらせて言う。

「まー、いやあね、カマトトぶつちゃってえー」

「どこのオバサンだ」

「ってか、本当は覗くつもりなんかなかったんだけどさ、ほら陸上部の機材ってこっちにあるでしょ。正直、どのタイミングで出るか迷っただけだ」

「ああ、それは悪かったな」

勇氣はそう言って微かに笑う。

確かに陸上部の機材はここにあった。その前で勇氣が告白されていたためになかなか出てこれなかったのだろう。

一応彼女なりに気を遣ったらしい。

「さっきの先輩？　一年では見ない顔だったけど」

「ああ、二年の」

「弓道に専念したいから」って……あはは。相変わらずだねえ」
声真似をされて勇氣はむすっとする。

好きな子がいる、という断り方よりも、その方がずっとマシなのだ。中学の頃からそう言う断り方をしてきた。クラスメートであり、比較的仲良くしていた川上の耳にはどうしてもそう言う噂が入ってしまうのだ。今までを知っている川上にしてみれば全く同じ言い回しでは笑いの種にしかないのだろう。

相手を傷つけないために苦心しながら断った勇氣にしてみればわかられて気持ちいい訳がない。

「本当に岩くんは硬派だね。誰が告白しても、ゼーんぜん。ずっと一人でいる気かとも思ってたけど、最近じゃアキちゃんにべったりだもんね。少しヤキモチ」

「べったりって……止めるよ、いちいちそっちの方面に繋げるの」

「あーあ、私も男に生まれたかったな……なーんて」

冗談、と言いたげにトモミは舌を出した。

そして不意に哀しげな表情を浮かべる。

落ち込んでいる風だった。

「ねえ、アキちゃんからお父さんの事、聞いてるよね？」

「ああ」

「正直、私ずっと生きているって思っていたんだ」

聞くべきかどうか迷った。

だが、彼女は聞いて欲しそうな顔をしていた。

「何でだ？」

「私の一番古い記憶はね、火の中にいるの。アキちゃんとふたりでそこに、男の人が手に火傷を負いながら助けに来てくれるの。……あの人が、そうだって気が付いたのは随分後になってのことだけど、死んでいないって思った……ううん、多分死んで欲しくないって思っていたんだと思う」

例え、あの人が自分で火を放ったとしても、とトモミは小さく付け加える。

彼女に取って記憶の中で助けてくれた男は間違いなく英雄なのだろう。だから死んだなんて思いたくなかったのだ。

物心ついて、分かるようになって、彼女が気が付いた時には、彼は戸籍上では死んだ人物になってしまっていた。だが、失踪届から変化した死亡では納得がいくわけがない。

生きていると信じるには少し足りないけれど、死んでしまったと考えるには及ばないのだ。だから半信半疑でも生きていると信じていた。

そして、今になってようやくその存在が見えてきた。

彼女も明弥も、会って聞きたいことは山ほどあるのだろう。それは勇気が父親に会って話したいのとは少し事情が違う。彼らは父親が生きていたという確信が出来たことを無条件に喜べないのだ。

「岩くん、探せないの？ 警察じゃなくて、その……力でさ」

最後の部分だけは少し言いくそうだった。

信じていないと言うよりは、勇気がその力を嫌っていると言うことを知っているからだろう。彼女は多少無神経に踏みこんでくる事はあるが、相手が本当に触れて欲しくないところには絶対立ち入らない。そういう人だ。

その彼女が口にしたのだから気持ち的に余裕がないのだろう。

勇気は髪を少し掻き上げた。

「難しいだろうな」

「そっか」

「神道の力は悪いものを浄化するって意味合いが強い。人捜しとな

ればもつと効率良く探せる人がいるだろう」

「それって探偵とか？」

「勇気は領いた。」

「それか、占い師」

「占い師……かあ。駅前の占いの館でも行つて来ようかなあー。うーん、でも高いよねえ。どっかで知り合えればいいんだけど」

「占い師、と考えて、勇気の中に一人思い浮かぶ。」

「彼女は明弥の知人のはずだ。」

「明弥はミモリユリコと連絡を取れないのか？」

「え？ 誰それ」

「きょんとんとして見つめられ、逆に勇気も首を傾げた。」

「？ 川上と一緒にだったって聞いているが…… バレンタインの時の事故の」

「あの人？ 占い師なの？」

「正確にそうかは知らないが、多分、そう言う才能のある人物だとは思うな」

「そう……なんだ。じゃあ、聞いてみようかな」

「少し、気落ちしたような様子の彼女に少し狼狽する。今にも泣き出しそうなきがしたのだ。」

「川上？」

「少し慌てて声を掛けると川上はきつと勇気を睨み付けてきた。」

「岩くんっ！」

「え？ はい」

「勢いにつられ、つい改まった口調になる。川上は今にも襟首を掴んできそうな勢いで勇気に顔を近づけて来る。いやむしろキスが出来そうなほど近いと言った方がいいだろうか。」

「彼女とここまで接近しているのは奇妙な感じがした。」

「もし、私が男だったら、岩くんと親友だった？」

「……何だか仮定が間違っている気がするが」

「……いいの。ね、私男だったら、岩くんとアキちゃんみたいに何でも」

話せるような関係になっていた?」

勇氣は少し吹き出す。

何を真剣に言い出すのかと思えばこれだ。言いたいことをはつきりと口にして、時々憎まれ口を叩く彼女だったが、川上のこういうところは可愛いと感じてしまう。

「お前、どっちに嫉妬しているんだ?」

「う……わかんない」

「バカか。明弥にとってお前が一番なのは分かっているだろう? もし嫉妬するなら俺の方だ」

「でも、アキちゃん、私に話さないこと、岩くんに話すし、岩くんだって」

「それはタイミングの問題だ。それに俺の場合、最初あいつを疑っていたから色々調べて知っているだけだよ」

少なくとも今は彼が意図的にインパクトを起こしている訳ではないことを知っている。調べたことこそ後悔していないが、疑ったことは彼に悪いことをしたと思っている。

「ま、少なくとも俺は川上が女で良かったと思うよ」

「……へ?」

勇氣は少し嫌味を込めて笑う。

「男だつたらこの距離は勘弁して欲しいな」

「……あっ!!」

ようやく自分の不自然な接近に気が付いたのか彼女は声を上げ、

勇氣から離れた。その顔は真っ赤だった。

「い、岩くん、冷静すぎっ!」

「慣れているから」

相手は酔っぱらった母親か藤岡だけど。

完全に誤解した様子のトモミは赤い顔のまま、いーつと歯をむき出しにした。

「……女つたらしっ!」

「言ってる。……ところで、手伝うか?」

「ん？」

「機材運ぶの。どうせ一人じゃ運べない量なんだろう？ 時間取らせだし、途中までなら手伝う」

言っとトモミは何とも言い難い表情で目元を隠した。

彼女は誤解を受けやすいのか、女の教師や女の先輩との相性が悪いのを知っている。特に会ったばかりならなおさらだ。だから今回もそうなのだと思ったが、どうやら凶星だったようだ。

「……岩くんの女ったらし」

「言ってる」

勇気は笑って、彼女の頭を軽く叩いた。

2 てんとう虫の夢

指を這うようにてんとう虫が歩き始める。

天を目指すように上へ、上へと登っていく。

指を下に下げると、方向を変え、再び上に向かって歩み始める。

てんとう虫は、延々と空を目指す蟲。

彼女は、人差し指を這うてんとう虫を親指で挟み込んだ。

潰れるだろうか。

どれだけの力で？

どんなふうに？

悲鳴を上げるだろうか。

人には聞けないその声で。

てんとう虫は指の間でもがく。

輝く赤と黒の背中が、醜く歪む。

少女は冷めた瞳でそれを見つめた。

残酷さも、無邪気さもない。

ただ無感情なまでに冷ややかな認識するだけの目で。

「レイカ」

呼びかけられて彼女は顔を上げた。

縁側に腰を下ろした兄は青白い顔をこちらに向けている。病弱なのだ。家の主でありながら病の床に伏せて滅多に顔を見せない。日にも当たらないから顔はいつも青白い。ただ優しい笑顔をこちらに向ける。

古武の家には自分と母親の違う兄が三人いる。その中で本当に古武の血を引いているかと思うほど大人しく儚いのが一番上の兄だった。正直、好きなのか嫌いなのかよく分からない。

兄の後ろにはこちらを伺うように幼い子供が立っていた。不安そ

うな顔をしている。

レイカは静かにその子供を見た。

白いワンピースに、麦わら帽子をかぶった瞳の大きな子供。妹だろう。父親の違う、八歳年下の妹。まだ何も知らない。両親が死んで、母親の縁を頼ってこの家にやって来た。

古武の家には何の縁もない。自分とだけ、血の繋がる子供。本人はまだ何も知らない。

「林、明香ちゃんだよ。今日からこの家で一緒に暮らすことになる」「そう」

レイカは冷ややかに答える。

要らない。

興味がない。

「仲良くしてあげてくれないか？ 僕はこんなだから、構ってもあげられない。それに、この家でレイカが一番年が近い」

どうでもいい。

年齢なんて。

でも、当主の言葉が絶対なのだという決まりだ。この家では。

この家で庇護を受けて生活するには、そうして従う事が一番楽な形だった。

「……」

無言で明香を見上げると、彼女はびくつと方を振るわせた。

怖いのだ、自分が。

自分では自分の何が怖いのかよく分からなかった。でも経験で年下や同年代は自分を恐れ、年上の人達は自分を気味が悪いと思うことを知っている。

レイカは明香を見つめ、手の力を少し緩める。

ようやく解放されたてんとう虫は焦って逃げ出すように空へと飛んでいく。

明香がその虫を目で追った。

「おいで」

レイカは言う。

彼女は一瞬何を言われたのか分からないという風に目を丸くした。そしてようやく言葉を認識したのか、零れるような笑顔を向ける。兄の儚い微笑みとは違う、全身からあふれ出すような笑顔。

「……うんっ！」

縁側に出されていたサイズの大きいサンダルを引っかけ、庭に飛び出してくる。

少女の柔らかい小さな手が、自分の腕を掴んだ。

少し力を込めただけで簡単に折れてしまいそんな細い手。それなのに、暖かくどこか力強い。

どうして、笑うのか。

自分のこと、怖いではなかったのか。

見つめる彼女の顔に、てんとう虫が止まった。

一瞬驚いた顔をする彼女の頬に触れるとてんとう虫がレイカの指先に移る。そのまま再び天高く舞い上がった。

てんとう虫を見送って、明香は、少し照れたようにはにかんだ。

つられたようにレイカも笑う。

笑ったのは随分と久しぶりのような気がした。

(……………?)

彼女はぼんやりと目を開いた。

何か夢を見ていたような気がしたが、よく思い出せなかった。

とても懐かしい古い夢だったような気がする。

不意に視界に自分を覗き込む男の姿を見つける。

この人は、誰だっただろうか。ああ、そうだ。

(……………昔の自分によく似た人、)

「……………なん……………じょう、くん？」

「！」

声を掛けると彼は驚いた用に目を見開いた。

「レ……イカ……さん？」

そう呼ばれるのも随分と久しぶりな気がした。
どれだけ長い時間合っていなかっただろう。

彼は少し老けた。でも顔の作りはあの時とあまり変わらない。いや、前よりも少し表情が優しくなっただろうか。

(……前よりも？)

一瞬意識が混乱する。

ゆっくり思い出す。

自分の事と、彼との関係を。

そう、この人は、自分の、兄だ。

「……？ 斎兄さん？ 帰ったの？」

鈴華は半分寝ぼけた状態で問いかける。
今何時だろうか。

仕事が終わって帰ってきているのだから、もう深夜になっている
だろうか。

「……っ」

斎は酷く複雑そうな表情を浮かべていた。

いつも穏和に微笑む兄がこんな風な表情を浮かべているのを見る
のは初めてかもしれない。泣きそうな、哀れむような、それなのに
何処か喜んでいいるような色々入り交じった感情を殺し損ねたとい
うような複雑な顔。

「どうか、したの？」

「え……いえ。このところ少し体調が悪いと聞いたので、大丈夫で
すか」

「大丈夫、兄さんは……心配しす……ぎ」

再び眠りに落ちていくのを感じた。

問いかけるように呼ぶ斎の声には答えられなかった。

鈴華は目を瞑り、眠りに身を委ねる。

まだ熱があるのだ。

身体が熱い。

「…………あなたって人は、どこまでつ
吐き捨てるような齋の声が聞こえた。
（あなた、ってだあれ？）

…………誰のことを言っているの？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6838w/>

ウィッチクラフト Ain Suph Aur

2011年11月4日05時28分発行